

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第226集

し せ き だ ん お さ ん こ ふ ん
史跡 断夫山古墳

2024

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

草薙神劍、日本武尊、宮簀媛命の伝説に彩られた熱田神宮は悠久の時を超え、国家鎮護の神宮として特別な扱いを受ける一方、「熱田さま」、「宮」と呼ばれ親しまれてきました。その熱田神宮の杜に寄り添うように佇んでいるのが史跡 断夫山古墳です。

史跡 断夫山古墳を所有・管理する愛知県は、史跡の適切な保存と公開・活用を図り、史跡の追加指定、保存活用計画の策定を進め、今後の整備の方向性についても検討する目的で、史跡 断夫山古墳調査事業に名古屋市と共同で取り組むことになりました。このたびその第一歩として、古墳の範囲・構造及び遺物の残存状況等を把握し、考古学・歴史的情報とその特徴を明らかにするための発掘調査を実施しました。

本書はこの成果をまとめたもので、今後、本書の成果が史跡 断夫山古墳の恒久的な保存・整備、公開・活用につながることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、調査主体である愛知県や名古屋市教育委員会、史跡断夫山古墳調査検討委員会をはじめ、関係者及び関係諸機関のご理解とご協力をいただきましたことに対して、厚く御礼を申し上げます。

令和6年3月

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長 岡本 範重

例 言

1. 本書は、名古屋市熱田区旗屋一丁目地内に所在する史跡 断夫山古墳（県遺跡番号 012019）の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、愛知県と名古屋市による史跡 断夫山古墳調査事業にかかる学術調査として、愛知県教育委員会事務局生涯学習課文化財保護室（令和2年度）、同県民文化局文化部文化芸術課文化財室（同3・4年度）より委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は、令和2年度が令和2年11月から同3年1月、同3年度が令和3年11月から12月、同4年度が令和5年2月から3月である。
4. 調査面積は、令和2年度が90㎡、同3年度が100㎡、同4年度が100㎡である。
5. 調査担当者は、令和2年度が池本正明（調査課長、現調査研究主任）、武部真木（調査研究専門員、現主任専門員）、同3・4年度が堀木真美子（主任専門員）、早野浩二（調査研究専門員）である。
6. 発掘調査にあたっては、次の各関係機関のご指導とご協力を得た。
愛知県教育員事務局生涯学習課文化財保護室（令和2年度） 同県民文化局文化部文化芸術課文化財室（同3・4年度）
愛知県埋蔵文化財調査センター 名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護室
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門
愛知県都市・交通局公園緑地課 ハローワーク名古屋南（名古屋南公共職業安定所） 岩間造園株式会社
7. 発掘調査業務の一部については、株式会社二友組（令和2・3年度）、橋本技術株式会社（同4年度）から支援を受けた。
8. 報告書作成にかかる整理作業において、一部の出土遺物の実測を株式会社イビスク、トレースを株式会社文化財サービス、出土遺物の写真撮影を有限会社写真工房遊にそれぞれ委託した。
9. 発掘調査、報告書作成の過程で、断夫山古墳調査検討委員会の各氏を始め、次の各氏からご指導を得た。
広瀬和雄 福永伸哉 高橋克壽 黒澤 浩 廣瀬憲雄 金田明大 藤井幸司 大澤正吾（以上、断夫山古墳調査検討委員会）
青柳泰介 赤塚次郎 浅田博造 荒木正直 伊藤秋男 今西康宏 岩崎郁実 岩原 剛 大西 遼 岡本直久 岡安雅彦
河合君近 川崎志乃 河内一浩 佐久間正明 柴垣勇夫 清水政宏 白川美冬 鈴木一有 高橋佳子 富田航生 中井正幸
中里信之 服部哲也 藤井康隆 北條芳隆 堀内祐花 森 泰通 若狭 徹
10. 本編の執筆は、第2章（2）を洲崎和宏（愛知県埋蔵文化財調査センター）、第5章（1）を株式会社パレオ・ラボ AMS年代測定グループ、同（2）を森 将志（株式会社 パレオ・ラボ）、同（3）を鬼頭 剛（愛知県埋蔵文化財センター主任専門員）・古澤 明（株式会社 古澤地質）、それ以外を早野浩二が担当した。
11. 遺構番号は原則として発掘調査時に用いたものを踏襲した。なお、使用する遺構記号は以下のとおりであるが、厳密な統一性はない。
SK：土坑 SD：溝 SP：柱穴 SX：その他不明遺構
12. 発掘調査と本書で使用した座標は、国土座標第VII系に準拠した。表記は新測地系（世界測地系）による。
13. 本書で使用する土層の色調については、『新版標準土色帖』を参考に記述した。
14. 発掘調査の記録（実測図、写真等）は、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターで保管している。なお、遺跡の略記号は「2NDP」である。
15. 遺物は愛知県埋蔵文化財調査センター（〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24）で保管している。
16. 本書の編集は早野浩二が担当した。

目次

第1章 遺跡の位置と環境	1
(1) 位置と現状	1
(2) 地形と地質	1
(3) 周辺の遺跡	2
第2章 調査の経緯と経過	4
(1) 古墳の履歴と既往の調査	4
(2) 調査の経緯	10
(3) 調査の方針と経過	12
第3章 発掘調査	18
(1) 20区	18
(2) 21A区	22
(3) 21B区	25
(4) 22A区	26
(5) 22B区	30
第4章 出土遺物	31
(1) 円筒・朝顔形埴輪	31
(2) 形象埴輪	40
(3) 須恵器	41
(4) 古墳築造以前・以後の遺物	42
第5章 自然科学分析	46
(1) 放射性炭素年代測定	46
(2) 花粉分析	49
(3) 断夫山古墳の周囲で観察される地層と火山灰分析	50
第6章 総括	54

遺物一覧表

写真図版

〈挿図 目次〉

第 1 図	遺跡の位置 (1:5,000 万 / 1:100 万)	1
第 2 図	南西上空からの断夫山古墳と周辺	2
第 3 図	断夫山古墳と周辺の遺跡 (1:10,000)	3
第 4 図	史蹟名勝天然記念物調査報告書の古墳	4
第 5 図	以前の墳丘測量図 (1:2,000)	5
第 6 図	墳丘測量図 (1:1,000)	6
第 7 図	墳丘断面図 (1:1,000)	7
第 8 図	断夫山古墳採集の埴輪と須恵器 (1:5)	9
第 9 図	調査区配置図 (1:1,000)	13
第 10 図	20 区上面平面図 (1:100)	19
第 11 図	20 区下面平面図・土層断面図 (1:100)	20
第 12 図	20 区周濠 015SD 遺物出土状況図 (1:50)	21
第 13 図	21A 区平面図・土層断面図 (1:100)	23
第 14 図	21A 区遺物出土分布図 (1:100)	24
第 15 図	21A 区遺構平面図・土層断面図 (1:50)	24
第 16 図	21B 区平面図・土層断面図 (1:100)	25
第 17 図	21B 区遺構平面図・土層断面図 (1:50)	26
第 18 図	22A 区平面図・土層断面図 (1:100)	28
第 19 図	22A 区遺物出土分布図 (1:100)	29
第 20 図	22B 区平面図・土層断面図 (1:100)	30
第 21 図	埴輪の出土重量分布	31
第 22 図	色調・焼成の比較	32
第 23 図	(復元) 計測値の比較と規格の関係	33
第 24 図	試掘調査出土円筒・朝顔形埴輪実測図 (1:5)	33
第 25 図	20 区周濠 015SD 下層出土円筒・朝顔形埴輪実測図 (1:5)	34
第 26 図	20 区周濠 015SD 下層・上層出土円筒・朝顔形埴輪実測図 (1:5)	35
第 27 図	21A 区・21B 区出土円筒・朝顔形埴輪実測図 (1:5)	36
第 28 図	22A 区出土円筒・朝顔形埴輪実測図 (1:5)	37
第 29 図	22A 区溝 003SD 出土円筒・朝顔形埴輪実測図 (1:5)	38
第 30 図	円筒・朝顔形埴輪の各種調整拓影 (1:1)	39
第 31 図	形象埴輪実測図 (1:5)	40
第 32 図	須恵器実測図 (1:4)	41
第 33 図	20 区出土土器・陶磁器実測図 (1:4)	43
第 34 図	20 区土坑 009SK 出土土器・陶磁器・石製品実測図 (1:4)	44
第 35 図	21A 区・21B 区・22A 区出土土器・陶磁器・石製品実測図 (1:4)	45
第 36 図	暦年較正結果	47
第 37 図	分析用試料採取地点	50
第 38 図	地点 1 (21A 区) の柱状図	51
第 39 図	地点 2 (21B 区) の柱状図	51
第 40 図	墳丘の設計原理と復元案 (1:1,000)	55
第 41 図	周濠・周堤がある前方後円墳 (帆立貝式古墳) の諸例 (1:2,000)	56
第 42 図	今城塚古墳の墳丘復元 (1:2000)	57
第 43 図	墳丘・周濠・周堤復元案 1 (1:1,000)	58
第 44 図	墳丘・周濠・周堤復元案 2 (1:1,000)	59
第 45 図	脚付連結須恵器の比較 (1:10)	62
第 46 図	墳丘測量・復元図と発掘調査の成果 (1:1,000)	64

〈挿表 目次〉

第 1 表	断夫山古墳関連年表.....	8
第 2 表	地中レーダー探査の概要	8
第 3 表	調査体制.....	10
第 4 表	事業の計画と進捗.....	10
第 5 表	史跡 断夫山古墳調査検討委員会の構成	11
第 6 表	史跡 断夫山古墳調査検討委員会の開催状況.....	11
第 7 表	調査経過一覧	12
第 8 表	色調分類と出土重量.....	32
第 9 表	色調分類との対応関係.....	32
第 10 表	測定資料および処理.....	46
第 11 表	放射性炭素年代測定と暦年校正の結果	47
第 12 表	産出花粉孢子一覧表.....	49
第 13 表	火山灰分析結果	51
第 14 表	脚付連結須恵器出土地名表	63

〈写真図版・付図 目次〉

写真図版 1	20 区上面 20 区周濠 015SD 上面 20 区周濠 015SD 遺物出土状況	写真図版 12	20 区円筒・朝顔形埴輪 (1) 20 区円筒・朝顔形埴輪 (2)
写真図版 2	20 区完掘状況 20 区周濠 015SD 土層断面 20 区周濠 015SD 外側	写真図版 13	20 区円筒・朝顔形埴輪 (3) 20 区円筒・朝顔形埴輪 (4) 20 区・試掘調査円筒・朝顔形埴輪
写真図版 3	20 区周濠 015SD 完掘状況 20 区周濠 015SD 土層断面 20 区と前方部	写真図版 14	21A 区円筒・朝顔形埴輪 21A 区・21B 区円筒・朝顔形埴輪 22A 区円筒・朝顔形埴輪 (1)
写真図版 4	21A 区完掘状況 21A 区墳丘部分 (a) 調査状況 21A 区墳丘部分 (a) 完掘状況	写真図版 15	22A 区円筒・朝顔形埴輪 (2) 22A 区円筒・朝顔形埴輪 (3) 22A 区円筒・朝顔形埴輪 (4)
写真図版 5	21A 区玉石垣間 (b) 完掘状況 21A 区玉石垣外側 (c) 土層断面 21A 区玉石垣外側 (d) 土層断面	写真図版 16	22A 区円筒・朝顔形埴輪 (5) 22A 区円筒・朝顔形埴輪 (6) 22A 区円筒・朝顔形埴輪 (7)
写真図版 6	21A 区遺物出土状況 21A 区中世の土坑 003SK 21A 区玉石垣間 (b) の土坑群	写真図版 17	22A 区円筒・朝顔形埴輪 (8) 22A 区円筒・朝顔形埴輪 (9) 21A 区・22A 区形象埴輪
写真図版 7	21B 区と後円部 21B 区完掘状況 21B 区緩斜面 010SD	写真図版 18	埴輪の各種技法等
写真図版 8	22A 区全景 22A 区溝 004SD 遺物出土状況 22A 区墳丘部分 (a) 完掘状況	写真図版 19	20 区・22A 区須恵器 20 区古墳築造以前・以後の遺物 21A 区古墳築造後の遺物 (1)
写真図版 9	22A 区溝 004SD 土層断面 22A 区玉石垣間 (b) 完掘状況 22A 区溝 003SD 土層断面	写真図版 20	20 区近世の遺物 (1) 20 区近世の遺物 (2)
写真図版 10	22A 区玉石垣外側 (c) 完掘状況 22A 区溝 002SD 完掘状況 22B 区土層断面	写真図版 21	22A 区古墳築造以前・以後の遺物 21A 区古墳築造後の遺物 (2) 22A 区古墳築造後の遺物
写真図版 11	史跡 断夫山古墳遠景 史跡 断夫山古墳東側近景	付図 1	断夫山古墳地中レーダー探査 タイムスライス反映図 (1:1,250)
		付図 2	各地点のプロファイル図

報告書抄録

ふりがな	しせき だんぷさんこふん							
書名	史跡 断夫山古墳							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第226集							
編著者名	早野浩二・洲嵯和宏・パレオ・ラボAMS年代測定グループ・森 将志・鬼頭 剛							
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL0567(67)4161							
発行年月日	西暦 2024年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせき 史跡 だんぷさんこふん 断夫山古墳	あいちけん なごやし 愛知県名古屋 あつたく はたや 熱田区旗屋 いっちょうめちない 一丁目地内	23109	012019	35度 07分 52秒	136度 54分 14秒	2020.11～ 2023.03	290	史跡 断夫山古墳 調査事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡 断夫山古墳	古墳	古墳時代 鎌・劉時代 江戸時代	古墳周濠 溝・土坑・整地層	円筒・朝顔形埴輪 形象埴輪・須恵器 山茶碗、土師器皿 瀬戸・美濃窯製品		前方部周濠の検出 周堤と二重周濠？ 蓋・家形埴輪の出土 装飾須恵器の出土 周濠の浚渫 古墳周辺の整地		
要約	<p>発掘調査は愛知県と名古屋市による史跡 断夫山古墳調査事業にかかる学術調査として実施。前方部両側と後円部主軸線上付近の墳丘裾から周濠・周堤が想定される部分に調査区を設定。併せて二重周濠の有無の確認を目的とした調査区を設定。</p> <p>前方部東側で周濠外側斜面と周堤？、後円部北側で周濠状の落ち込み、周堤？と外濠？、前方部西側で周濠状の落ち込み、周堤？、後円部北東で外濠？を検出。調査区で葺石、その形跡は未検出。墳丘規模の計測値はいずれも概算で、全長 150m、後円部径 80m、前方部長 70m、前方部幅 120m（従来の概算の計測値を踏襲）。</p> <p>円筒・朝顔形埴輪が出土。形象埴輪（蓋・家）はごく少ない。装飾須恵器（脚付連結須恵器）が出土。須恵器は東山 10 号窯式期から東山 61 号窯式期に対応し、6 世紀前半の年代を想定。</p> <p>古墳の裾や周囲は後世の宅地、耕作地、公園整備等による改変が著しいことが判明。</p>							

第1章 遺跡の位置と環境

(1) 位置と現状

史跡 断夫山古墳は愛知県名古屋市熱田区旗屋一丁目地内に所在する東海地方最大級の前方後円墳である(第1図)。古墳は前方部東南端が欠失するものの、近代以降は熱田神宮が管理し、墳丘への人の立入りが制限されたこともあって、ほぼ原形を保つ。墳丘にはクロガネモチ、クス、ヤマハゼ、クヌギ、シロダモ、アオキ、ネズミモチ、ツバキ等が繁茂し、それらの根張りが墳丘の流出を防止している。良好な遺存状態に加え、古墳時代の尾張地方の政治勢力を表徴するものとして、学術上・歴史上の価値が高いことから、昭和62年(1987)7月9日に史跡指定され(文部省告示第94号)、その保存が図られている。

遺跡の所在

遺跡の現状

史跡指定

(2) 地形と地質

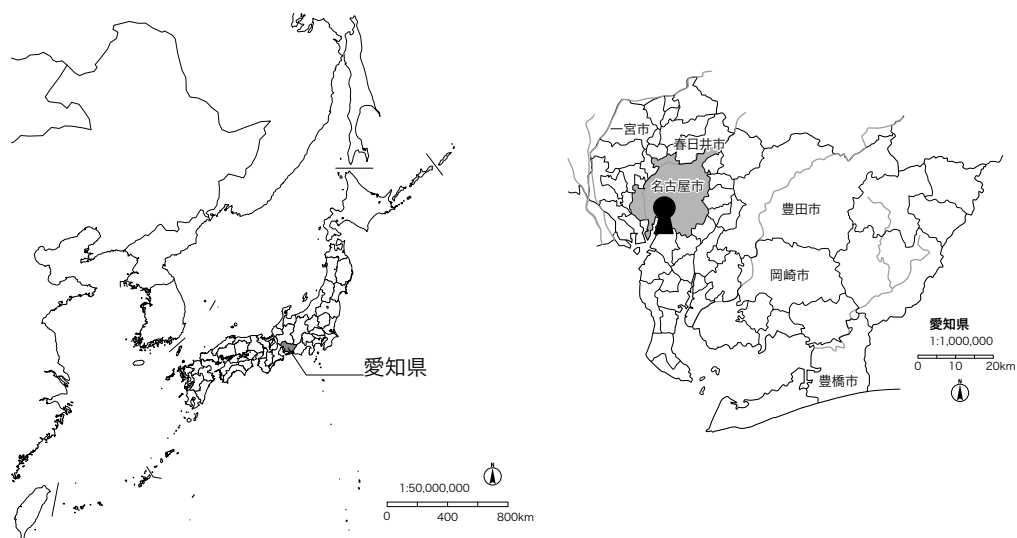
名古屋市の中央部を占める台地は、伊勢湾に注ぐ庄内川と天白川に挟まれた南北に延びる洪積台地で、山崎川等の中、小河川による開析を受け、北西側から那古野、熱田、御器所、瑞穂、笠寺の各台地に区分されている。古墳は名古屋城付近を北端とし、南方へ舌状にのびる熱田台地の南端西縁辺(標高5mから6m)に立地し、台地南端に鎮座する熱田神宮北西約0.4kmに位置する。

台地地形

西に広がる沖積面はいわゆる海拔ゼロメートル地帯で、「尾州のだんぶ山と美濃の関とは、舟渡にて有りし(奥村本正事記)」と古記録に述べられていること、江戸時代に東海道宮の渡し熱田神宮南西至近にあったこと等を勘案すれば、海が入り込んでいたようである。古墳が築かれた基盤となる熱田層は、6万年から5万年前に海成の堆積によって形成された砂層とシルト層の互層で、上部は風化により粘土化が進行し、明るい黄橙色を呈する。

沖積面

熱田層



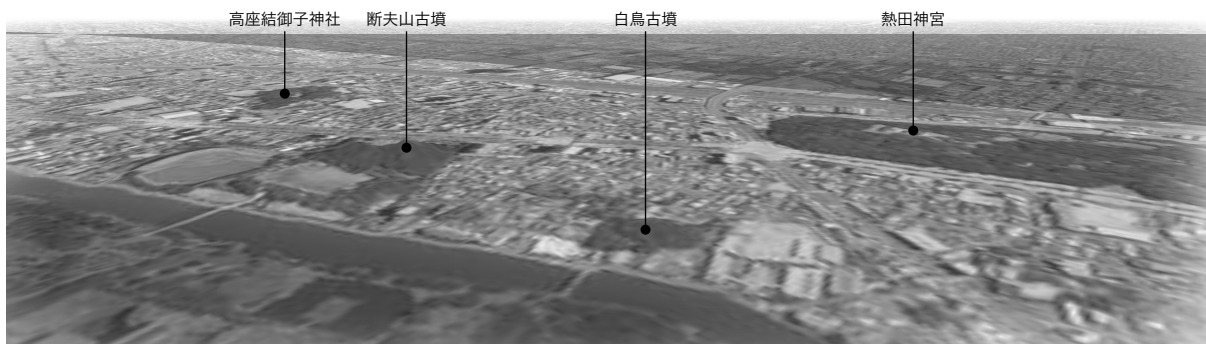
第1図 遺跡の位置(1:5,000万/1:100万)

(3) 周辺の遺跡

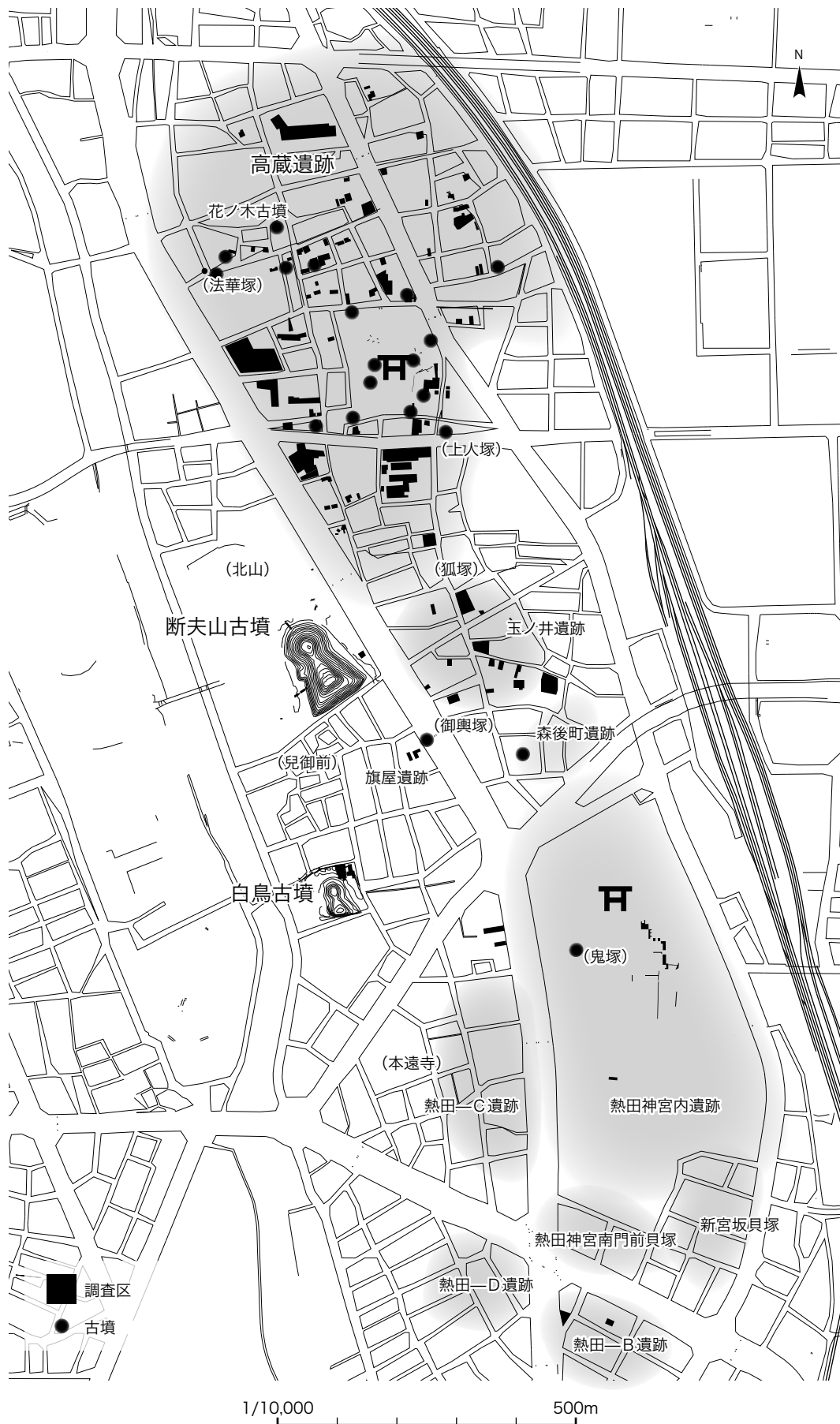
- 縄文時代
弥生時代
古墳時代
白鳥古墳
- 古墳の東には縄文時代晩期の貝層と墓域が確認されている玉ノ井遺跡がある。そのすぐ北には規模、内容とも傑出する弥生時代の集落遺跡である高蔵遺跡がある。
- 古墳時代の遺跡としては、南約 400m に日本武尊の白鳥伝説に因んだ白鳥古墳がある。古墳は断夫山古墳と同じく前方部を南に向けた全長約 70m の前方後円墳で（第 2 図）、1837 年（天保 8）に暴風雨で石室が露呈した際、豊富な副葬品が知られることとなった。1985・86 年（昭和 60・61）には法持寺改築工事に伴い、名古屋市教育委員会による古墳北東の周溝部分の発掘調査が実施された。北約 150m の「北山」古墳等、消滅した古墳（前方後円墳）の存在を想定する向きもある。
- 「北山」
- 高蔵古墳群
- 先述の高蔵遺跡の中央付近の高座結御子神社周辺には古墳群が分布し、高蔵古墳群と呼称されている（第 2 図）。高蔵 1 号墳は径約 18m の円墳で、埋葬施設は南に開口する川原石積みの横穴式石室である。副葬品として、銀装大刀、鉄製釣針等がある。名古屋市教育委員会による計 62 次（2021 年現在）を数える高蔵遺跡の発掘調査等においては、墳丘が削剝された方墳も数多く検出されている。遺跡の東半においては、古墳時代の竪穴建物等の遺構が確認されている。
- 熱田神宮の馬具
- 現在、熱田神宮には朝鮮半島から舶載された可能性が高い金銅装馬具が伝わる。1867 年（慶応 3）に地元住民によって持ち込まれたもので、上記のいずれかの古墳の副葬品とも想定されている。
- 古代・中世
- 熱田神宮周辺は古代から続く港湾都市、宗教都市として栄え、特に戦国時代に織田信長の庇護を受け、江戸時代に東海道宮宿が整備されると大いに賑わった。関連する中世を主体とする遺跡としては、熱田神宮内遺跡、新宮坂貝塚、熱田—B 遺跡、熱田—C 遺跡、熱田—D 遺跡等がある（第 3 図）。

[参考文献]

- 三渡俊一郎 1981 『熱田・瑞穂区の考古遺跡』文化財叢書第81号 名古屋市教育委員会
 名古屋市教育委員会 1989 『白鳥古墳第II次発掘調査報告書』名古屋市文化財調査報告21
 名古屋市 1997 『新修 名古屋市史』第一巻
 名古屋市 2008 『新修 名古屋市史』資料編 考古1
 名古屋市教育委員会 2021 『埋蔵文化財調査報告書92 高蔵遺跡（第61次・第62次） 正木町遺跡（第22次） 春日野町遺跡（第6次）』名古屋市文化財調査報告109



第 2 図 南西上空からの断夫山古墳と周辺



第3図 断夫山古墳と周辺の遺跡 (1:10,000)

第2章 調査の経緯と経過

(1) 古墳の履歴と既往の調査

江戸時代の古墳

江戸時代の古墳は、保全が必ずしも十分ではなかったようである。18世紀前半に編纂された『尾陽雑記』によると、近年まで高さ五、六間の堀の形が残っていたが、埋もれて畑となったという。江戸時代末期から明治時代初期にかけて刊行された尾張国の地誌『尾張名所図会』には、三月三日は古墳に登ることが許され、干潟の風景を眺望し、遊興にふけた情景が描かれている。

明治時代の古墳

明治9年(1876)には旧教部省により、白鳥陵と併せて熱田神宮の所属地に定められ、熱田神宮によって管理された。しかし、周濠部分は明治初年頃より徐々に埋め立てられて人家が立ち並び、次第に失われていったという。明治時代に撰述された「熱田神宮現今年中行事」(熱田神宮宮庁編『熱田神宮史料』所収)によれば、旧四月八日を日本武尊の死亡の日とし、白鳥御陵(白鳥古墳)において祭礼を催す旨が記述されている。大正16年(1925)には「宮簀媛命之墓」の標柱が建てられ、守衛の詰所を設けて厳重に管理された。

大正時代から戦前
史蹟名勝天然記念物調査

大正10・11年(1921・22)には近隣住民が採集した大型円筒埴輪を柚木和夫氏が譲り受けている。昭和3年(1928)の愛知県史蹟名勝天然記念物調査会委員伊藤文四郎の調査報告書によると、東は商家、住宅、工場が古墳に面して建てられていたようである。

古墳の計測値

古墳は長さ七十一間三尺、後円部径四十五間、前方部幅六十三間三尺、高さ八間の三段築成で、「卵形の葺石が転々と露出」していたこと、後円部南西下段には円筒埴輪列とその周囲に抜き取り痕が認められること、前方部と後円部の接続部分にも埴輪が露出し、径一尺一寸七分の陶質製であること、造り出し頂部から標柱を建てた際、多数の須恵器(杯が多い)が出土したことが述べられている(第4図)。昭和5年(1930)には大場磐雄も愛

段築・葺石・埴輪

大場磐雄の踏査

知県神職会主催の講習会に際して古墳を踏査し、造り出しで多数の須恵器を採取している。須恵器は熱田神宮に所蔵されたとあるが、現在、遺物を確認することはできない。

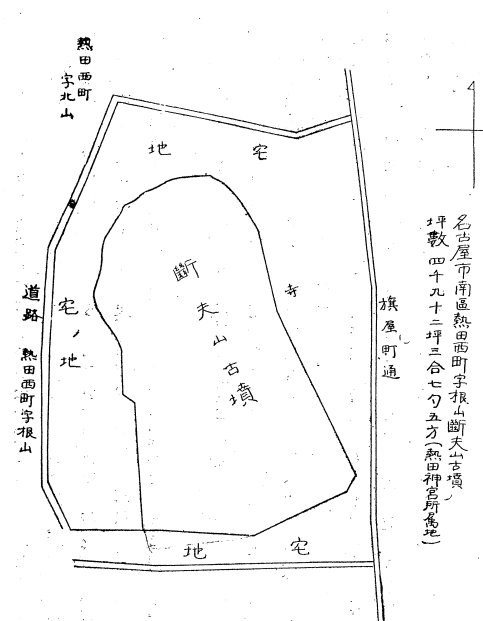
御陵墓祭

昭和13年(1938)に編述された「熱田神宮恒例祭要覧詳」(前掲書所収)には、五月八日に御陵墓祭として、白鳥御陵、「陀武夫御墓」において行われることが記されている。陀武夫御墓(断夫山古墳)は、「姉山乃御墓」、尾張氏息女宮簀媛の墓として祭礼の対象とされていた。

戦後の仮換地

太平洋戦争で一帯は被災し、昭和22年(1947)に名古屋市の戦災復興事業によって仮換地された。その後、愛知県都市公園として整備されてきたが、昭和55年

愛知県都市公園



第4図 史蹟名勝天然記念物調査報告書の古墳

(1980) に換地処分され、愛知県が所有者である旨の登記が行われた。現在は熱田神宮公園の中にあつて、野球場、球技場とともに市・県民の憩いの場として活かされている。

熱田神宮公園

この間、愛知県教育委員会により、古墳の史跡指定を早急に図る必要がある重要遺跡に選定され、依頼を受けた名古屋大学考古学研究室が昭和44年(1969)に墳丘測量調査を実施した(等高線間隔は0.5m)。調査の結果、古墳は墳丘主軸N29°W、全長約151m、後円部径約80m・高さ約13m、前方部幅約116m・高さ約16.26m、くびれ部高さ10.5m、造り出し高さ約4.8mとする計測値が示された(第5図左)。

重要遺跡指定促進
名古屋大学考古学研究室
古墳の計測値

昭和62年(1987)に古墳は国史跡に指定された(文部省告示第94号)。平成元年には第6回東海埋蔵文化財研究会「断夫山古墳とその時代」に併せて、同会断夫山古墳測量班がより詳細な墳丘測量調査を実施した(等高線間隔は0.25m)。概数として示された計測値は、全長150m、後円部径80m・高さ13m、前方部幅120m・高さ16m、前方部最高値標高21.0m、後円部最高値標高18.14mである(第5図右)。その成果を受けて、赤塚次郎が墳丘の推定復元を提示している。その後、深谷淳は地籍図や航空写真を用いて、断夫山古墳の周濠・周堤を推定復元した。

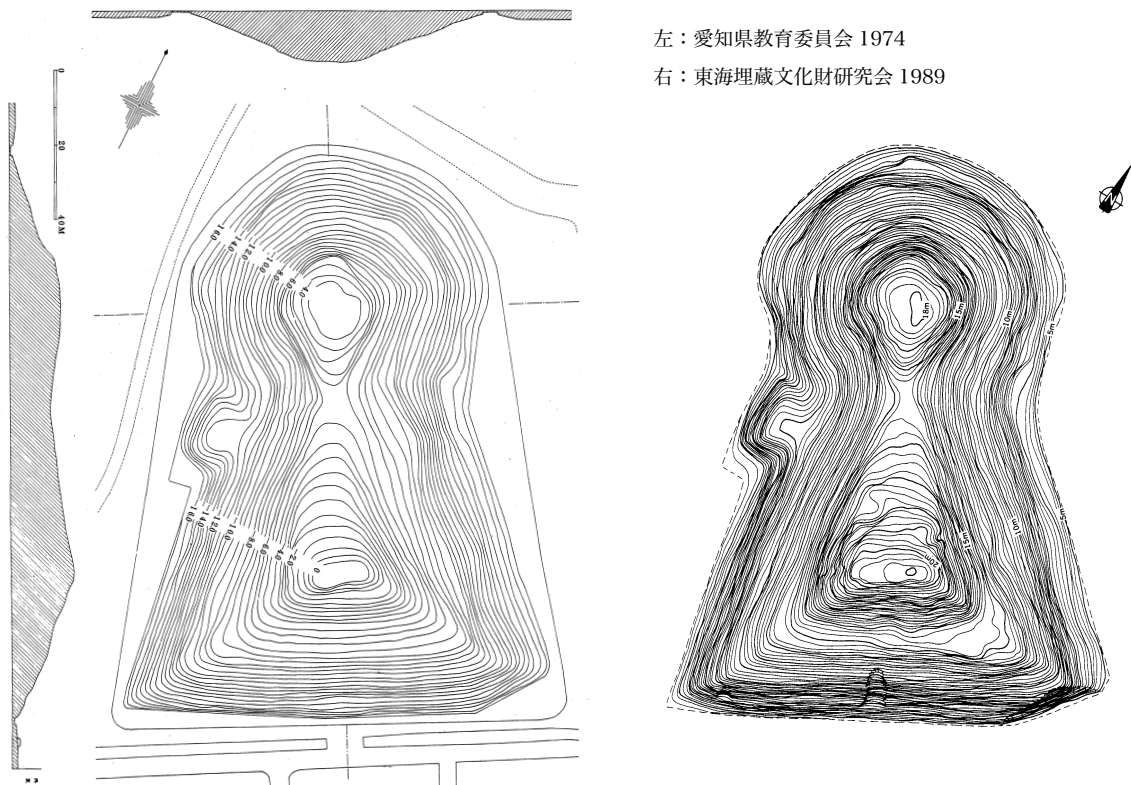
国指定史跡
東海埋蔵文化財研究会
古墳の計測値

墳丘の推定復元
周濠・周堤の推定

平成29・30年(2017・2018)には、名古屋市教育委員会が平成29年度国宝重要文化財等保存整備費補助金を活用して、古墳と周辺の地形測量を実施した(第6・7図)。測量はトータルステーション(TS)・電子平板を利用し、墳丘等については、50分の1の精度(2.5m四方につき1点程度測定)とし、数値データを取得した(等高線間隔は0.2m)。また、平成30・令和元年度には、名古屋市教育委員会が平成30年度国宝重要文化財等保存整備費補助金、令和元年度国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金を活用して、史跡指定範囲外に想定される周濠・周堤等を検討する目的で、地中レーダー探査を実施している(第2表、付図1・2)。

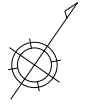
地形測量

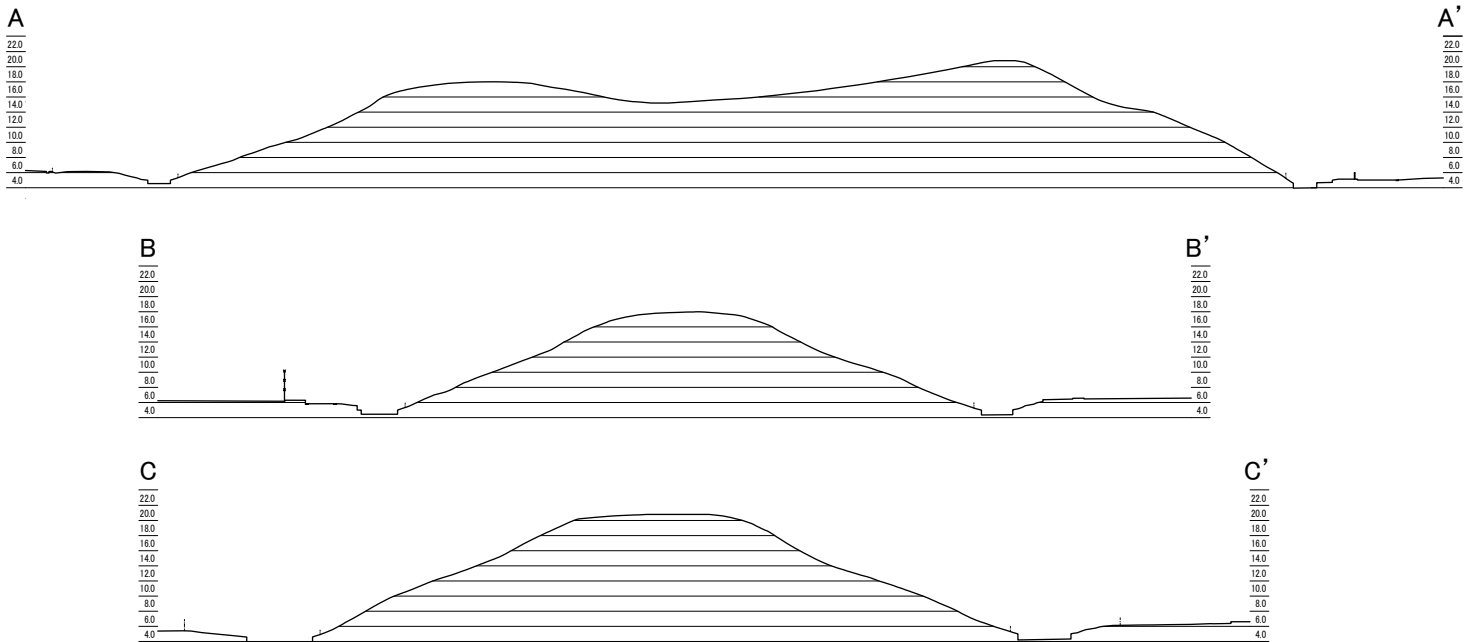
地中レーダー探査



左：愛知県教育委員会 1974
右：東海埋蔵文化財研究会 1989

第5図 以前の墳丘測量図(1:2,000)





第7図 墳丘断面図 (1:1,000)

古墳の名称については、熱田神宮が陀武夫山、地元は断夫山とする。その他、鷲峯山（尾張名所図会、熱田神社問答）、鷲峰山（熱田町奮記）、團浮山、檀風山、段峰山、姉山、根山、蓬莱山等の呼称がある。指定に際しては、断夫山（だんぷさん）古墳の名称が用いられた。正式な発掘調査は実施されていない。埋葬施設についても不明である。

古墳の名称

「だんぷさん」

断夫山古墳の遺物としては、先述の大正年間に採集された埴輪（南山大学蔵）、昭和45年前後に田端勉が造り出して採集した埴輪と須恵器、昭和61年に採集された埴輪と須恵器（名古屋市教育委員会蔵）、その他各団体や個人が採集した埴輪（愛知県陶磁美術館保管等）と須恵器がある（第8図）。

断夫山古墳の遺物

[参考文献]

- 伊藤文四郎 1928「断夫山古墳」『愛知県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第六
 大場磐雄 1930「断夫山古墳の造出について」『考古学雑誌』第20巻第1号 日本考古学会
 愛知県教育委員会 1974『重要遺跡指定促進調査報告—地形測量調査の概要—』
 川西宏幸 1978・79「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2・4号 日本考古学会
 三渡俊一郎 1983「名古屋市熱田白鳥・断夫山古墳の前後関係について」『古代学研究』99 古代学研究会
 南山大学人類学博物館 1984『南山大学人類学博物館館報』第18号（柚木コレクション展）
 名古屋市教育委員会 1985『熱田区・白鳥古墳—法持寺改築に伴う発掘調査の概要—』
 名古屋市教育委員会 1989『白鳥古墳第II次発掘調査報告書』名古屋市文化財調査報告21
 東海埋蔵文化財研究会断夫山古墳測量班 1989「断夫山古墳の測量調査」『第6回東海埋蔵文化財研究会 断夫山古墳とその時代』愛知考古学談話会
 赤塚次郎 1991「尾張型埴輪について」『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第24集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
 名古屋市博物館 1996『名古屋市博物館館蔵品目録』第1分冊 総集・考古編
 森 泰通・尾野善裕 2003「尾張断夫山古墳の時代—故田端勉氏採集資料をめぐって—」『三河考古』第16号 三河考古談話会
 深谷 淳 2009「断夫山古墳の周濠」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』第11号 名古屋市見晴台考古資料館
 辻村全弘 2019「断夫山の伝説—熱田神宮との関連より—」『郷土文化』第73巻第2号 名古屋郷土文化会

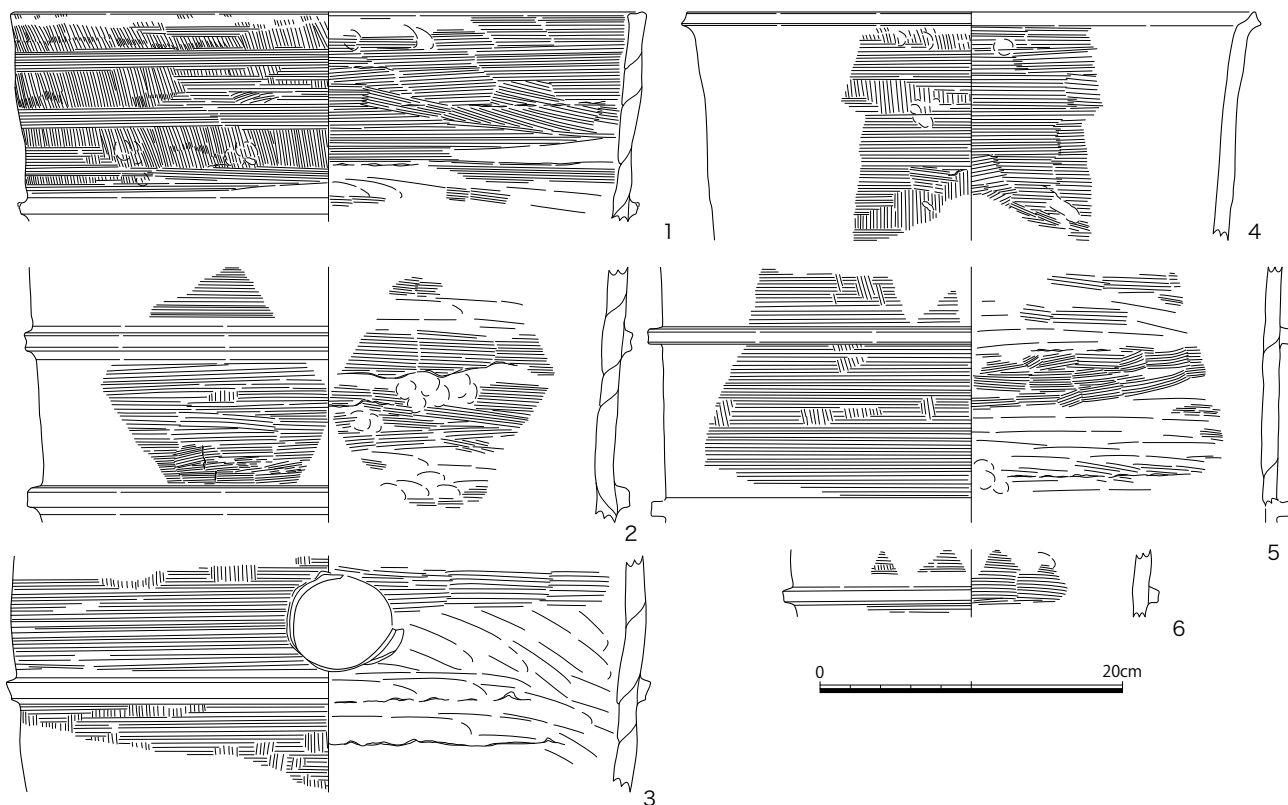
第1表 断夫山古墳関連年表

和暦	西暦	関連事項	備考
長保4年	1002	赤染衛門が熱田神宮へ参詣の際、「なかのもり」で鶯の声を聞き、歌を詠む。	『赤染衛門集』
15世紀後半		亀に似た形の山があるとする(断夫山古墳に関する確実な最も古い記述)。	『名所方角抄』
延宝6年	1678	掘真高(尾張藩士)が「ダンプ山」は廟のようにも見えるが、被葬者は不詳とする。	『厚覧草』
天和3年	1681	兼頼が断夫山古墳の岩戸に一人の乙女が住んでいたという伝説を記す。	『熱田宮雀』
宝永元年	1704	天野信景(尾張藩士)が「なかのもり」を断夫山の林蔵とする伝とする。	『熱田神社問答雑録』
18世紀前半		近年まで高さ五、六間の堀の形が残っていたが、埋もれて畑になったという。	『尾陽雜記』
18世紀後半		鈴木作助(尾張藩士)が「或伝」から根山、磐の跡とし、周りが埋もれて畑になっているとする。	『逢州旧勝録』巻七
		摂州界の大陵造営の工夫招集に応じなかったため、「断夫」山と呼ばれるようになったとする。	『逢州旧勝録』巻七
文政5年	1822	樋口好古(尾張藩大代官)が俗説として、摂州兵庫の築島築造のための人夫役を許されたとする。	『尾張御行記』
天保15年	1844	「鷲峯山」は「断夫」とも、「白鳥の陵」ともするが、被葬者は不詳とする。入山を禁じるが、3月3日には登ることが許され、遠望(国見)が行われた。	岡田啓・小田切春江等 『尾張名所図会』巻之四
弘化年間	1844~48	奥村得義(尾張藩士)が根山(断夫山)を城とも、日本武尊の陵ともする。	『松濤椿筆』巻十
明治8年	1875	角田忠行(熱田神宮宮司)が白鳥古墳を日本武尊御陵、断夫山古墳を宮簀媛命の御墓と唱える。	『熱田地陵墓考』
明治9年	1876	旧教部省により白鳥陵とともに熱田神宮の所属地に定められ、熱田神宮が管理。	
大正10・11年	1921・22	近隣住民が採集した大型円筒埴輪を柚木和夫氏が譲り受ける。	南山大学人類学博物館1984
大正16年	1925	「宮簀媛命之墓」の標柱が建てられ、守衛詰所を設けて厳重に管理される。	
昭和3年	1928	伊藤文四郎の(愛知県史蹟名勝天然記念物調査会委員)による調査報告書。	伊藤1928
昭和5年	1930	大場磐雄が愛知県神職会主催の講習会に際して古墳を踏査、造出しで多数の須臾器を採取。	大場1930
昭和13年	1928	陀武夫御墓(断夫山古墳)が姉山乃御墓として、祭礼の対象とされていた。	「熱田神宮恒例祭要覧詳」
昭和22年	1947	名古屋市の戦災復興事業により仮換地され、愛知県都市公園として整備。	
昭和44年	1969	名古屋大学考古学研究室による墳丘測量調査。	愛知県教育委員会1974
昭和55年	1980	換地処分により、愛知県が所有者とする旨の登記がされる。	
昭和62年	1987	国史跡に指定。	文部省告示第94号
平成元年	1989	愛知考古学談話会による墳丘測量調査。	東海埋蔵文化財研究会1989
平成29・30年	2017・18	名古屋市教育委員会による墳丘測量調査、墳丘周辺の地中レーダー探査。	
令和2・3年	2020	名古屋市教育委員会、愛知県埋蔵文化財センター(県文化財保護室からの委託)による発掘調査。	
令和3~5年	2021~23	愛知県埋蔵文化財センター(県文化財室からの委託)による発掘調査。	
令和3~5年	2021~23	国立文化財機構奈良文化財研究所による墳丘と墳丘周辺の地中レーダー探査。	
令和6年	2024	愛知県埋蔵文化財センターによる調査報告書の刊行。	同センター調査報告書第226集

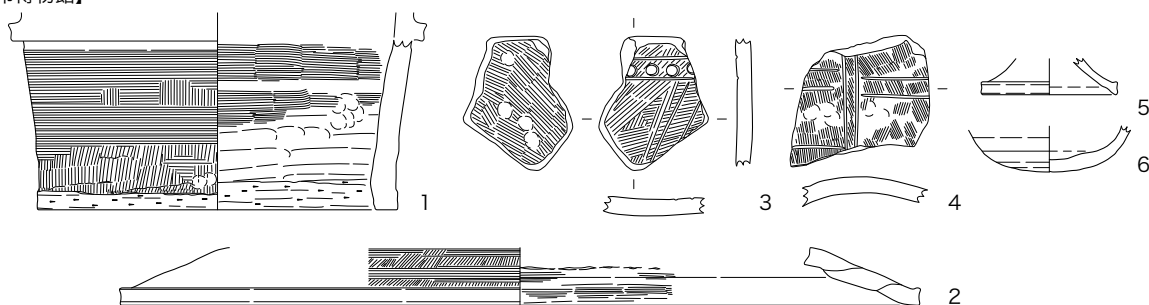
第2表 地中レーダー探査の概要

地点/アンテナ	場所	結果
A-1地点/ 270MHz	墳丘南西側のゲート ボール場	深さ2.6m程度まで電磁波は届いており、比較的均質な堆積状況を示す。西側の南北にのびる園路際で、約2.6mの深さから外側(西側)へ立ち上がるような反射が認められる。
A-2地点/ 270MHz	前方面西側の溝内	墳丘に近い側の深さ約1.2mの辺りから、外側(西側)に向かって落ち込んでいくような反射が認められ、深さ2.2~2.4m付近にやや安定した強い面的な反射が確認できる。
B-1地点/ 270MHz	後方面北側の園路と 溝の間の緩斜面	表土層の厚みは1.2~1.6mと推測される。電磁波は2.4m程の深さまで届いているが、安定した堆積状況を示し、周濠の立ち上がりと思われるような反射は認められない。
B-2地点/ 270MHz	後方面北側の園路	墳丘に近い側より、約2.6mの深さから外側(北側)へ立ち上がるような反射があり、その後深さ0.8m付近で平坦な反射が続いたのち、その外側で深さ約2.6mまで落ち込む溝状の反射が確認された。
C-1地点/ 270MHz	前方面東側の芝生広 場	表土層の厚みは0.8~1.6mほどである。濠の掘り込みはさらに深い場所にあると思われ、地中レーダー探査では判然としない部分が多い。探査範囲のやや東側寄り、北西から南東にのびる平坦面と思われる反射が認められる。
C-2地点/ 270MHz	東側くびれ部外側の 溝内	くびれ部のすぐ外側の深さ2.0m前後に平坦なやや強い反射が確認される。
D地点/ 270MHz	前方面前面より南側 の南北方向の道路	地表から深さ0.4m程までは道路の路盤舗装が確認される。道路工事の影響により全体的に大きく乱れた反射を示している。埋設物の敷設が少なく安定した反射を示している測線においては、探査範囲の南端付近で、外側(南側)へやや落ち込む反射が確認されるが、判然としない。
E-1地点/ 400MHz	後方面北東側の園路	プロファイル図は地表下2m前後の深さまで比較的鮮明に映っている。深さ0.3~0.4mで舗装等の路盤の平坦面を示す反射が確認される。埋設物を示すと思われる乱れた反射、強い反射が何か所かで認められる。周濠の落ち込みを示すような明確な反射は認められないが、それに相当するような反射の可能性のあるものが探査範囲の西側で二つ確認された。いずれも内側(西~南西側)へ落ち込んでいく反射と考えられる。
E-2地点/ 400MHz	E-1地点西側の園路	E-1地点と同様、地表下2m前後まで比較的鮮明に映り、地表下0.3m程度で舗装等の路盤の反射が確認される。周濠の落ち込みを示すような明確な反射は認められなかった。
F地点/ 400MHz	E-1・2地点北側の 林	地表下0.2m程度までは表土層が確認され、下位は比較的安定した反射が認められる。探査範囲の西側で円弧を描くようにのびる南西側への落ち込みを示す反射が確認された。おおよそ0.5~0.7mの深さから1.7~1.8m程度の深さまでの落ち込みの反射が認められる。
G地点/ 400MHz	A-1地点と園路を挟 んで西側の林	表土層の厚さは深さ0.3m程である。周濠の落ち込みを示すような反射は認められなかった。探査範囲の中央やや東寄りで見られる2カ所の大きく強い反射が確認される。

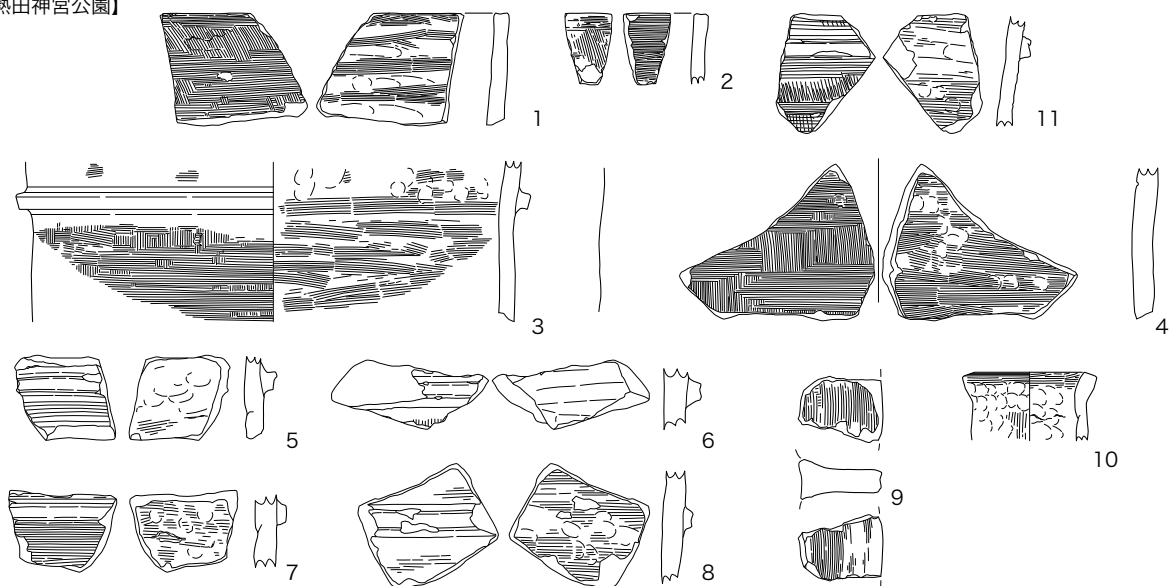
【荒木集成館】



【名古屋市博物館】



【熱田神宮公園】



第8図 断夫山古墳採集の埴輪と須恵器 (1:5)

(2) 調査の経緯

1 経緯

所有 保存と公開、活用 史跡 断夫山古墳は名古屋市にある県営熱田神宮公園内に所在しており、愛知県が所有、管理している。2019（平成 31）年度、愛知県は史跡 断夫山古墳の適切な保存と公開、活用を図るために、古墳の範囲及び構造、遺物の残存状況等の考古学的情報を発掘調査で確認し、その調査成果を基に史跡の追加指定と保存活用計画の策定を進め、今後の整備の方向性について検討することとした。

志段味古墳群 また、名古屋市は継続的に進めている史跡 志段味古墳群の調査研究、活用をさらに発展させ、市内における古墳時代の展開を解き明かしていくため、『史跡 志段味古墳群保存管理計画（2015 年 3 月）』に基づき、志段味古墳群と密接に関わる断夫山古墳の特徴を調査により明らかにし、必要な成果及び情報を得て活用することとしてきた。

発掘調査の協定 調査により断夫山古墳の考古学的情報を得てその特徴を明らかにする点で愛知県と名古屋市の目的は共通しており、両者が主体的な立場で発掘調査に参加して効果的に成果を得るため、両者は断夫山古墳の共同発掘調査に関する協定を 2020（令和 2）年 2 月に締結し、共同主体として史跡に指定されていない周濠及び周堤の発掘調査を行い、古墳の正確な範囲を確認するとともに、基礎的な考古学的情報を得ることとした。

第 3 表 調査体制

調査主体	愛知県（2019年度まで教育委員会、2020年度から県民文化局） 名古屋市教育委員会
事務局	愛知県教育委員会事務局生涯学習課文化財保護室（2019年度） 愛知県県民文化局文化部文化芸術課文化財室（2020～2023年度） 愛知県埋蔵文化財調査センター 名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護室
調査員	愛知県及び名古屋市の事務局から各 1 名が、発掘調査及び整理・報告書作成（監理）にあたる。
調査期間	2020年 2 月 4 日～2023年 3 月 31 日
整理、報告書作成期間	2023年 4 月 1 日～2024年 3 月 31 日
調査対象地	史跡 断夫山古墳の指定範囲（面積14,694.05㎡）及び指定範囲外で断夫山古墳の遺構及び遺物が所在すると想定される熱田神宮公園内の範囲。

第 4 表 事業の計画と進捗

内容 \ 年度	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026
調査検討委員会		●	→					
発掘調査 地中レーダー探査	●	●	●	●	●			
整理・報告書作成					●	●		
追加指定					●	●	●	
保存活用計画策定委員会						●	●	●
保存活用計画作成						●	●	●

2 調査体制と計画

調査の方針として、断夫山古墳の遺構及び遺物が所在すると想定される史跡指定地を含む県営熱田神宮公園内を調査対象範囲として、発掘調査能力を有する調査員2名（愛知県、名古屋市から各1名）と担当者とし、共同で発掘調査及び測量等補助調査を行うこととした（第3表）。 調査体制

出土品や調査成果の整理及び報告書の作成まで、愛知県と名古屋市は共同で実施することとした。計画期間は、発掘調査成果の整理、報告書の作成及び刊行を含めて、2019年度から5か年計画とした（第4表）。 計画

3 史跡 断夫山古墳調査検討委員会

断夫山古墳の発掘調査計画及び地形測量・地中探査、出土遺構及び遺物の検討・評価について指導・助言を受けるため、考古学、歴史学、遺跡探査を専門とする有識者委員6名及びオブザーバーで構成される委員会を設置した（第5・6表）。 指導・助言

第5表 史跡 断夫山古墳調査検討委員会の構成

区分	氏名	所属・職名
委員	広瀬 和雄	国立歴史民俗博物館、総合研究大学院大学・名誉教授
	福永 伸哉	大阪大学大学院人文学研究科・教授
	高橋 克壽	花園大学文学部・教授
	黒澤 浩	南山大学人文学部・教授
	廣瀬 憲雄	愛知大学文学部・教授
	金田 明大	奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長
オブザーバー	藤井 幸司	文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門・調査官（当時）
	大澤 正吾	文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門・調査官

第6表 史跡 断夫山古墳調査検討委員会の開催状況

年度	開催日	主な議事内容
2020 (令和2)	8/24	事業概要、試掘調査結果報告、2020年度発掘調査計画について
	12/16	発掘調査現地視察、今後の調査候補地について
2021 (令和3)	8/3	2021年度発掘調査・地中レーダー探査計画、史跡の現状変更について
	11/30	発掘調査現地視察、今後の調査候補地について
	3/30	発掘調査・地中レーダー探査結果、次年度計画について
2022 (令和4)	12/28	2022年度発掘調査・地中レーダー探査計画について
	2/27	発掘調査現地視察、発掘調査・地中レーダー探査の概況について
	3/24	発掘調査・地中レーダー探査結果、次年度計画について
2023 (令和5)	7/5	調査成果の総合評価、国指定追加範囲について
	11/13	史跡の追加指定範囲、今後の保存活用計画策定について
	3月	

(3) 調査の方針と経過

令和元年度試掘調査

調査の目的 令和2年度に開始する史跡指定地外の周濠・周堤の範囲等を確認する発掘調査に先立ち、その残存状況を確認する目的で 試掘調査を実施した。調査区は平成30年度に実施した地中レーダー探査で周濠と推定される落ち込みとその外側の平坦面と思われる反射が確認された地点に（第2表、付図1・2）、墳丘主軸に直交するように設定した（第9図）。

調査の結果 調査区中央付近で周濠底面（標高3.6m）から外側斜面を検出した。周濠埋土からは埴輪片が出土したが（第24図）、古代・中世の遺物も混在していた（第33図）。周濠外側は防火水槽により攪乱され、周堤の有無は確認できなかったが、調査区南壁付近に部分的に地山が高く残っていることを確認した（標高5.6m）。史跡指定地の周囲で周濠の外縁、周濠底面を面的に検出することが可能な地点は芝生広場に限られるため、令和2年度の調査区は試掘調査区の南側に面的に設定する方針とした。

第7表 調査経過一覧

年度	内容	調査期間	地中レーダー探査	調査検討委員会			現地説明会等
2019	試掘調査 (30㎡)	3月					
2020	発掘調査 (90㎡)	11～1月		8月24日	12月16日		12月19日
2021	発掘調査 (100㎡)	11～12月	12月6日 (試行)	8月3日	11月30日	3月30日	12月5日
2022	発掘調査 (100㎡)	2～3月	1月31日～2月1日	12月28日	2月27日	3月24日	3月5日
2023	整理・報告書作成	4～9月		7月5日	11月13日		3月31日刊行



試掘調査地点



試掘調査実施状況



周濠（落ち込み）の確認状況（試掘調査）



石列（近世以降）等の確認状況（試掘調査）



第9図 調査区配置図 (1:1,000)

令和2年度発掘調査（20区）

調査区の設定
上面の遺構
下面の遺構

前方部東側の周濠外縁と周堤を面的に検出することを目的として、試掘調査を実施した範囲を含め、公園駐車場南の芝生広場に20区（90㎡）を設定した（第9図）。発掘調査では試掘調査でも確認されていた寺院に関連すると思われる石列等を上面の遺構とした。石列の撤去後、下面の遺構として周濠等を検出、掘削した。

調査の結果と課題

20区の発掘調査では周濠の内側斜面と幅、二重周濠の有無を確認できなかったため、これらを明らかにすること等が次年度以降の調査の課題として挙げられた。

令和3年度発掘調査（21A区・21B区）

21A区

調査区の設定

21A区（70㎡）は後円部北側の墳丘裾と周濠・周堤の状況を確認することを目的とした調査区で、一部は史跡指定範囲を対象とした（第9図）。本来、墳丘主軸上に調査区を設定するところ、樹木等を避けるために墳丘主軸から西に5°の方向にずらした。史跡指定範囲の玉石垣、範囲外のベンチは撤去しない状態で調査したため、調査区は4分割されることになった。史跡指定範囲内の墳丘部分は人力によって掘削し、他の部分は公園整備時の盛土までを重機で掘削した。玉石垣以北は近世の整地層が厚く、調査期間や安全面、排土処理の問題から、整地層とその下位の周濠状の落ち込みは掘削範囲を限定した。

21B区

調査区の設定

想定される周堤の外側の状況（二重周濠の有無）を確認することを目的として、園路外側、壽琳寺境内の前に21B区（30㎡）を設定した（第9図）。調査区の設定は地中レーダー探査で周濠状の落ち込みが確認されていることも考慮した（第2表、付図1・2）。



20区調査地点



20区調査状況



21A区調査地点



21A区調査状況



21B区調査地点



21B区調査状況

令和4年度発掘調査（22A区・22B区）

21A区で墳丘裾と周濠・周堤を明確に確認できなかったため、改めて前方部西側の墳丘裾と周濠・周堤の状況を確認することを目的として、史跡指定範囲を含めて22A区（90㎡）を設定した（第9図）。21A区と同様、玉石垣で調査区は3分割された。史跡指定範囲内の墳丘部分は人力によって掘削し、他の部分は公園整備時以降の盛土までを重機で掘削した。墳丘部分は予想以上に掘削土量が多く、多大な時間と労力を要した。

22A区
調査区の設定

古墳西側の周堤外側の状況（二重周濠の有無）を確認することを目的とした22B区（10㎡）を（球技場を調査対象とすることが困難なことから、）球技場の南に設定した（第9図）。周囲は現標高が高く、それが造成によるものであることが明らかとなった。

22B区
調査区の設定



22A区調査地点



22A区調査状況



22B区調査地点



22B区調査状況

調査区の保全と旧状の復旧

調査面の保護
旧状の復旧

今回の調査事業の性格を鑑み、調査終了後は史跡指定範囲内外を問わず、調査した面を山砂で覆い、タンパ・ランマによる転圧後に掘削土で埋め戻した。既存の施設等を含めて旧状を損なわないように復旧している。

地中レーダー探査

探査の実施
探査の目的

今回実施している破壊的手法である発掘調査と併行して、非破壊的な手法である地中レーダー探査を独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所に依頼して実施した。今回は墳丘形状、周濠・周堤を確認し、追加指定の範囲を策定することを第一の目的、埋没している外部施設（葺石・埴輪等）、墳丘の内部構造（埋葬施設等）を把握することを第二の目的としている。

試行
調査区

探査は令和3年12月に試行し、有効性や問題点を確認した上で、令和5年1月から2月に実施した。調査区は第一の目的に則して、古墳西側のグラウンド、墳丘東側の既設の周濠内、古墳北側から東側の園路と駐車場、第二の目的に則して、後円部墳頂、前方部墳頂、前方部2段目の平坦面、造り出しを対象として設定した。探査には奈良文化財研究所、愛知県、名古屋市の職員が参加し、花園大学考古学研究室が協力した。

調査検討委員会

指導・助言

発掘調査の方針、調査区の設定、調査の方法、遺構・遺物の評価について、調査着手前、調査中、調査終了後に調査検討委員会からの指導、助言を受けた。



山砂による調査面の保護（21B区）



転圧作業（22A区）



令和4年度地中レーダー探査（造り出し上）



令和4年度地中レーダー探査（古墳西側のグラウンド）

現地の公開

公園内での発掘調査ということもあって、発掘調査中には資料の掲示、配布等を通じて、随時、調査成果を公開した。各年度、発掘調査が進捗した段階で、現地説明会を実施した。参加者は令和2年度が168人、同3年度が180人、同4年度が301人であった。

調査成果の公開
現地説明会

出土遺物の整理と調査報告書の作成

出土した遺物は各発掘調査年度内に現地で洗浄、乾燥し、愛知県埋蔵文化財調査センターに仮収納した。発掘調査終了後の令和5年度4月から9月には、試掘調査を含めた発掘調査出土遺物の注記、接合、実測、写真撮影等の整理作業、調査報告書の執筆、編集を愛知県埋蔵文化財センターで実施した。10月には愛知県、名古屋市等の職員が参加し、出土遺物と報告書の内容に関する検討会を実施し、検討会上の意見をも踏まえ、令和6年3月に本書を印刷・刊行した。

遺物整理
調査報告書の作成
検討会
印刷・刊行

[参考文献]

- 武部真木 2021「断夫山古墳」『年報』令和2年度 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
 早野浩二 2022「断夫山古墳」『年報』令和3年度 同上
 早野浩二 2023「断夫山古墳」『年報』令和4年度 同上



調査検討委員会委員の現地視察（令和2年度発掘調査）



発掘調査現地説明会（令和3年度発掘調査）



出土遺物の洗浄作業

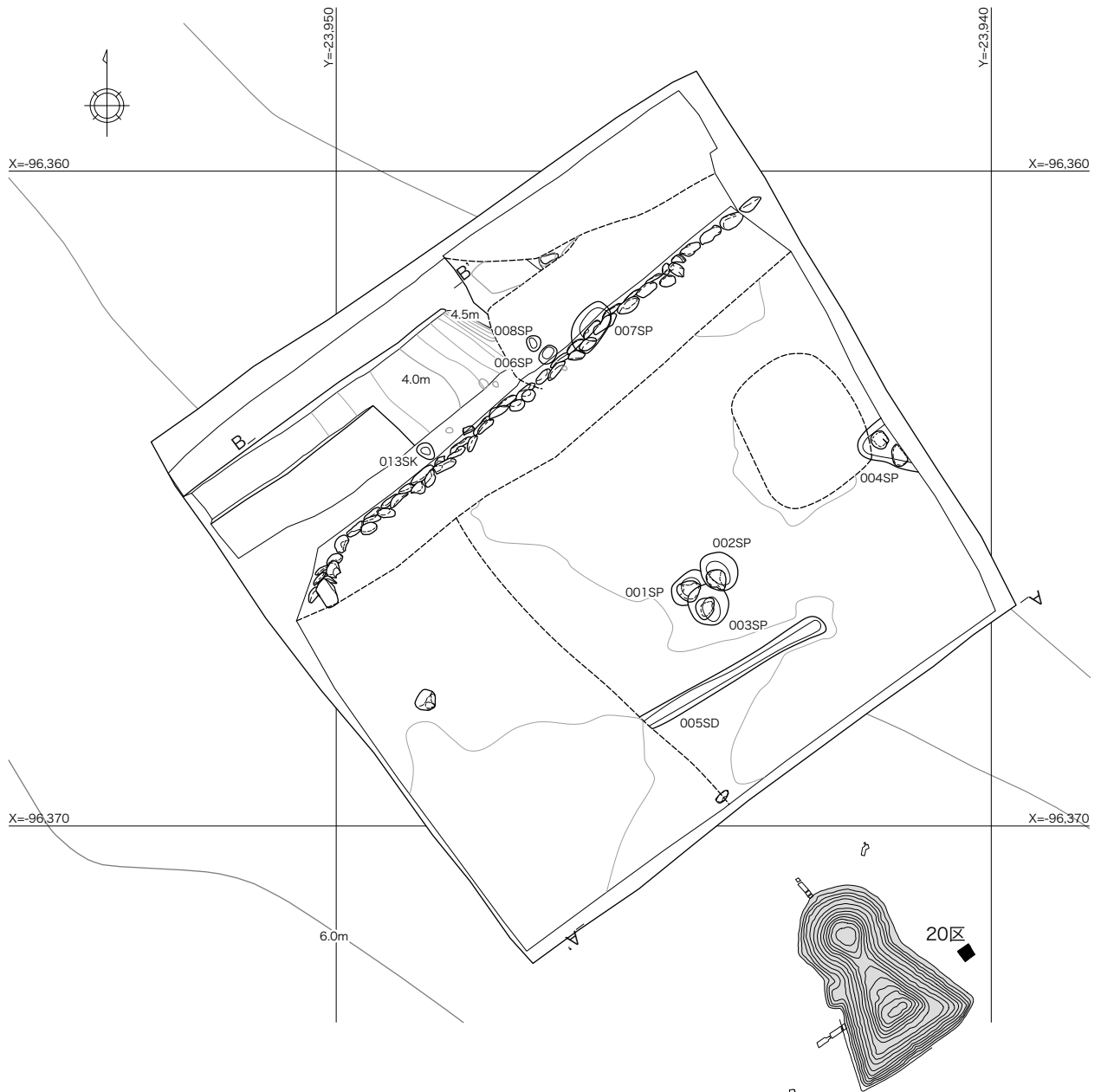


出土遺物の接合作業

第3章 発掘調査

(1) 20区

調査区の設定	前方部東側の周濠外縁と周堤を面的に検出することを目的として、試掘調査を実施した範囲を含めた南側に長さ 10m、幅 10m を設定した (第 9 図)。
上面の検出遺構	上面の遺構は近世以降の整地層上で検出した石列、礎石を伴う柱穴 001SP・002SP・003SP・004SP 等で、これらを除去した調査区北東半の面で近世から近代の溝、柱穴、廃棄土坑等を検出した (第 10 図)。調査区東半から調査区外にかけて掘削された大規模な廃棄土坑 009SK 等により、基盤層は調査区北東端付近に一部が高く (標高 5.6m) 残る程度であった。試掘調査時とそのトレンチを精査する過程においては、18 世紀から 19 世紀の遺物が出土した (第 33 図)。
廃棄土坑009SK	廃棄土坑 009SK は一部を掘り下げたのみであるが、大量の陶磁器類、瓦、貝殻等が出土した。陶磁器類は 19 世紀中葉に対比される (第 34 図)。
周濠015SD 周濠上位	調査区南西半は周濠の外側斜面付近に相当し、上位は近世の整地層が連続して堆積する。周濠上位 (の盛土中) からは、17 世紀中葉から 18 世紀中葉の遺物が多く出土した (第 33 図)。これらの遺物は古墳の周濠が埋没後、大規模に整地された時期を示す。
検出状況 層区分	周濠 015SD は墳丘 (前方部) の方向に概ね沿う方向で検出された (第 11 図)。埋土は調査区南半で、暗褐色を基調とする層厚 0.2m の上層と、黄褐色を基調とする層厚 0.2m の下層に区分される。周濠の断面形状から、調査区東端付近を周濠最深部として認識すると、周濠底面の標高は 3.5m である。周濠外側は基盤層がかなりの急傾斜で標高 4.9m まで立ち上がるが、後世に大きく切土されている可能性もある。南壁付近の斜面には埴輪を含まず、土師器のみを含む固く締まった層が確認された。古墳築造時に周濠斜面の護岸列石 (後述) を配するために整地された可能性も想定されるが、確定することは難しい。
下層出土の埴輪 周堤への埴輪樹立	周濠 015SD 下層においては、周濠底面からやや浮いた位置で、円筒・朝顔形埴輪がややまとまって出土した (第 12 図)。周濠外側斜面付近における円筒・朝顔形埴輪のまとまった出土は周堤への樹立を示唆する。形象埴輪は出土しなかった。出土した円筒・朝顔形埴輪 (第 25・26 図) はいずれも体部のみで、口縁部、底部は含まれない。接合する破片、同一個体と判断される破片は、周濠が検出された方向に沿って分布する状況も確認される。周濠の埋没過程に関連する可能性がある。
周濠出土の円礫	下層には埴輪に混じって円礫が散在していた。検出した 23 点の円礫を観察の対象とした。法量 (長軸) は 6.2 ~ 19.7cm (平均 14.4cm) で、石材は砂岩 12 点 (52%)、チャート 4 点 (17%)、濃飛流紋岩 3 点 (13%)、泥岩 3 点 (13%)、片麻岩 1 点 (4%) で構成される。これらの円礫は周濠を滞水させるための護岸に用いられた可能性も想定される。その他、下層からは管状土錘が出土した (第 33 図)。
上層出土の埴輪 周濠出土の須恵器 中世の遺物	下・上層、上層からの埴輪の出土はごく少ないが、口縁部の小片が含まれる (第 26 図)。須恵器の出土もごく少なく、下・上層から蓋杯、甕が出土した (第 32 図)。周濠 015SD の下層と上層の層理面付近からは 12 世紀の山茶碗、上層中からは 13 世紀



第10図 20区上面平面図 (1:100)

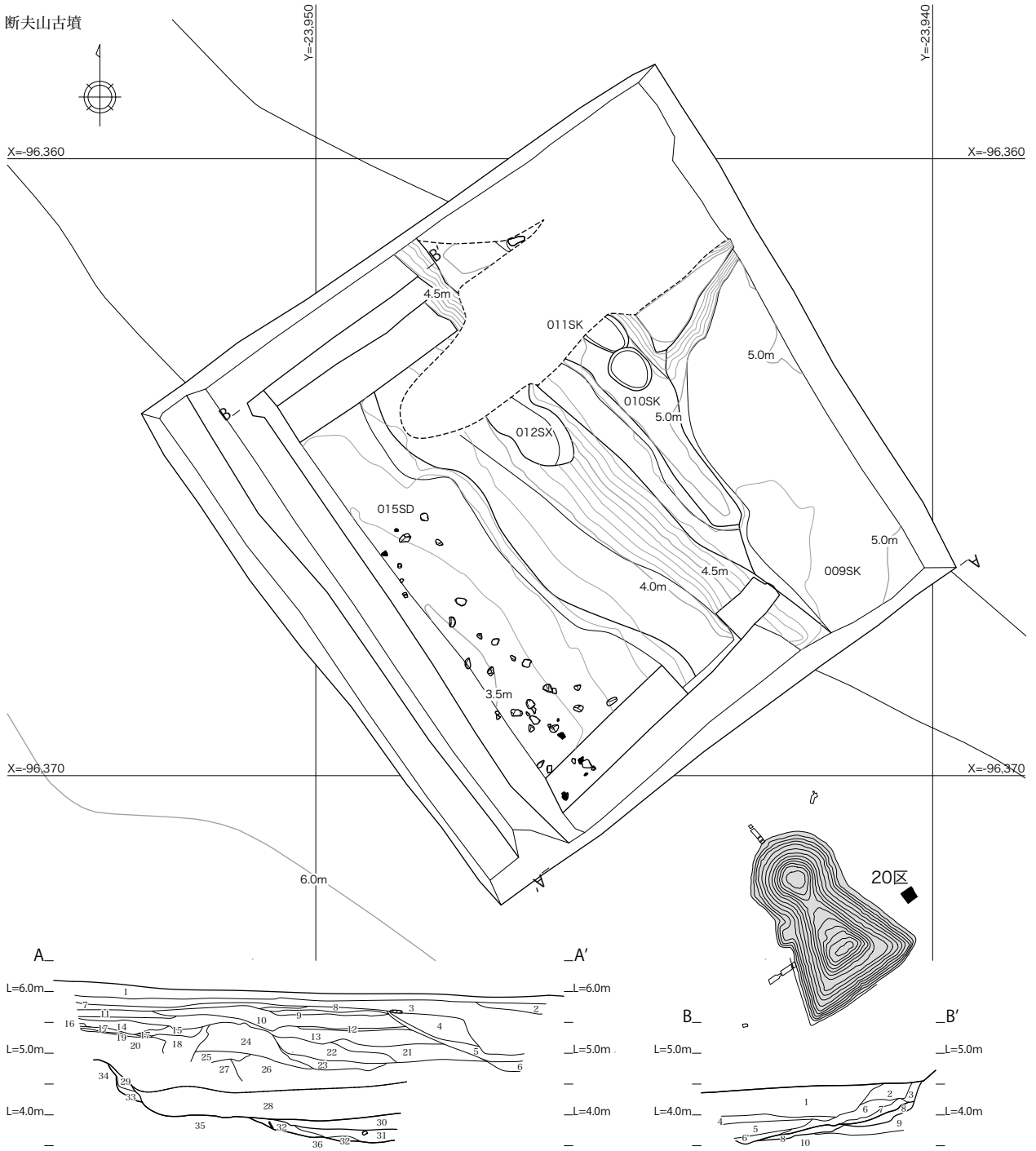
から15世紀の遺物が出土した(第33図)。これらは12世紀から15世紀に周濠の埋没が進行する環境下にあったことを示す。同層中から採取した炭化材の放射性炭素年代測定の結果(測定番号PLD-43718)が、 2σ 暦年代範囲で1268-1296calAD(95.45%)の年代値を示すこととも整合する(第5章(1)を参照)。埴輪の包含状況からも、周濠底面から下層が掘削後に自然埋没した堆積層で、上層は中世に浚渫されていると判断される。

炭化材の年代測定

周濠015SDの埋土から採取した堆積物について、花粉分析を実施したが、花粉化石は分解され、ほとんど含まれていなかった。周濠は乾燥した環境下にあったと推測される(第5章(2)を参照)。

花粉分析

周濠の堆積環境



A_A'

1. 表土・現代整地層。
- 【近世以降】
2. 7.5YR黒褐色砂質シルトに7.5YR4/3褐色粘質と7.5YR3/1黒褐色粘質シルトの小塊が混じる。
3. 10YR4/3に黄褐色シルトを少量含む中粒砂、細礫を多く含む、明褐色中粒砂塊、中礫を含む(整地層)。
4. 10YR4/3に黄褐色砂質シルトと10YR4/2灰黄褐色中粒砂を含む細粒砂の互層、細・中礫を多く含む。
5. 10YR4/2灰黄褐色中粒砂を含む細粒砂、黄褐色細粒砂と細・中礫を多く含む。
6. 7.5YR3/3暗褐色中粒砂混じりシルト、大型の円礫(石垣礎石に関連?)が入る。
7. 10YR3/3暗褐色シルト少量含む細粒砂、細・中礫を含む。
8. 10YR3/3暗褐色細粒砂を多く含むシルトと10YR5/6黄褐色シルト少量含む細粒砂の斑土、細・中礫を含む。
9. 7.5YR4/4褐色シルトを少量含む粗粒砂～中粒砂、細・中礫を多く含む、暗褐色シルト塊を含む。
10. 10YR3/3暗褐色細粒砂を多く含むシルト、褐色の細・中粒砂が層状に入り、細・中礫を多く含む。
11. 10YR4/3に黄褐色シルトを少量含む中粒砂、細・中礫を多く含む、明褐色中粒砂を少量含む。
12. 10YR3/3暗褐色シルトを少量含む細粒砂、細・中礫を多く含む。
13. 7.5YR4/4褐色細粒砂～細粒砂を含むシルト、細・中礫を多く含む。
14. 10YR3/3暗褐色シルトを含む細粒砂、黄褐色シルトの小塊を多く含む、細・中礫を少量含む。
15. 10YR5/6明褐色中粒砂を含むシルト、暗褐色シルト塊、細・中礫を少量含む。
16. 10YR5/4に黄褐色中粒砂を含む細粒砂、細・中礫を少量含む。
17. 10YR5/4に黄褐色中粒砂。
18. 10YR5/4に黄褐色中粒砂を含む細粒砂、細・中礫、瓦を含む。
19. 10YR3/3暗褐色中粒砂を含む細粒砂、細・中礫を含む。
20. 10YR4/2灰黄色中粒砂を少量含む細粒砂、細・中礫を含む。
21. 7.5YR5/6明褐色細粒砂を含むシルト、暗褐色シルト塊、細・中礫を少量含む。
22. 7.5YR5/6明褐色細粒砂を含むシルトと10YR3/3暗褐色細粒砂を含むシルトの斑土、細・中礫を多く含む。
23. 10YR4/3に黄褐色シルトを少量含む細粒砂、細・中礫を多く含む黄褐色シルト塊を少量含む。
24. 10YR5/4に黄褐色粗粒砂混じり中粒砂と10YR4/3に黄褐色中粒砂を少量含む細粒砂の互層。
25. 10YR4/3に黄褐色中粒砂を含む細粒砂、細・中礫を含む。
26. 10YR3/4砂質シルト層粗粒砂、細礫を含む。
27. 10YR4/4褐色細～中粒砂を含むシルト、白色粗粒砂礫を含む、固く締まる。
28. 10YR3/4暗褐色砂質シルト、粗粒砂、細礫を含む。

【周濠015SD等】

29. 10YR4/6褐色シルト、白色砂粒を含む、固く締まる。
30. 10YR3/4暗褐色粘質シルト、細礫を含む。
31. 10YR4/3に黄褐色粘質シルト、粗粒砂、白色砂粒を含む。
32. 10YR4/3に黄褐色シルト、粗粒砂、白色砂粒を含む。
33. 7.5Y4/4褐色粘質シルトに7.5YR4/3褐色シルトと地山土の小塊が混じり、固く締まる。

【基盤層】

34. 10YR4/4褐色粘質シルト、白色砂粒を含む。
35. 10YR4/3に黄褐色粘質シルト、砂・細礫を含む、固く締まる。
36. 10YR4/4褐色シルト質粗粒砂、固く硬く締まる。

B_B'

【近世以降】

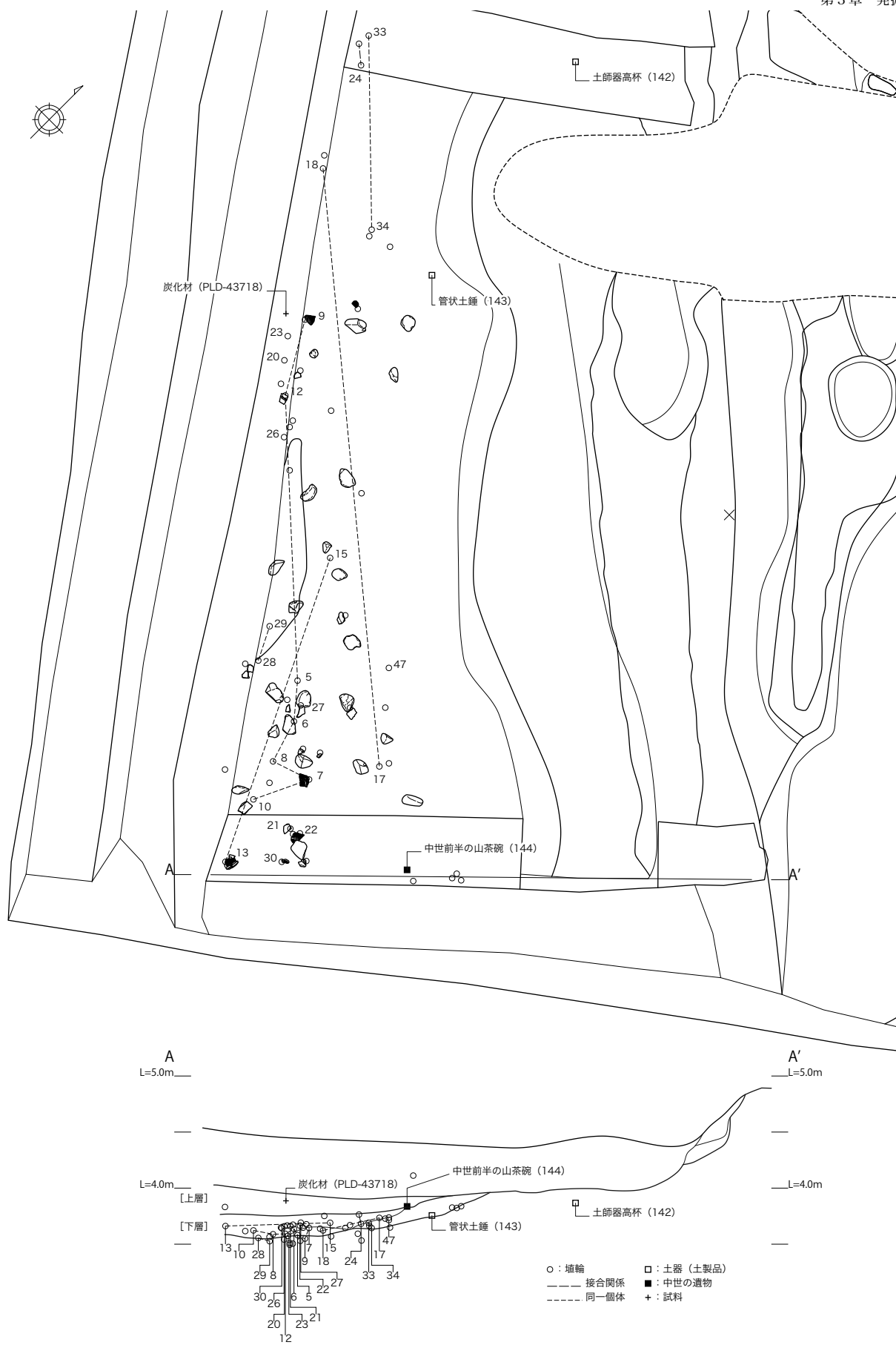
1. 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂、礫をわずかに含む。
2. 10YR4/4褐色細粒砂、礫をわずかに含む、固く締まる。
3. 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト、礫をわずかに含む。
4. 2.5Y5/2暗灰黄色土シルト、礫をわずかに含む。
5. 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂、礫をわずかに含む。
6. 10YR4/6褐色シルト、礫をわずかに含む、固く締まる。
- 6'. (西端にかけて粘土塊が少なく、砂質が強くなる。)
7. 2.5Y4/4黄褐色細粒砂混じりシルト、10YR4/6褐色粘質シルト、7.5YR3/2黒褐色粘質シルトを塊状に含む。

【周濠015SD】

8. 10YR4/3に黄褐色粘質シルト、中・粗粒砂、地山土の小塊を含む。

【基盤層】

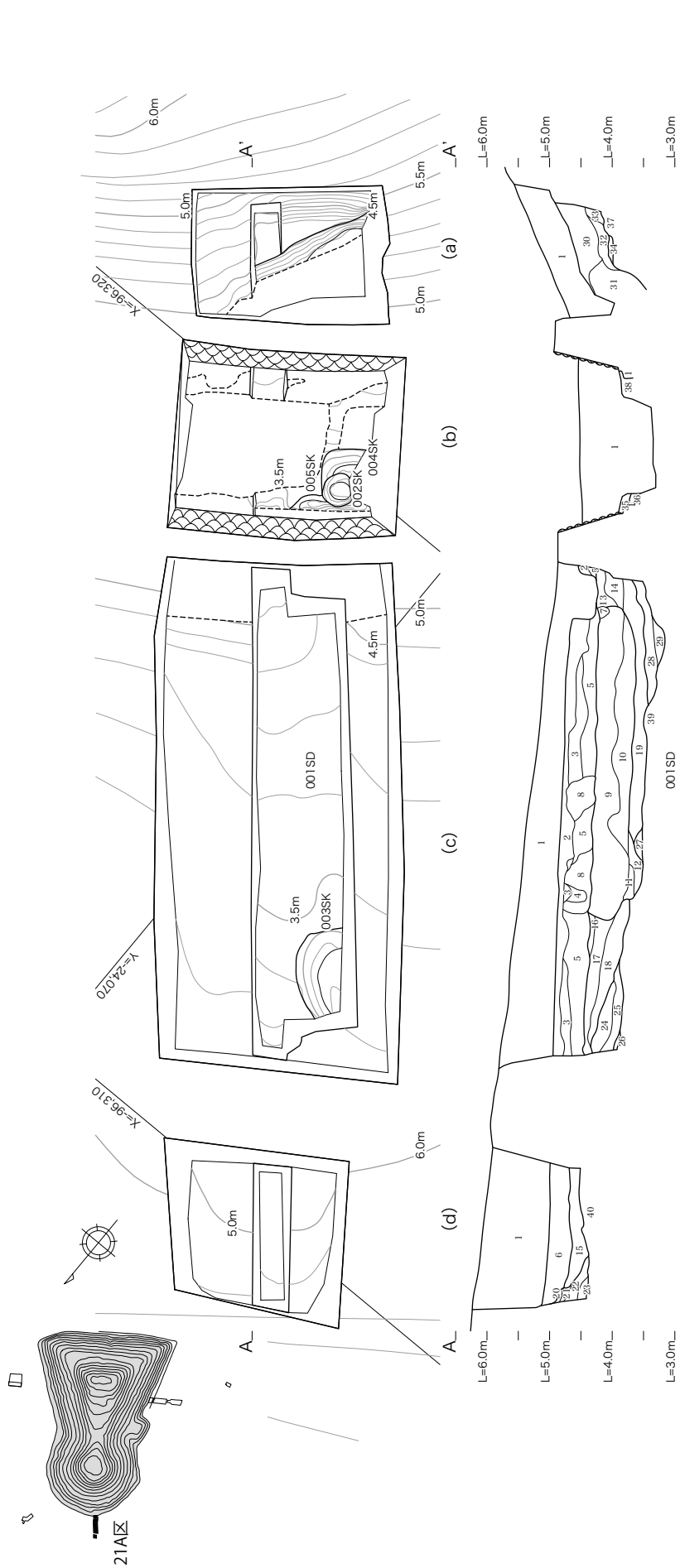
9. 10YR4/4褐色砂礫層とシルト層の互層。
10. 10YR4/6褐色シルト、中・粗粒砂を含む。



第12図 20区周濠O15SD遺物出土状況図 (1:50)

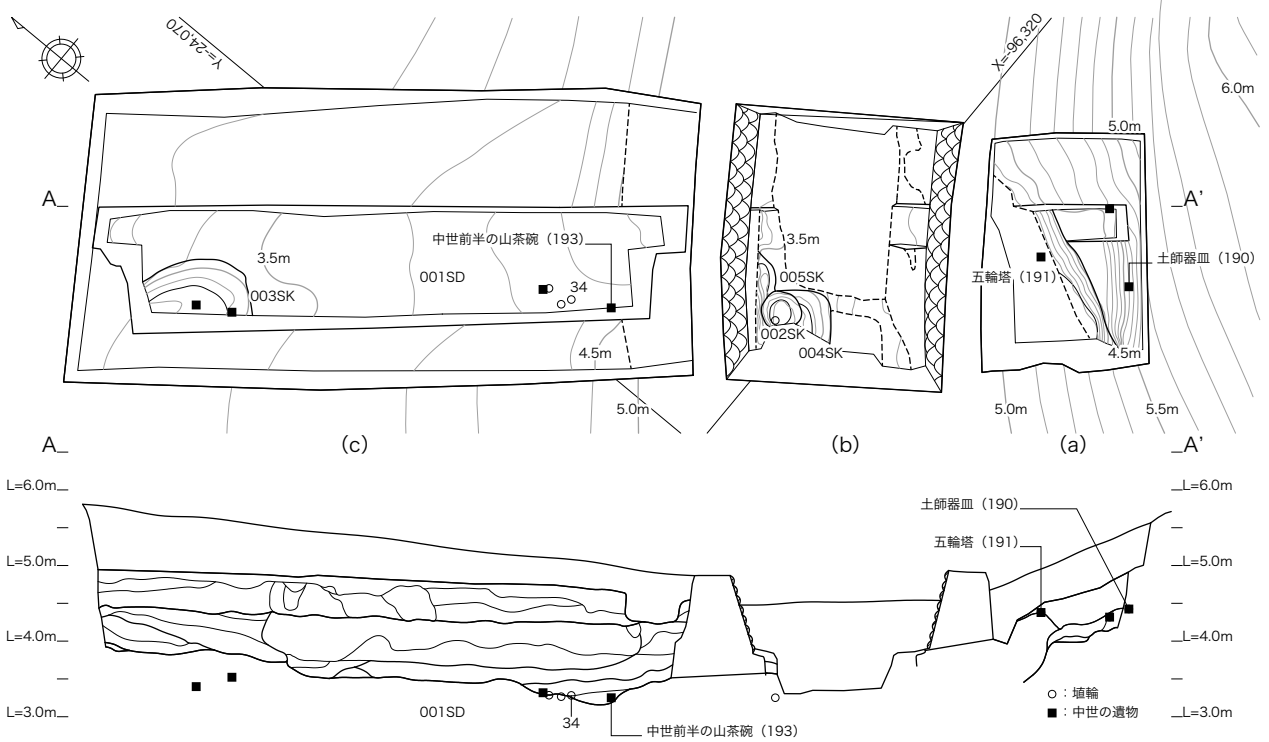
(2) 21A区

調査区の設定	後円部北側の墳丘裾と周濠・周堤の状況を確認することを目的とした調査区で、現墳丘裾から園路まで、長さ 20m、幅 3.5m を設定した (第 9 図)。一部は史跡指定範囲を対象とした。本来、墳丘主軸上に調査区を設定するところ、樹木を避けるため、墳丘主軸から西に 5° の方向にずらした。調査区は史跡指定範囲の墳丘部分 (a) と玉石垣間 (b)、史跡指定範囲外の玉石垣から既設ベンチまで (c)、既設ベンチから園路まで (d) に分割される (第 13 図)。
墳丘部分 (a) 層序	墳丘部分 (a) は公園整備時の層厚 0.5m の客土下に、それ以前の層厚 0.5m の客土 (または崩落土) がある。それ以前にも土管の埋設に伴い、墳丘裾 (の基盤層) が大きく削られていた。客土下位には比較的安定した層が確認され、直上からは土師器皿が出土した。墳丘盛土の可能性も考慮して、一部を基盤層を確認する高さ (標高 4.1m) まで掘り下げたが、層中からは五輪塔を含む中世以降の遺物が出土した (第 35 図)。基盤層直上にわずかに残存するやや斑状の砂層が中近世以前、あるいは古墳時代に相当する可能性はあるが、総体として、墳丘外表面を明確に示す遺構は遺存していないと判断される。葺石、またはその転落石と思われる石材もほとんど認められない。
遺物出土状況	客土を除去する過程で、中近世の遺物に混じって若干の円筒・朝顔形埴輪、形象埴輪が出土した。埴輪は全体的に器表面が風化、摩滅したものが多い (第 27 図)。
玉石垣間 (b) 検出遺構	玉石垣間 (b) はその設置時に基盤層以下 (標高 3.3m) まで大きく掘削されていた。調査区の西端付近には土坑 002SK・004SK・005SK が重複して検出された (第 15 図)。
遺物出土状況	土坑からは円筒埴輪がごくわずかに出土したが、遺構の時期は中世以降と推測される。
玉石垣外側 (c・d)	玉石垣外側 (c・d) は公園整備時の層厚 0.3～0.8m の客土下に、中近世の細片化した遺物を含み、非常に固く締まった層厚 0.5m の近世以降の整地層がある。客土、整地層中から埴輪はほとんど出土しなかった。
周濠状の落ち込み	その下位は周濠状に落ち込む状況 (001SD) を確認したが、中世以降に掘削、排土、整地され、落ち込みの底面付近には土坑 003SK、深く落ち込む部分も確認された (第 14・15 図)。
遺物出土状況 中世の遺物	土坑 003SK、深く落ち込む部分からは少量の円筒埴輪が出土したが (第 27 図)、13 世紀から 15 世紀の遺物も混在する (第 35 図)。
周濠・周堤の痕跡	基盤層は周濠状の落ち込みの底面が 3.5m で、底面から外側 (園路側) に向かって標高 4.5m まで緩やかに立ち上がり、再び標高 4.4m まで緩やかに下がる。基盤層の起伏が周濠 (内濠) の底面、外側の斜面、周堤、周濠 (外濠) に対応する痕跡である可能性はあるが、埴輪等の古墳時代の遺物が土坑や落ち込み以外からはほとんど出土しないことから、古墳時代の遺構面そのものはほとんど失われていると判断される。葺石、またはその転落石と思われる石材もほとんど認められない。その他、整地層中からは古代の瓦等も出土した (第 35 図)。
古代の瓦	

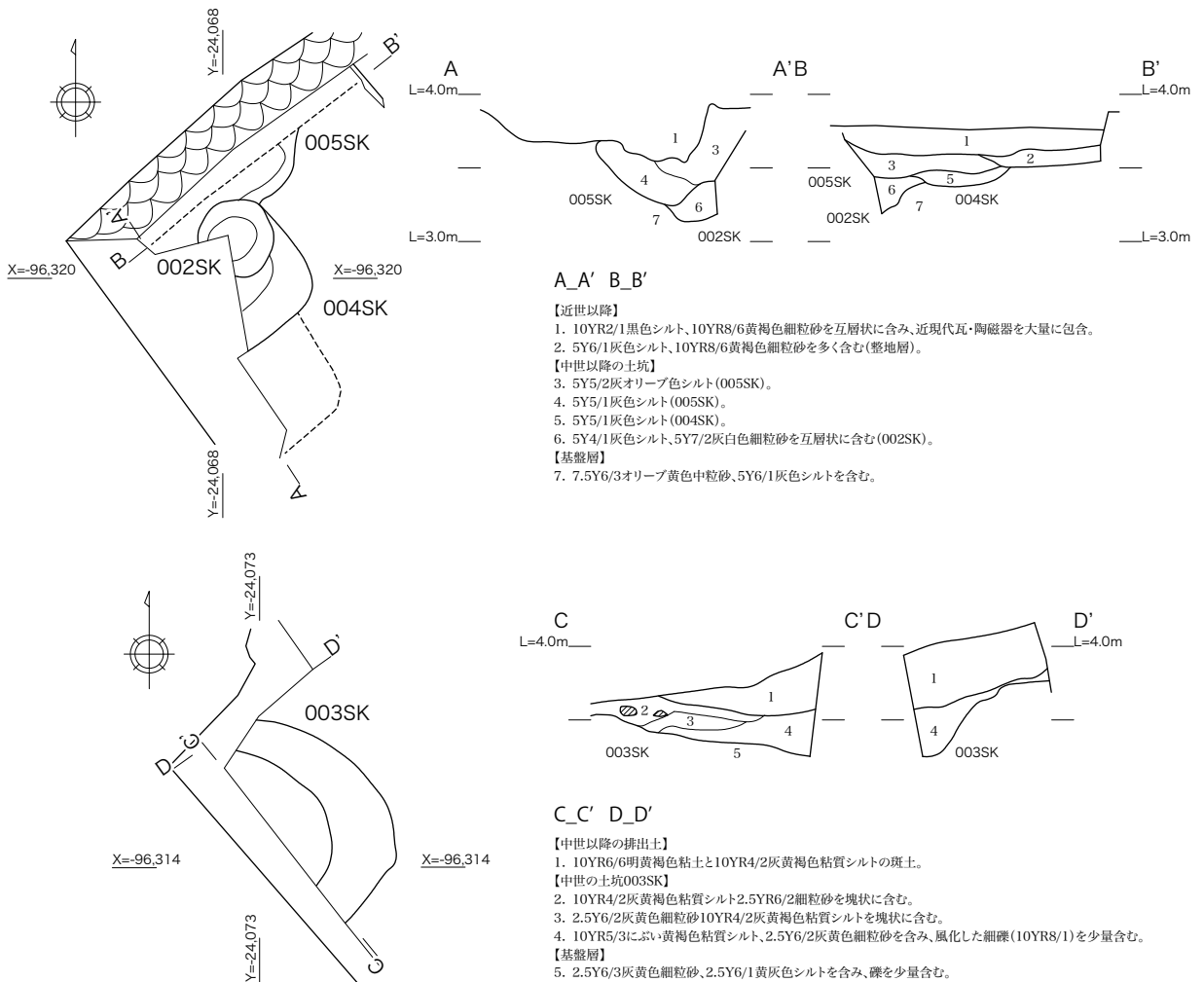


- A_A'**
- 【近現代】
 1. 10YR2/1黒色シルト, 10YR8/6黄褐色細粒砂を互層状に含む(大量の近現代瓦・陶磁器)。
 2. 10YR5/4黄褐色シルト(旧表土)。
 3. 10YR3/2黒褐色シルト, 10YR5/6黄褐色シルトを塊状に含む(整地層)。
 4. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト, 風化した細礫(10YR8/1灰白色)を少量含む, 固く締まる(整地層)。
 5. 10YR3/2暗褐色シルト, 10YR5/4黄褐色シルトを塊状に含む(整地層)。
 6. 2.5Y5/4紫褐色シルト, 風化した細礫(2.5Y8/1灰白色)を少量含む, 固く締まる(整地層)。
 7. 10YR4/2灰黄褐色シルト, しまりなし。
 8. 10YR5/4黄褐色シルト, 風化した細礫(10YR8/1灰白色)を多く含む, 固く締まる(整地層)。
 9. 10YR5/4黄褐色粘質シルト, 風化した細礫(10YR8/1灰白色)を多く含む, 固く締まる(整地層)。
 10. 10YR5/4黄褐色粘質シルト, 10YR4/2灰黄褐色粘質シルトを塊状に含む(整地層)。
 11. 10YR5/3にぶい黄褐色粘質シルト, 風化した細礫(10YR8/1灰白色)を少量含む, 固く締まる(整地層)。
 12. 10YR6/4にぶい黄褐色粘質シルト, 10YR4/2灰黄褐色粘質シルトを塊状に含む, 固く締まる(整地層)。
- 【中世以降】
 13. 10YR6/6明黄褐色粘質シルト(整地層)。
 14. 10YR6/3にぶい黄褐色粘質シルト(整地層)。
 15. 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト, 風化した細礫(2.5Y8/1灰白色)を少量含む, 固く締まる(整地層)。
 16. 10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルト(整地層)。
 17. 10YR3/2暗褐色粘質シルトと10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルトを塊状に多く含む(整地層)。
 18. 10YR3/2暗褐色粘質シルトと10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルトを塊状に含む(整地層)。
 19. 10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルト, 風化した細礫(2.5Y8/1灰白色)を少量含む, 固く締まる(整地層)。
 20. 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト, 風化した細礫(2.5Y8/1灰白色)を多く含む, 固く締まる(整地層)。
 21. 2.5Y5/4黄褐色シルト, 風化した細礫(2.5Y8/1灰白色)を少量含む, 固く締まる(整地層)。
 22. 2.5Y5/4黄褐色シルト, 風化した細礫(2.5Y8/1灰白色)を多く含む, 固く締まる(整地層)。
 23. 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト, 風化した細礫(2.5Y8/1灰白色)を少量含む, 固く締まる(整地層)。
 24. 10YR6/6黄褐色粘土と10YR4/2灰黄褐色粘質シルトを塊状に含む(整地層)。
 25. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト, 2.5Y6/2灰黄褐色粘質シルトを互層状に含む(整地層)。
- 【中世以前】
 26. 2.5Y6/2灰黄褐色粘質シルト, 10YR4/2灰黄褐色粘質シルトを塊状に含む。
 27. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト, 2.5Y6/2灰黄褐色粘質シルトを塊状に含む。
 28. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト。
 29. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト, 2.5Y6/2灰黄褐色粘質シルトを塊状に含む。
 30. 10YR6/4にぶい黄褐色シルト, 10YR8/6黄褐色シルトを塊状に含む, しまりなし(整地層)。
 31. 5Y4/1灰褐色粘土, 炭化物を含む(土管埋没時の土)。
 32. 2.5Y5/3黄褐色シルト, 2.5Y7/7明黄褐色粘質シルトを塊状に含む, 固く締まる(整地層)。
 33. 5Y6/4オリーブ黄褐色粘質シルト, 2.5Y6/2灰黄褐色粘質シルトを互層状に含む, 固く締まる(整地層)。
 34. 5Y6/4オリーブ黄褐色粘質シルト, 5Y6/1黄褐色粘質シルトを多く含む。
 35. 10YR6/6明黄褐色粘質シルト, 5Y5/1灰褐色シルトを塊状に含む。
 36. 5Y5/1灰褐色シルト, 5Y6/3中粒砂を多く含む。
 37. 5Y6/3オリーブ黄褐色粘質シルト, 5Y6/1黄褐色粘質シルトを互層状に含む, 固く締まる(整地層)。
 38. 5Y6/3オリーブ黄褐色粘質シルト, 5Y6/1灰褐色粘質シルトを互層状に含む, 固く締まる(整地層)。
 39. 2.5Y6/3灰黄褐色粘質シルト, 2.5Y6/1黄褐色粘質シルトを少量含む, 固く締まる(整地層)。
 40. 2.5Y6/2灰黄褐色粘質シルト, 2.5Y6/1黄褐色粘質シルトを少量含む, 固く締まる(整地層)。

第13図 21A区平面図・土層断面図 (1:100)



第14図 21A区遺物出土分布図 (1:100)



第15図 21A区遺構平面図・土層断面図 (1:50)

(3) 21B区

想定される周堤の外側の状況（二重周濠の有無）を確認することを目的として、園路外側、壽琳寺境内の前に、長さ12m、幅2.5mを設定した（第9図）。園路側が大規模に攪乱されていたことを受け、境内側に長さ2.5m、幅1.0m分を拡張し、古墳に関する遺構の有無を確認した（第16図）。調査区内には街路灯の電気ケーブル、管理事務所から配管されたガス管、公園整備前の排水管が横断する。

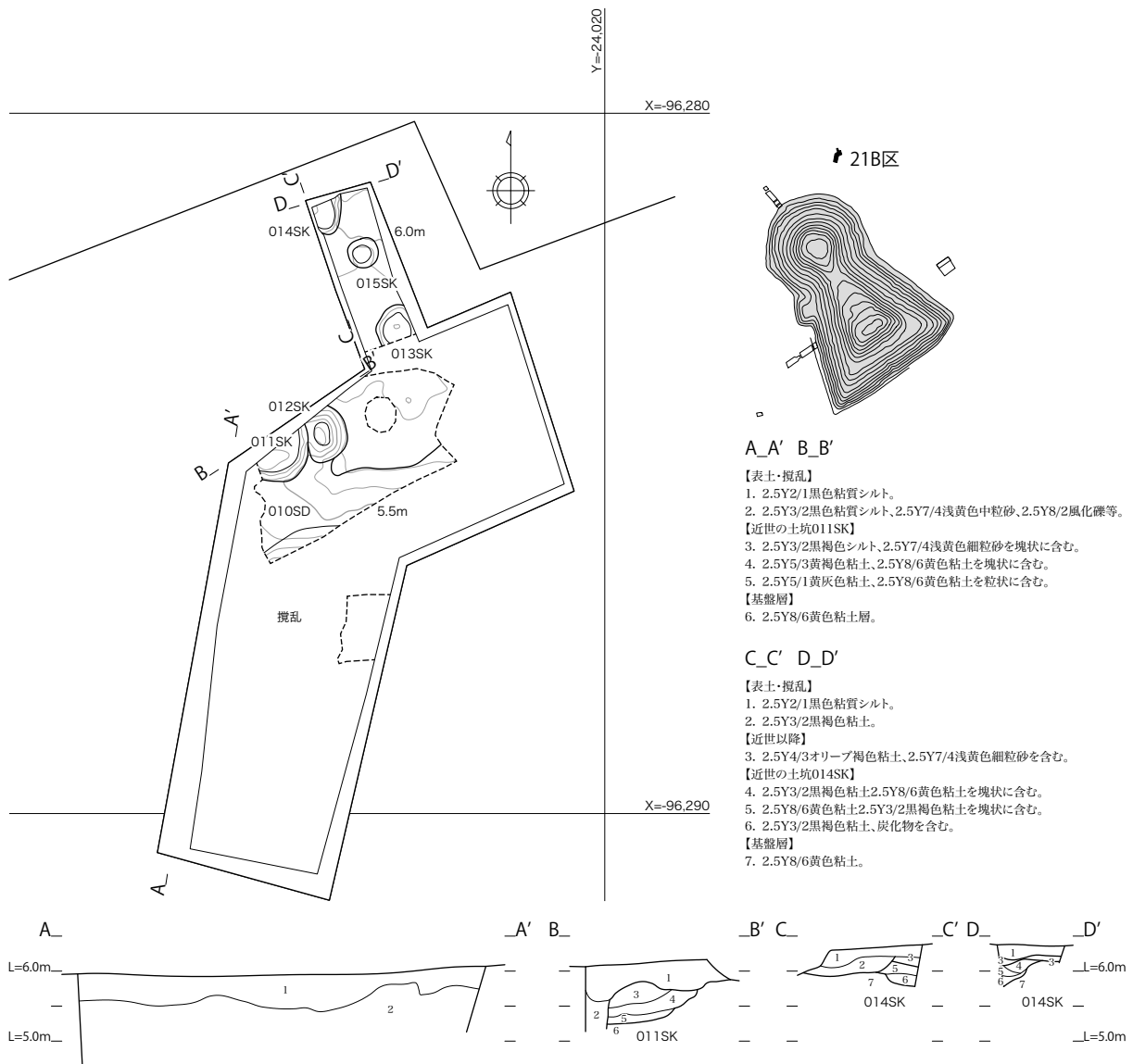
園路側は公園整備前の宅地造成により大きく攪乱され、基盤層が中島状にわずかに点在する程度であった。境内側は層厚0.1～0.4mの表土下に層厚0.1mの土壌化した粘土層が堆積し、基盤層に達する。基盤層の最高点は拡張部分の北端付近で6.1mである。遺構面には小土坑011SK・012SK・013SK・014SK・015SKが点在する（第17図）。小土坑やその周辺からは土師器小片、近世の棧瓦が出土した（第35図）。遺構の時期は近世と推測される。

調査区の設定

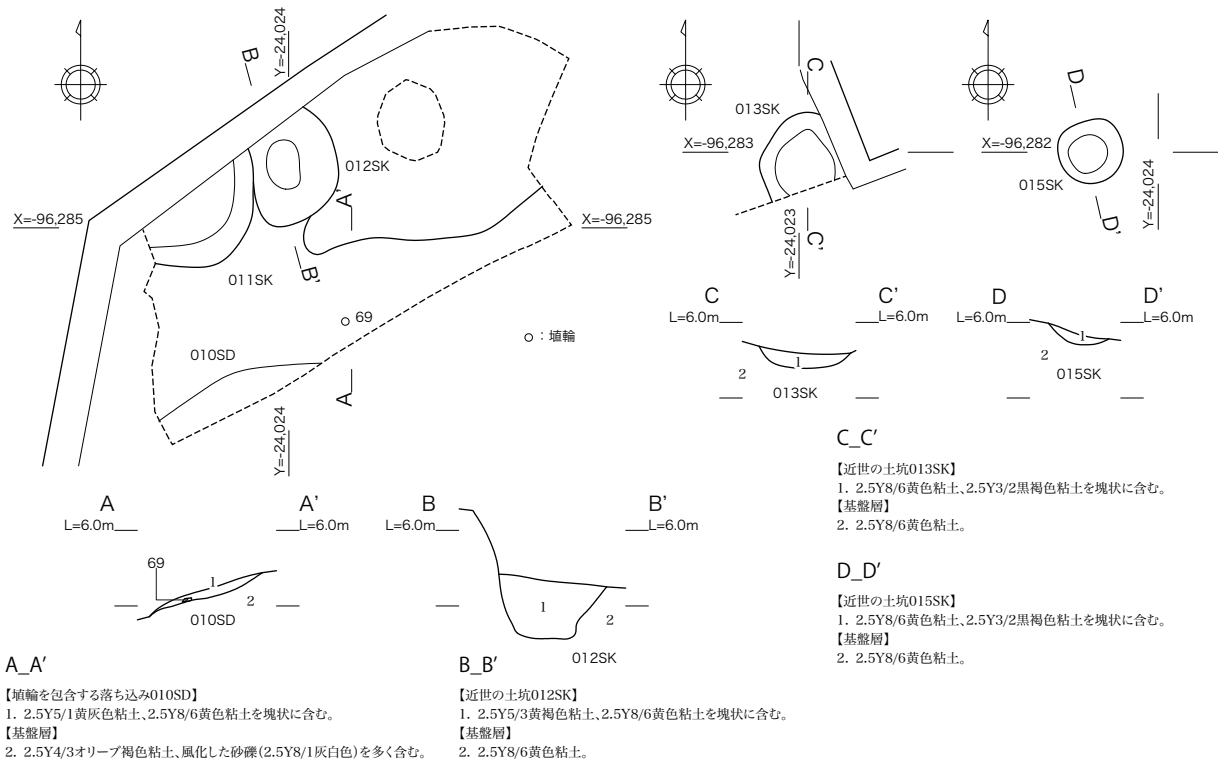
埋設物

層序

検出遺構



第16図 21B区平面図・土層断面図 (1:100)



第17図 21B区遺構平面図・土層断面図 (1:50)

緩斜面

基盤層そのものは古墳(後円部)の方向(北東方向から南西方向)に標高5.2mまで徐々に傾斜し(第17図)、緩斜面からは円筒埴輪底部が出土した。緩斜面は周濠(010SD)外側斜面である可能性がある。その他、拡張した部分からも円筒埴輪が出土した(第27図)。それ以外の古墳時代の遺物は出土していない。

(4) 22A区

調査区の設定

21A区で墳丘裾と周濠・周堤の状況を明確に確認できなかったので、改めて前方部西側の墳丘裾と周濠・周堤の状況を確認することを目的として、現墳丘裾から園路まで史跡指定範囲内の墳丘部分(a)に長さ2.5m、玉石垣間(b)に長さ9.0m、史跡指定範囲外の玉石垣から園路まで(c)に長さ11mを幅4.0mで設定した(第9図)。本来、前方部東側の20区を墳丘主軸に対して反転した位置に設定するところ、既設構造物を避けて、20区の北辺の延長線上に22A区の南辺が一致するように設定した(第18図)。造り出しまでは北方向に10数mの距離がある。

墳丘部分(a)
層序

墳丘部分(a)は現墳丘斜面下に層厚0.5mの公園整備後の表土、層厚1.0mの公園整備(玉石垣設置)時の盛土(埋土)が確認された。盛土の上位は瓦、煉瓦、近現代陶磁器等が集積していた。

検出遺構
溝004SD

盛土下位には墳丘(前方部)に沿う方向で溝004SDが検出された。断面形状は薬研堀状を呈する。底面付近を除く溝内の埋土は固く締まった粘土層で、墳丘側は基盤層に接して垂直方向に嵌入する層が観察された。基盤層は風化が進んだ砂層であることから、固く締まった粘土層、基盤層と粘土層間に嵌入する層は、墳丘裾の溝を掘削後、柵、柴垣等

の境界を明示する施設に関連する可能性も考えられる。

調査区東端（墳丘側）は公園整備時の盛土直下が基盤層で、墳丘外表面を明確に示す遺構は遺存していなかった。仮に墳丘側で確認した基盤層の傾斜付近に（基盤層を削り出した）墳丘斜面を想定した場合、斜面の勾配はほぼ2：1となる。基盤層の傾斜を延長した線と周濠底面の高さが想定される標高3.5mの交点は、墳丘測量図から墳端が想定された標高5mの等高線の位置とほぼ一致する。多くの不確定な条件による復元であるが、参考までに土層断面図上に提示する（第18図）。

基盤層と墳丘斜面

表土、盛土からは近現代、溝004SDからは、19世紀中葉までの中近世の遺物に混じって、円筒・朝顔形埴輪、脚付連結須恵器が出土した。近現代の客土中からは円筒・朝顔形埴輪、形象埴輪、須恵器が出土した。下位（溝004SD直上付近）からの出土が多く、上位からの出土は少ない。表土中からは細片化、風化した円筒埴輪が出土した。公園整備（玉石垣設置）後に墳丘の上位から流出したものと考えられる（第28・31・32・35図）。

遺物出土状況

玉石垣外間（b）は周濠部分に相当することが想定されるが、公園整備後の表土、玉砂利を敷き均した層、公園整備時の埋土を除去すると、基盤層が露呈する。周濠が存在したとすれば、底面の高さは標高3.4m以上に求められる。

玉石垣間（b）
層序

玉石垣直下、東端付近においては、墳丘（前方部）に沿う方向で溝003SDが検出された。断面形は「V」字に近く、上層、下層の埋土はほぼ単一である。溝の上層を中心として、土師器皿等の中世から近世の遺物に混じって、ややまとまった量の円筒・朝顔形埴輪、ごく少量の形象埴輪、須恵器が出土した（第29・31・32・35図）。埴輪の出土は墳丘側に多い傾向がある（第19図）。溝は古墳の西側が耕作地や宅地として利用された際の境界として掘削されたと考えられる。溝上層の埋土から採取した炭化材の放射性炭素年代測定の結果（測定番号PLD-49800）は、2σ暦年代範囲で1446-1510calAD（80.01%）の年代値を示した（第5章（1）を参照）。

検出遺構
溝003SD
遺物出土状況
炭化材の年代測定

玉石垣外側（c）は表土下の廃棄物を大量に含む層厚1.0～1.4mの公園整備時の盛土、層厚0.5mの旧耕作土、整地層を除去すると、基盤層が露呈する。廃棄物中の残渣から採取した炭化材の放射性炭素年代測定の結果（測定番号PLD-49801）は、付近から出土する耐火煉瓦等を勘案すると、2σ暦年代範囲で示された1915-1949calAD（21.09%）の年代値（第5章（1）を参照）が合致すると思われる。

玉石垣外側（c）
層序
炭化材の年代測定

玉石垣外側（c）の中央付近やや西寄りの整地層下位で墳丘（前方部）に沿う方向の溝002SDが検出された。溝の断面形は薬研堀状を呈し、整地や耕作の過程で繰り返し掘削された状況も確認された。整地層中からは戦国時代の遺物、溝002SDからは、18世紀後葉までの遺物に混じって円筒埴輪が出土した。攪乱掘削中からは須恵器が出土した。いずれも量はごく少ない（第28・32・35図）。

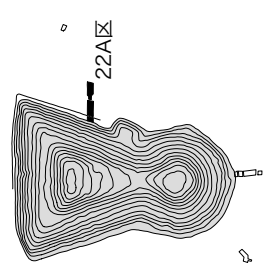
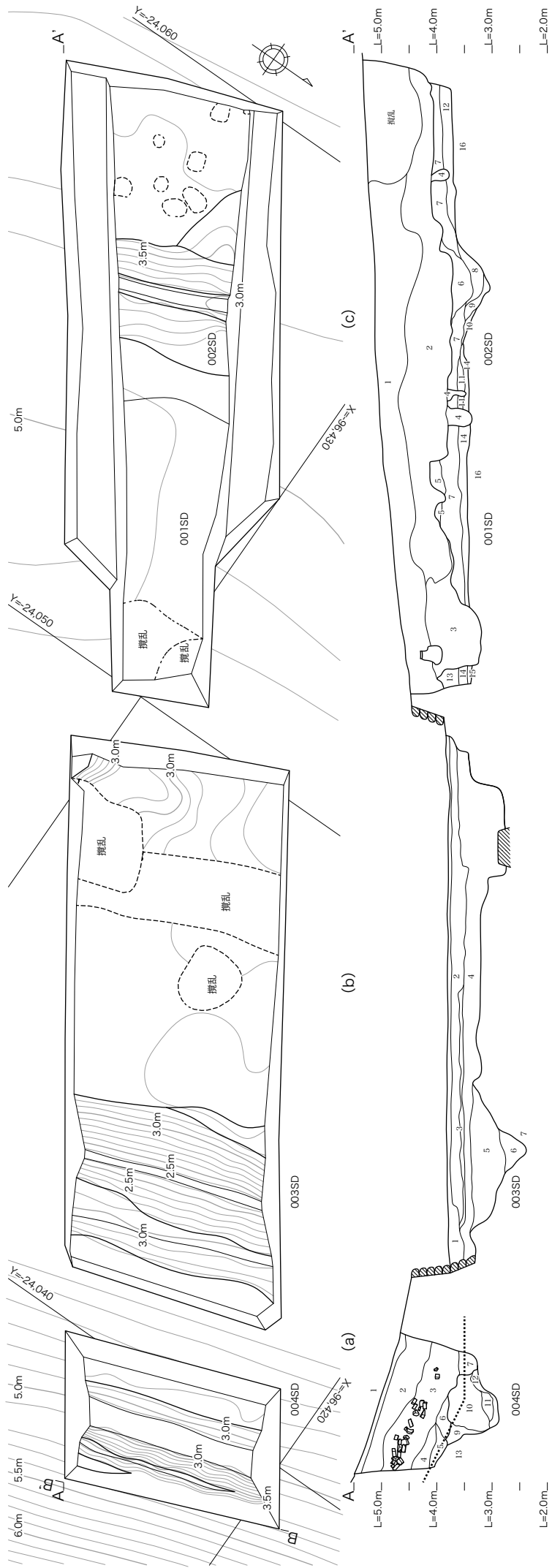
検出遺構
溝002SD
遺物出土状況

溝から園路（西）側の基盤層の標高は3.8mで、墳丘（東）側より0.3m高い。後世の削剥深度にそれほど差がないとすれば、この高低差は周濠内外の高低差を反映している可能性もある。

周濠・周堤の痕跡

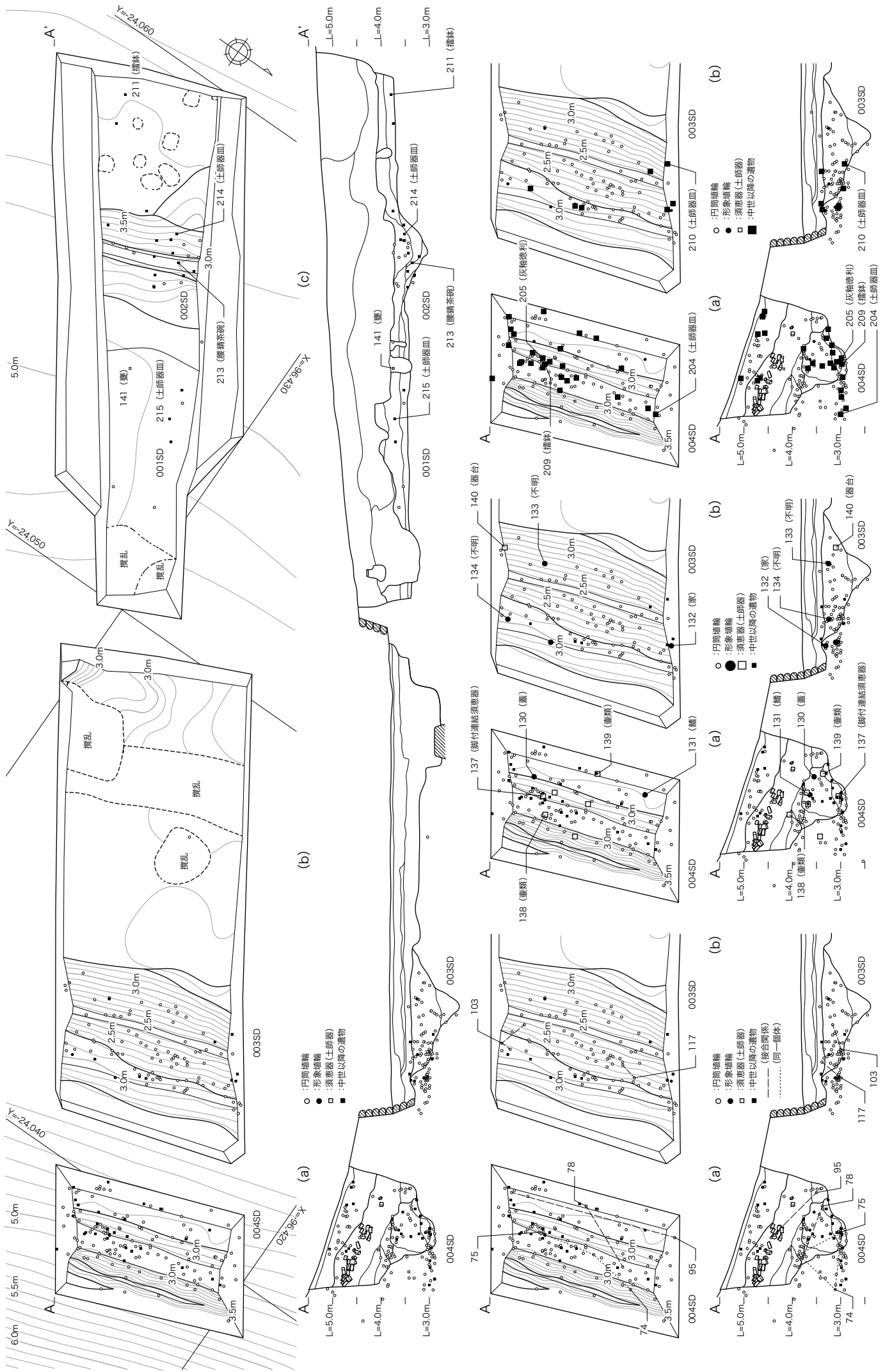
22A区を通じて、葺石、またはその転落石と思われる石材はほとんど認められなかった。

葺石の有無



- A_A'(a) B_B'(a)**
- 【公園造成後】
- 2.5Y3/1黒褐色シルト、玉砂利を多く含む。
 - 2.5Y3/1黒褐色シルト、細まりを欠く(表土)。
- 【公園・直丘整備時の盛土】
- 2.5Y4/2暗灰黄色中粒砂と2.5Y4/2暗灰黄色シルトの混層。
 - 2.5Y6/2灰黄色中粒砂、細まりを欠く。
 - 2.5Y6/2暗灰黄色中粒砂、細まりを欠く。
 - 2.5Y6/2暗灰黄色中粒砂、細まりを欠く。
 - 2.5Y6/2暗灰黄色中粒砂、細まりを欠く。
 - 2.5Y4/1黄灰色シルト。
 - 2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルト、砂礫多く含む、固く締まる。
- 【近世の遺004SD】
- 2.5Y5/1灰白色粘砂を多く含む。
 - 2.5Y6/1黄灰色粘土、固く締まる。
 - 2.5Y6/1黄灰色粘土、固く締まる。
 - 2.5Y5/2暗灰黄色シルト質粘土、固く締まる。
- 【基礎層】
- 2.5Y8/1灰白色中・粗粒砂。
- A_A'(b)**
- 【公園造成後】
- 2.5Y3/2黒褐色シルト。
 - 2.5Y2/1黒色シルト、玉砂利を多く含む。
 - 2.5Y3/2黒褐色シルト、2.5Y6/4に多い、黄色シルトを含む。
- 【公園造成時】
- 2.5Y3/2黒褐色シルトと2.5Y6/4に多い、黄色シルトの盛土。
 - (コンクリートコア等を含む)。
- 【近世の遺003SD】
- 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質シルト、2.5Y6/2灰黄色中粒砂を含む。
 - 2.5Y5/2暗灰黄色シルト、2.5Y6/2灰黄色中粒砂を多く含む。
- 【基礎層】
- 2.5Y5/2暗灰黄色～6/3に多い、黄色～7/4浅黄色細粒砂。
- A_A'(c)**
- 【公園造成時】
- 2.5Y5/3黄褐色シルト、固く締まる、公園造成時の盛土。
- 【公園造成前】
- 2.5Y2/1黒色シルト、レンガ、瓦、ガラス等を多く含む。
 - 2.5Y2/1黒色シルト質細粒砂、5YR5/6明赤褐色シルト、5Y6/1灰黄色シルトの互層。
 - (炭、灰、燃え滓の埋め立て)。
 - 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルトと2.5Y4/4オリーブ褐色粘質シルトの盛土。
 - 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト、2.5Y6/2灰黄色中粒砂を含む。
 - 2.5Y6/4に多い、黄色細粒砂(薄の再掘削)。
 - 2.5Y4/4オリーブ褐色粘質シルト、細片化した粗粒を多く含む(002SD以東)。
 - 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト。
 - 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質シルト、2.5Y6/1灰黄色中粒砂を含む(排出土)。
 - 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質シルトと2.5Y6/3に多い、黄色中粒砂の盛土(排出土)。
 - 2.5Y5/2暗灰黄色シルト、2.5Y6/3に多い、黄色中粒砂を含む(排出土)。
 - 【中世から近世】
 - 2.5Y5/3黄褐色シルト、2.5Y6/3に多い、黄色中粒砂を含む(整地層)。
 - 2.5Y5/3黄褐色粘質シルト(整地層)。
 - 2.5Y6/1黄灰色粘土、固く締まる。
 - 2.5Y6/3に多い、黄色中粒砂を含む(整地層)。
 - 2.5Y6/3に多い、黄色シルト、2.5Y6/3に多い、黄色中粒砂を含む(整地層)。
- 【基礎層】
- 2.5Y6/4に多い、黄色中粒砂。

第18図 22A区平面図・土層断面図 (1:100)



第19図 22A区遺物出土分布図 (1:100)

(5) 22B区

調査区の設定

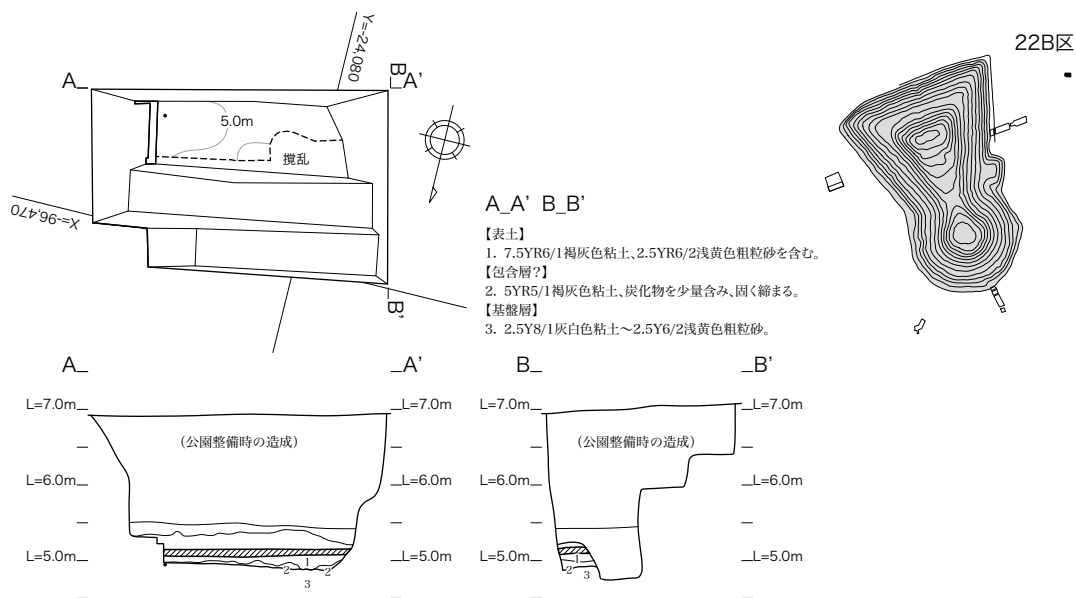
古墳西側の周堤外側の状況（二重周濠の有無）を確認することを目的とした22B区（10㎡）を、球技場を調査対象とすることが困難なことから、球技場の南に長さ4.0m、幅2.5mで設定した（第9図）。周囲は園路と比較してもかなり高く（標高6.9m）、改変の有無と程度、古墳周囲の旧地形も併せて確認することにした（第20図）。

層序

地表下1.7mは公園整備時の造成で、造成時には造成以前の宅地に関する構造物が埋め立てられた状態であった。造成以前の層厚0.2mの表土下には均質な褐灰色粘土層が堆積し、その下に基盤層（標高5.0m）を確認した。調査区北半は基盤層の下位まで攪乱が及んでいた。

出土遺物

褐灰色粘土層は、表面が摩滅した埴輪または土師器の小片が出土するのみで、旧表土、遺構の埋土等と考えられるが、その成因を確定することは難しい。



第20図 22B区平面図・土層断面図（1:100）

第4章 出土遺物

(1) 円筒・朝顔形埴輪

1 概要

古墳に関係する出土遺物の多くが埴輪で、総重量26.2kgが出土した。20区周濠に伴って出土した埴輪が多く、他の調査区は後世の遺構に混入した量の多寡を示す(第21図、第8表)。

埴輪はいずれも無黒斑、窖窯焼成による。大部分は円筒・朝顔形埴輪で、25.7kg(98.1%)が出土した。朝顔形埴輪は口縁部(32・68・77)、頸部(33・44・76・128)、壺部(5・56)から特定が可能な破片を抽出して図化の対象としたが、それ以外の部分については、円筒埴輪との識別が困難なので、円筒埴輪として一括した。ほとんどが「尾張型(円筒)埴輪」として定義される規格的な製品である。

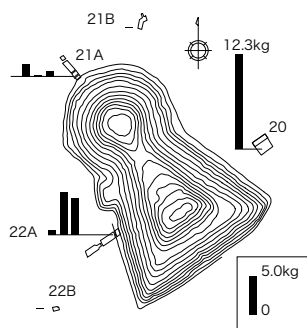
全形が判明する個体はなく、口縁部・基底部高、突帯間隔が判明する個体もごく少ない。径が1/12以上残る破片については、径を復元して図化し、1/12以下の破片については、主に口縁部・底部、突帯、透孔が残存する部位を抽出し、破片の状態の内外面を平面上に投影して図化した。図化の対象としたのは128点、14.2kg(55.3%)である(第24～29図)。

2 色調・焼成・胎土

色調は淡橙色系、淡黄橙色系、黄橙色系、橙色系、黄灰色系、灰白色系、灰色系、紫～赤灰色系に大別される(参考として、『新版 標準土色帖』による記載との対応関係を第9表に示す)。前二者の淡橙色系、淡黄橙色系は土師質、後三者の灰白色系、灰色系、紫～赤灰色系は須恵質にほぼ対応するが、黄橙色系、橙色系、黄灰色系は固く焼き締まったものも多く、土師質と須恵質に分けることは難しい。焼成室内の設置位置に起因する個体間の色調差、製品の大きさにも起因する一個体内の階調的な色調差も多分に関係していると思われるが、重量でおよそ前五者の橙～黄色系が3～4割、灰白色系が2割、後二者の灰色系が4～5割を占める(第8表、第22図)。土師質と須恵質の区分にもよるが、およそ2割から4割が土師質、6割から8割が須恵質とすれば、味美二子山古墳と下原古窯で土師質が2割、須恵質が8割、大垣戸狐塚古墳で須恵質と中間様相を含めた還元焰焼成が8割とする比率と大きくは変わらない(第22図)。なお、味美二子山古墳等に散見される大きく焼け歪んだような円筒埴輪はほとんど認められないが、自然釉が付着するものがある(10・122・123)。胎土は多くが緻密であるが、著しく緻密なもの、砂粒が多く混入するものも散見される。胎土の観察結果は巻末の一覧表に記載した。

3 規格・形状

口縁部・基底部高が判明する個体は口縁部1個体(78)のみで16.3cmである(第23図)。採集資料は12～19cm(口縁部高)、16～18cm(基底部高)に連続して分布し、基底部高11cm程度の個体は(底径からも)2突帯3段である可能性が高い(後述)。



第21図 埴輪の出土重量分布

出土量

円筒・朝顔形埴輪

朝顔形埴輪

尾張型(円筒)埴輪

残存状況

図化の方針・対象

色調

味美二子山古墳

下原古窯

大垣戸狐塚古墳

自然釉

胎土

口縁部高

基底部高

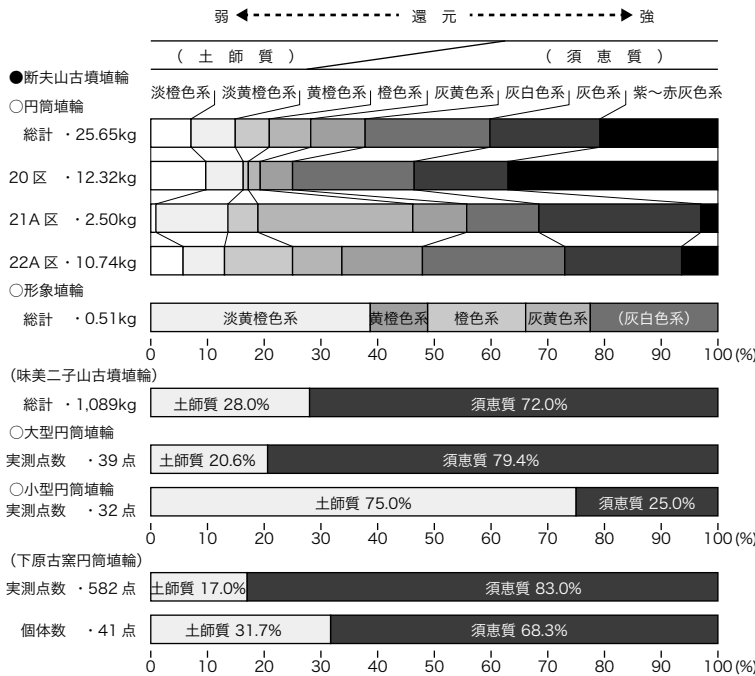
第8表 色調分類と出土重量

調査区	淡橙色系	淡黄橙色系	黄橙色系	橙色系	灰黄色系	灰白色系	灰色系	紫～赤灰色系	計
20	1191.1 9.7%	812.0 6.6%	114.7 0.9%	263.9 2.1%	702.2 5.7%	2629.8 21.3%	2046.2 16.6%	4559.1 37.0%	12319.0 100.0%
21Aa	0 0.0%	52.9 7.4%	0 0.0%	355.9 50.0%	92.1 12.9%	0 0.0%	179.1 25.2%	31.2 4.4%	711.2 100.0%
21Ab	0 0.0%	74.0 36.6%	0 0.0%	81.2 40.2%	25.6 12.7%	0 0.0%	21.3 10.5%	0 0.0%	202.1 100.0%
21Ac	22.4 1.4%	190.1 12.0%	132.3 8.3%	245.8 15.5%	119.5 7.5%	315.8 19.9%	514.9 32.5%	44.8 2.8%	1585.6 100.0%
21A計	22.4 0.9%	317.0 12.7%	132.3 5.3%	682.9 27.3%	237.2 9.5%	315.8 12.6%	715.3 28.6%	76.0 3.0%	2498.9 100.0%
21B	0 0.0%	82.3 100.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	82.3 100.0%
22Aa	97.0 2.0%	196.5 4.2%	575.7 12.2%	578.5 12.2%	1116.9 23.6%	911.1 19.3%	896.9 19.0%	359.3 7.6%	4731.9 100.0%
22Ab	498.4 9.1%	584.4 10.6%	676.2 12.3%	288.2 5.2%	294.7 5.4%	1613.6 29.4%	1247.9 22.7%	290.1 5.3%	5493.5 100.0%
22Ac	21.0 4.1%	0 0.0%	41.0 7.9%	69.9 13.5%	108.8 21.0%	171.9 33.2%	65.4 12.6%	40.3 7.8%	518.3 100.0%
22A計	616.4 5.7%	780.9 7.3%	1292.9 12.0%	936.6 8.7%	1520.4 14.2%	2696.6 25.1%	2210.2 20.6%	689.7 6.4%	10743.7 100.0%
22B	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	6.2 100.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	6.2 100.0%
計	1829.9 7.1%	1992.2 7.8%	1539.9 6.0%	1883.4 7.3%	2466.0 9.6%	5642.2 22.0%	4971.7 19.4%	5324.8 20.8%	25650.1 100.0%
(形象)	0 0.0%	195.9 38.7%	87.7 17.3%	87.7 17.3%	51.2 11.4%	51.2 11.4%	0 0.0%	0 0.0%	506.6 100.0%

第9表 色調分類との対応関係

色調区分	(色調の記載)
淡橙色系	5YR8/4淡橙色
	7.5YR8/3浅黄橙色
	7.5YR8/4浅黄橙色
	7.5YR7/2明褐灰色
淡黄橙色系	7.5YR8/6浅黄褐色
	10YR8/4浅黄褐色
	10YR8/3浅黄褐色
	10YR8/3浅黄褐色
黄橙色系	10YR8/6浅黄褐色
	10YR7/6明黄褐色
	10YR7/4にぶい黄褐色
	10YR7/3にぶい黄褐色
橙色系	5YR6/6褐色
	7.5YR7/6褐色
	7.5YR7/4にぶい褐色
	7.5YR6/6褐色
灰黄色系	2.5Y8/4淡黄色
	2.5Y8/3淡黄色
	2.5Y7/4浅黄色
	2.5Y7/3浅黄色
	5Y8/3淡黄色
灰白色系	10YR8/2灰白色
	2.5Y8/2灰白色
	2.5Y8/1灰白色
	5Y8/2灰白色
	5Y8/1灰白色
	7.5Y8/1灰白色
	10Y8/1灰白色
	N8/0灰白色
灰色系	2.5Y7/1灰白色
	5Y7/2灰白色
	5Y7/1灰白色
	5Y6/1灰色
	5Y5/1灰色
	7.5Y7/1灰白色
	7.5Y6/1灰色
10Y7/1灰白色	
10Y6/1灰色	
10Y5/1灰色	
N7/0灰白色	
紫～赤灰色系	2.5YR5/1赤灰色
	2.5YR4/2灰赤色
	2.5YR4/1赤灰色
	5YR5/4にぶい赤褐色
	5YR5/3にぶい赤褐色
	7.5YR7/2明褐灰色
	7.5YR5/4にぶい褐色
	7.5YR5/2灰褐色
	10YR5/2灰黄褐色
	N6/0灰色
N5/0灰色	
N4/0灰色	
5PB4/1暗青灰色	

(色調の記載は『新版 標準土色帖』による)



第22図 色調・焼成の比較

突帯間隔

突帯間隔が判明する個体は4個体(6・10・17・127)のみで、7.5～10cmである。採集資料を含めて、突帯間隔は7.5～11.5cmに連続して分布し、口縁部高、(2突帯3段と推測される個体を除いて)基底部高を上回らない(第23図)。

口縁部径

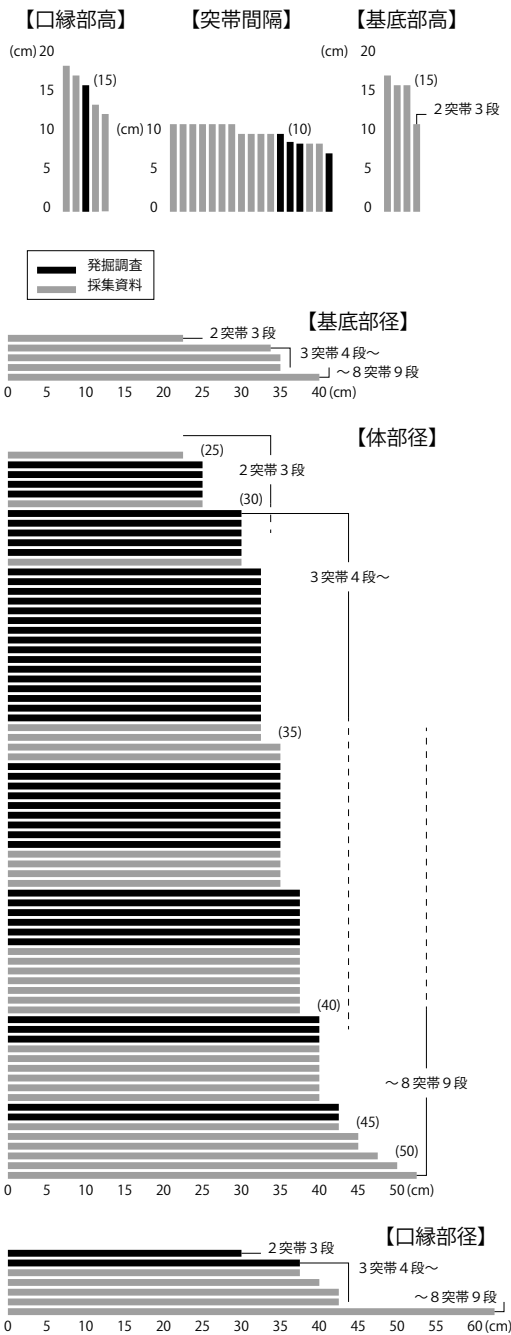
口縁部径を還元した個体は2個体のみで、還元径は31.0cm(78)、36.6cm(100)である。

筒形

前者は筒形の器形で、2突帯3段の可能性もある。採集資料を含めて38～42cmに連続して分布する一群は3突帯4段以上が想定され、8突帯9段は60cmを上回る(第23図)。

体部径

体部径は30～38cm程度に還元される個体が多く、42cm程度まで連続して分布する。8突帯9段が含まれる採集資料は30～52cm程度に連続して分布し、38cmを上回る個体も多い。25～30cmに認められる若干の懸隔が概ね2突帯3段と3突帯4段の差を反映しているとすれば、25cm程度までの個体(67・70・111・113)は2突帯3段の可能



第23図 (復元) 計測値の比較と規格の関係

性が高い(第23図)。これらは21A区、21B区、22A区から少量出土する(21B区は2突帯3段に限られ、20区はそれが含まれない可能性が高い)。

基部と判断した個体はごく少ない(69・91)。口縁部として図化した個体に(倒立後の)底部が含まれている可能性はあるが、明確に識別することは難しいので、底部として扱った。

基部径については、復元が可能な個体が発掘調査で出土しなかった。採集資料を含めても基部径が判明する個体は少ないが、20~25cmが2突帯3段、30cm以上が3突帯4段以上に対応すると思われ、8突帯9段が40cm程度に達する(第23図)。21B区出土の底部(69)は径が不明であるが、調整等から2突帯3段である可能性が高い。91は円筒・朝顔形埴輪以外の埴輪である可能性もある(後述)。

4 成形

5~12は色調・胎土、器壁の厚さ、突帯形状等から同一個体の可能性が高い一群で、朝顔形埴輪の壺部(5)も含まれる。10は外反する形状、自然釉の付着から、倒立させた部位と判断して図化した(同一個体の可能性が高い他の部位とは復元径が整合しない)。113・126は倒立後の底部(擬口縁)への積み上げ、叩きが分かる部位である。その他、1・55・91・112・127に叩きが施され、

基部

基部径

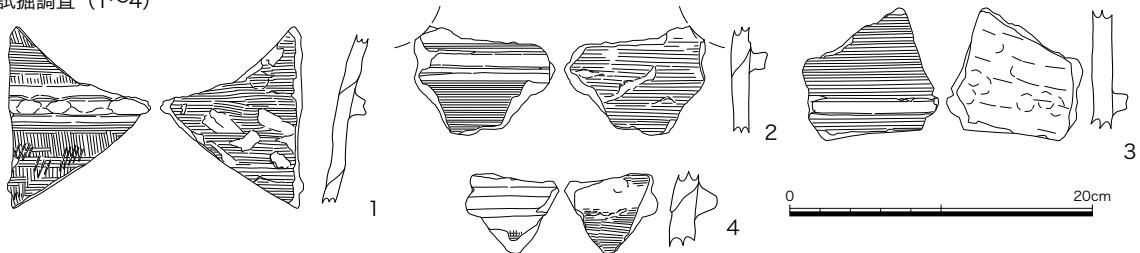
同一個体

朝顔形埴輪

倒立技法

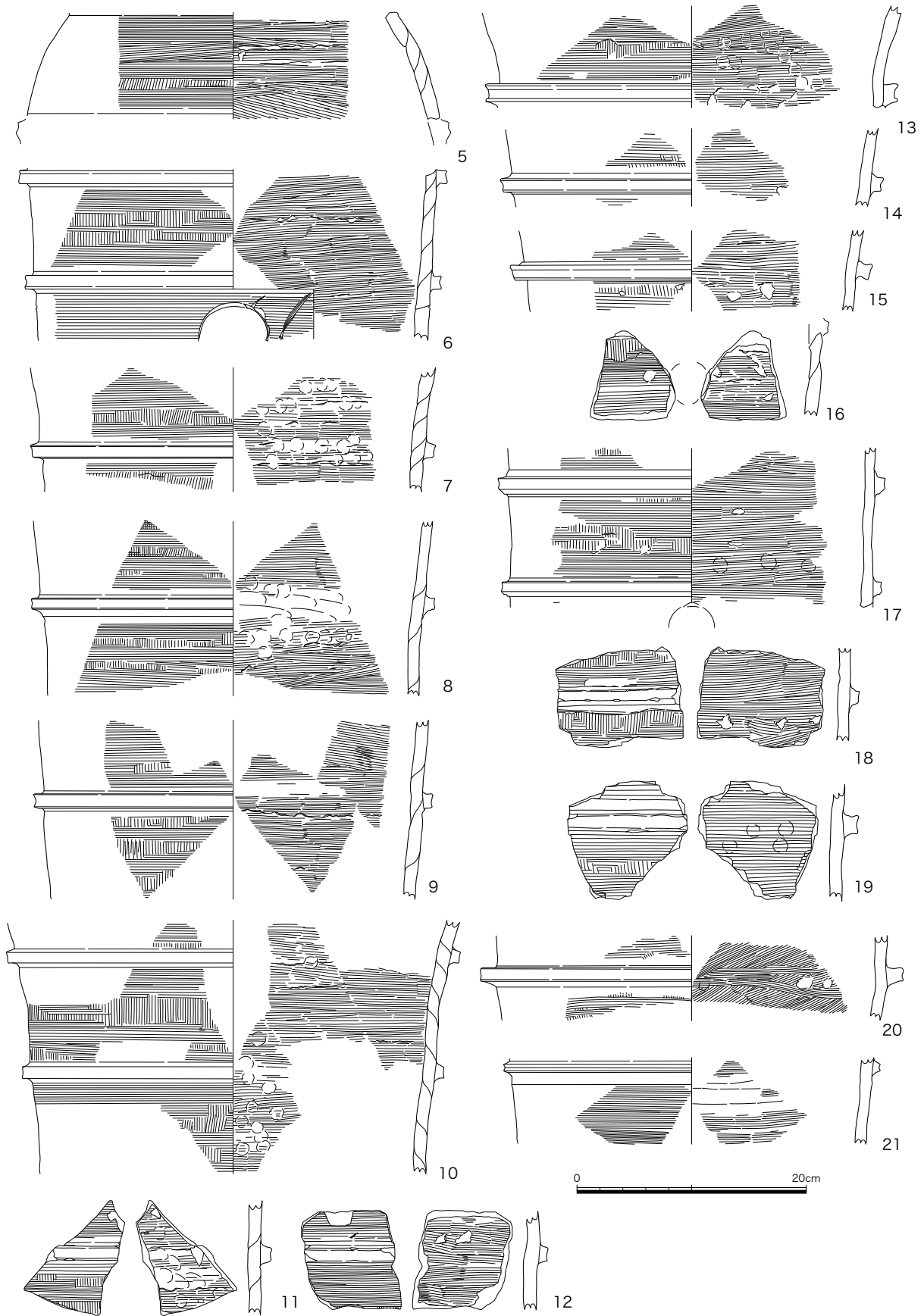
叩き

試掘調査(1~4)



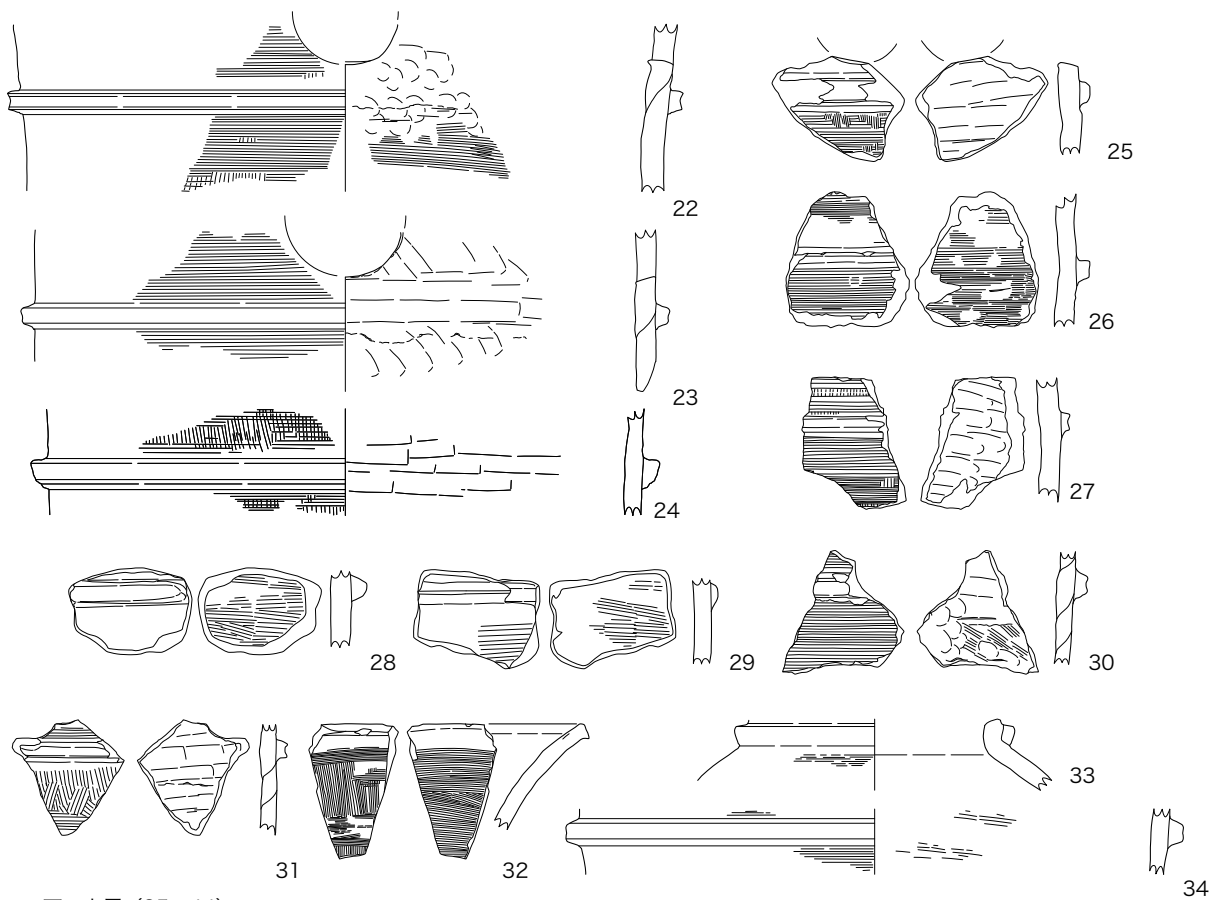
第24図 試掘調査出土円筒・朝顔形埴輪実測図(1:5)

20区 周濠015SD下層 (5~21)

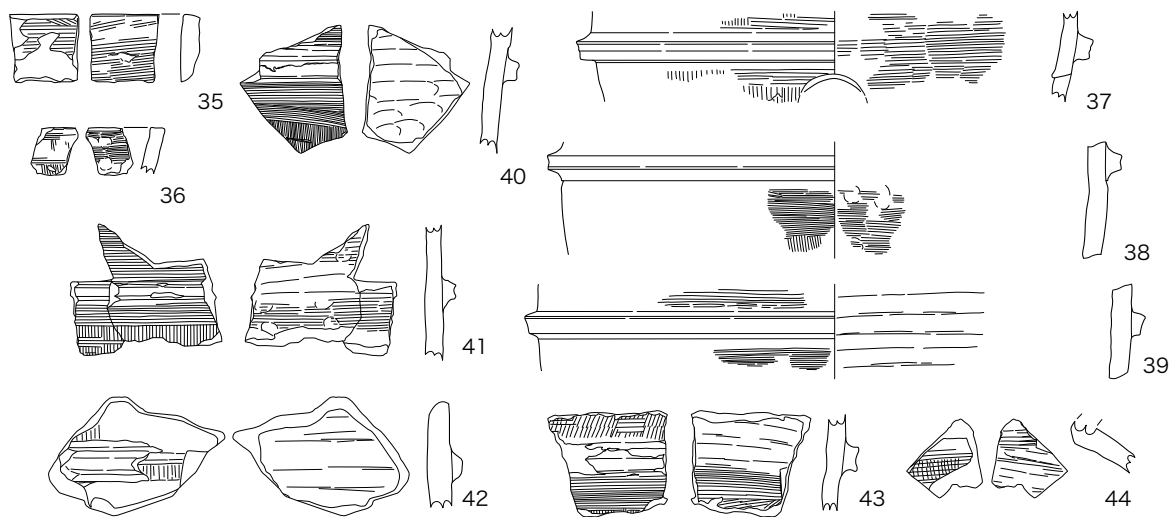


第25図 20区周濠015SD下層出土円筒・朝顔形埴輪実測図 (1:5)

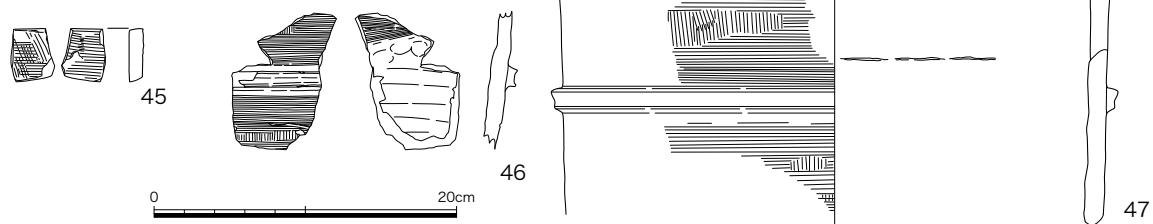
20区 周濠015SD下層 (22~34)



下・上層 (35~44)



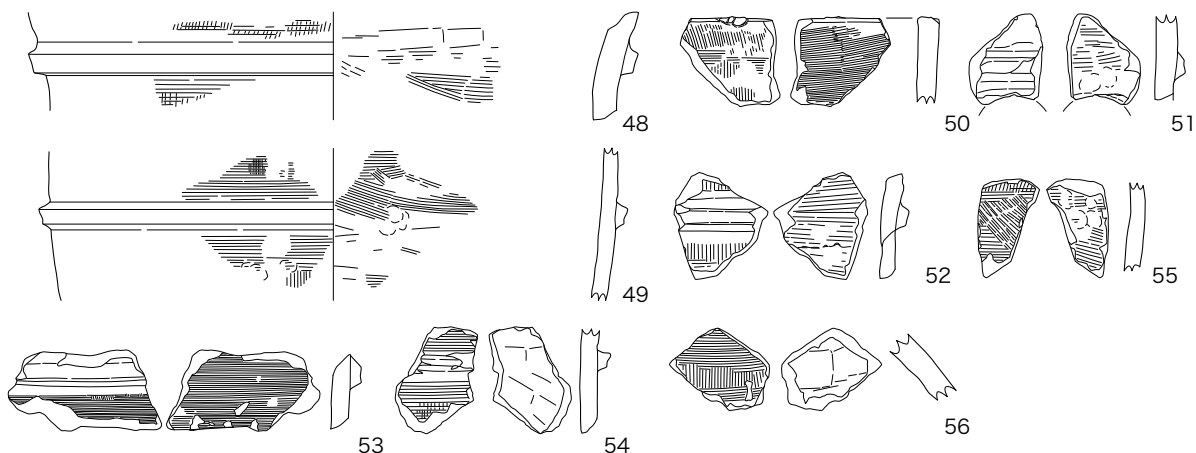
上層 (45~47)



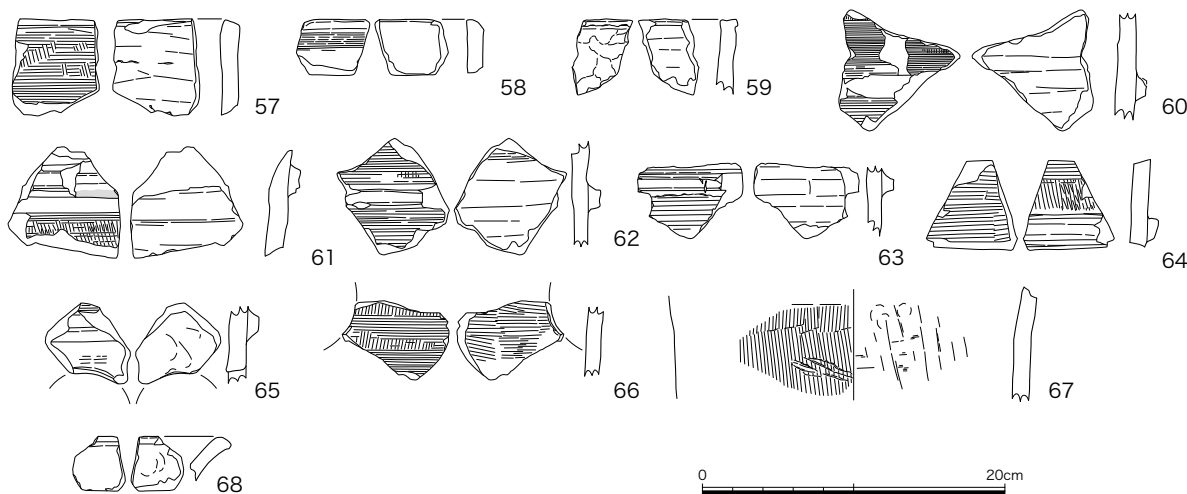
0 20cm

第26図 20区周濠015SD下層・上層出土土円筒・朝顔形埴輪実測図 (1:5)

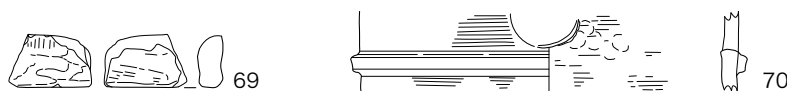
21A区 墳丘部分(a) 客土 (48~56)



21A区 玉石垣外側(c) 周濠状の落ち込み001SD (57~68)



21B区 緩斜面 (周濠) 010SD (69) 拡張部分 (70)



第27図 21A区・21B区出土円筒・朝顔形埴輪実測図 (1:5)

無文当て具痕

127の内面には同心円状の無文当て具痕が残る。底部と思われる部位に叩きを施した91は内外面ともハケが観察されない。113は径が小さく、破片の下端付近が彎曲する。

5 調整

外面調整

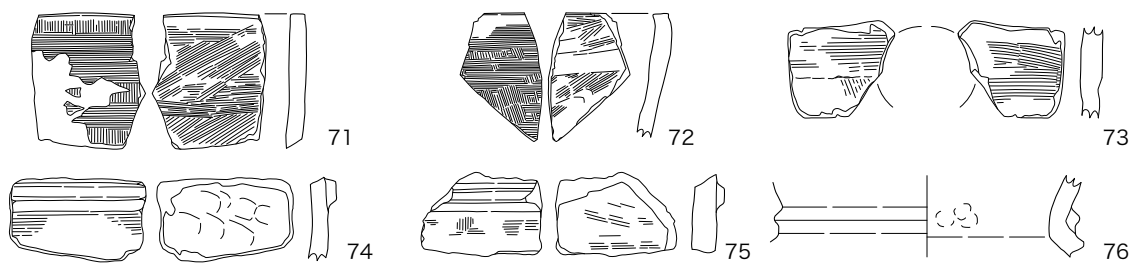
外面調整の多くは1次調整としてのタテハケ後、2次調整として回転横ハケを施す。ハケの密度は、著しく粗いもの、著しく細かいものを特に区分し(第30図)、巻末の一覧表に記載した。タテハケのみの個体(67・69・122・123)についても、他の部位に回転ヨコハケが施されたことが想定される。117(口縁部)は城山2・3号窯の円筒埴輪B類にも類似した粗いナメハケを施す。59(口縁部)は雑なナデ、91(底部)は叩きを施した例外的な存在であるが、円筒・朝顔形埴輪以外の埴輪である可能性もある。

ハケの密度

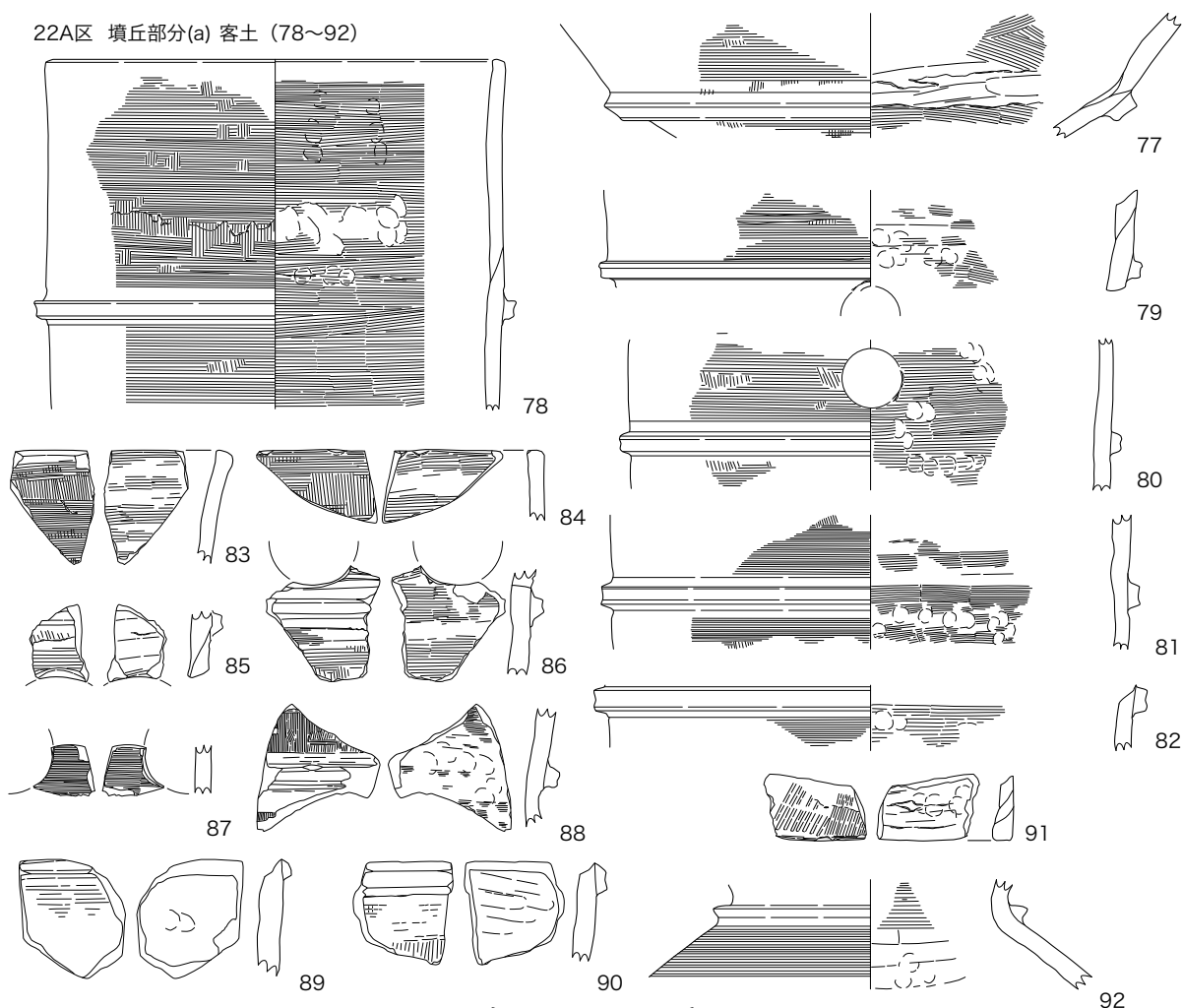
内面調整

内面調整は多くがヨコハケ、ヨコハケ後の横方向のナデを主体とするが、斜方向や縦方

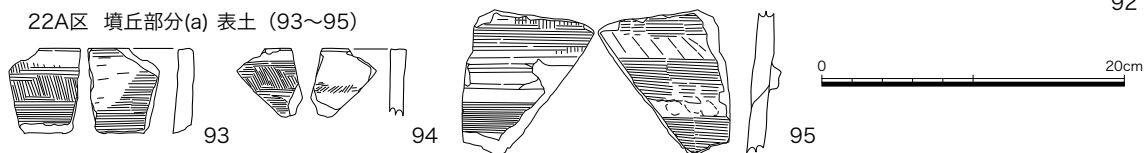
22A区 墳丘部分(a) 溝004SD (71~77)



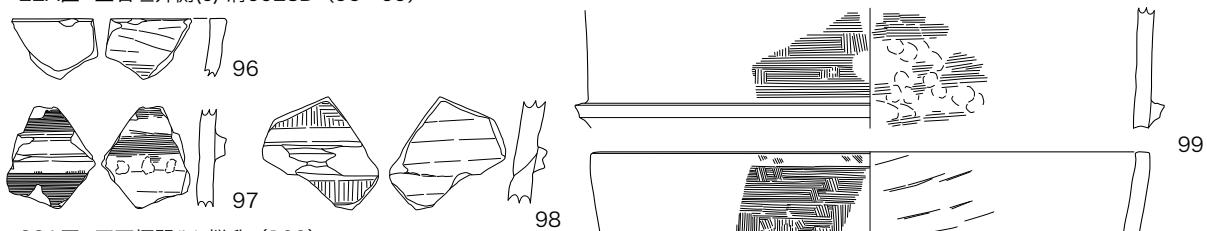
22A区 墳丘部分(a) 客土 (78~92)



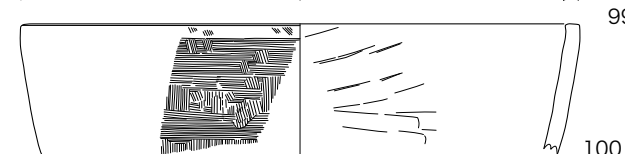
22A区 墳丘部分(a) 表土 (93~95)



22A区 玉石垣外側(c) 溝002SD (96~99)

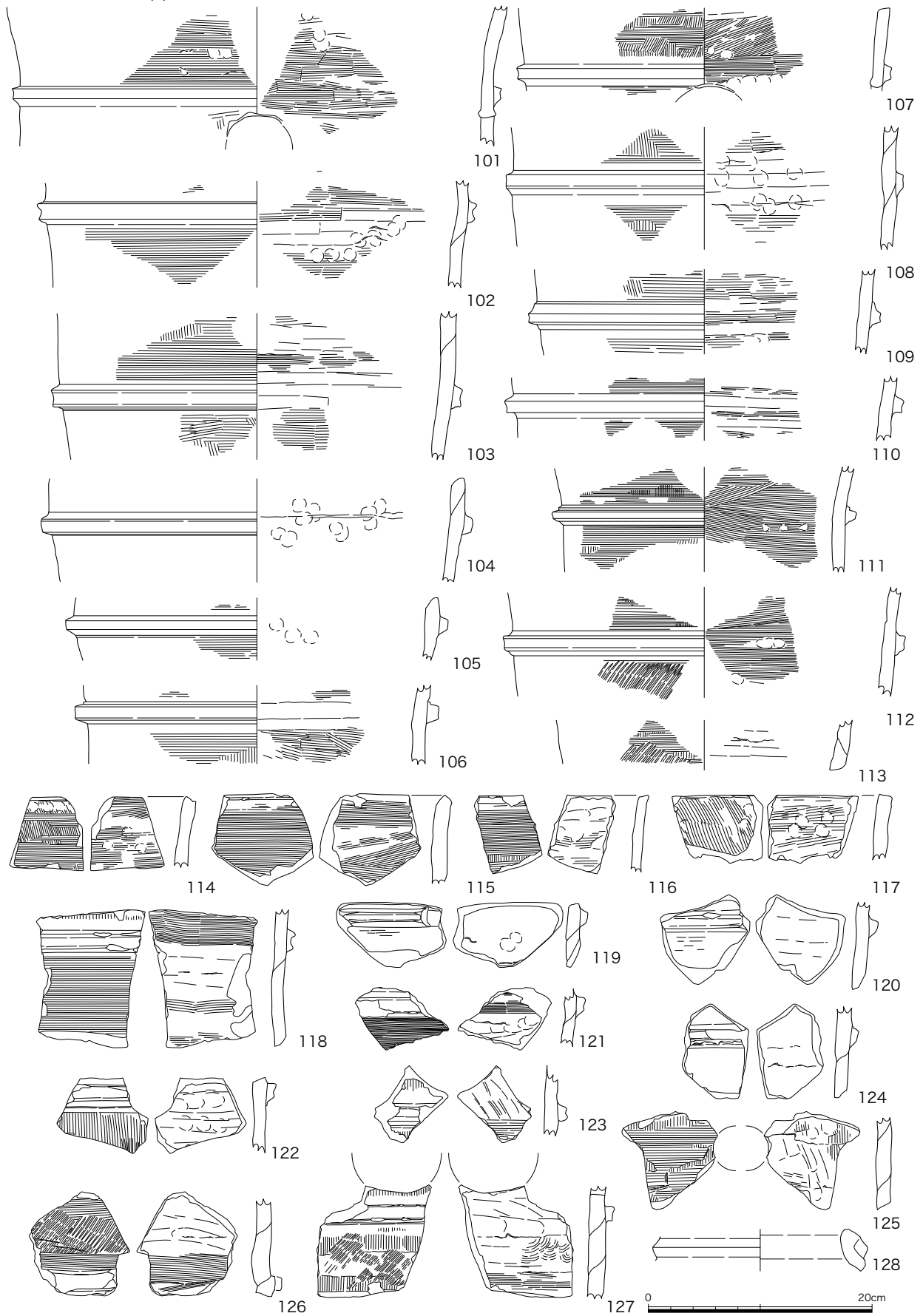


22A区 玉石垣間(b) 攪乱 (100)



第28図 22A区出土円筒・朝顔形埴輪実測図 (1:5)

22A区 玉石垣間(b) 溝003SD (101~128)



第29図 22A区溝003SD出土円筒・朝顔形埴輪実測図 (1:5)



第30図 円筒・朝顔形埴輪の各種調整拓影 (1:1)

向を基調としたハケ、ナデ調整を施した個体 (67・123・125 等) もわずかに認められる。

出土した底部がごく少ないことにもよるが、底部調整としてのヨコケズリ、回転台離脱痕跡(いわゆる「味美技法」)は認められない。復元径から2突帯3段と推測される67のみ、紐ずれと思われるような圧痕が残る。

底部調整
紐ずれ

6 その他 (突帯、透孔・ヘラ記号、赤彩等)

突帯の断面形状は高い「M」字形、低い「M」字形、高い台形、低い台形がある。29・42・61は突帯設定技法として、幅0.2～0.5cmの1条の凹線を施す。

突帯形状
突帯設定技法

透孔の形状は円形に統一される。多くは突帯に近接するが、80は径4cm程度の小円孔を穿孔する。101は半乾燥状態で、指をかけ(て持ち上げ)たことにより、透孔が歪む。6・86は円形の透孔にヘラ記号を伴う。46のヘラ記号も透孔の付近に施されたものであろう。

透孔
ヘラ記号

49・50・61は赤彩が確認される。剥落する部分も多いが、外面全面に施していたと思われる。49は内面に飛散した顔料が付着する。61は突帯が剥離し、突帯設定技法の凹線の下位に赤彩が認められる。

赤彩

[参考文献]

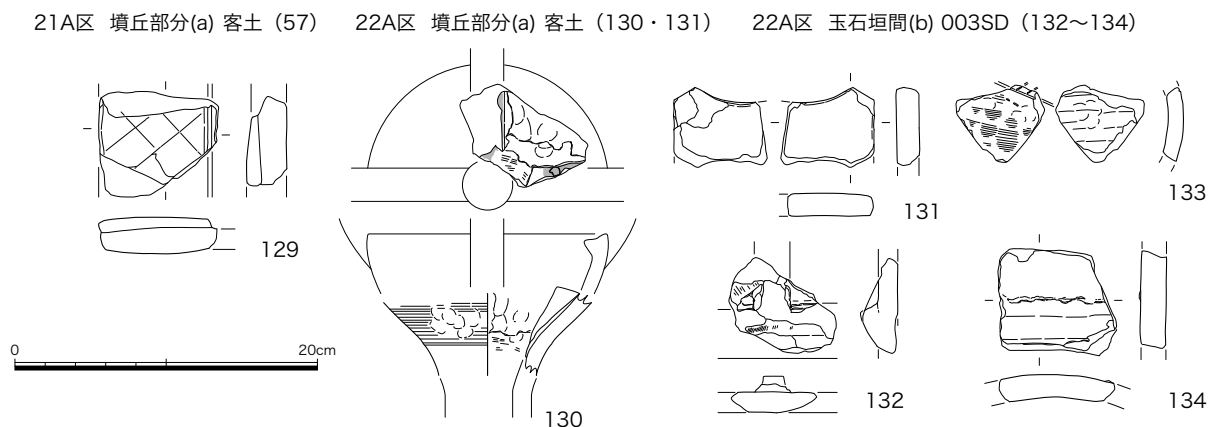
- 三渡俊一郎 1983「名古屋市熱田白鳥・断夫山古墳の前後関係について」『古代学研究』99 古代学研究会
- 名古屋市教育委員会 1989『白鳥古墳第II次発掘調査報告書』名古屋市文化財調査報告21
- 赤塚次郎 1991「尾張型埴輪について」『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第24集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 春日井市教育委員会 2004『味美二子山古墳』春日井市遺跡発掘調査報告第10集
- 春日井市教育委員会 2006『下原古窯跡群』春日井市遺跡発掘調査報告第12集
- 春日井市教育委員会 2018『大垣戸塚古墳』春日井市遺跡発掘調査報告第18集
- 酒井将史 2019「志段味古墳群の埴輪の生産地」『埋蔵文化財調査報告書83 志段味古墳群IV』名古屋市文化財調査報告100 名古屋市教育委員会

(2) 形象埴輪

- 出土量・調査区 形象埴輪の出土は0.5kg (1.9%) で、ごく少ない。多くは22A区からの出土で、21A区からもわずかに出土した(第31図)。器種をほぼ特定したのは蓋形埴輪、家形埴輪のみで、その他、(蓋形埴輪の立飾または家形埴輪の屋根の) 鱗飾りが想定される破片、その他、器種の特定が困難な破片(円筒埴輪に含められない埴輪)がある。堅緻に焼成される個体もわずかにあるが、明確な須恵質に焼成された個体は認められない。
- 21A区 21A区からは、器種不明1点(129)が出土した。板状で、外面に粘土板を貼り、わずかな段差を表現する。外面(貼り付けた粘土板上面)には鋭利な工具を用いて斜格子状の意匠を描出する。
- 22A区墳丘部分 22A区墳丘部分(a)の客土からは、蓋1点(130)、器種不明の鱗飾りの破片1点(131)が出土した。蓋(130)は立飾の飾板受部とした。内面は直交する2方向に飾板が剥離した状態が観察される。飾板の貼り付けに際しては、粘土を付加して補強している。粘土接合部分付近を中心に赤彩がよく残る。本来は内外面を赤彩していたと思われる。飾板の位置関係を勘案して復元した口径は16cm、軸部の径は6cm程度と推測され、採集遺物(熱田神宮公園)中に確認される台部軸受部の口縁部(第8図10)とも法量が対応する。
- 蓋形埴輪 器種不明の鱗飾り(131)は全面の風化により、整形面と破断面の区別が難しいが、表裏の区別がない板状で、(図上の上方向に)弧状の辺を作出する。表裏とも無文と思われる。蓋形埴輪の立飾または家形埴輪の屋根等の鱗飾りが想定される。
- 22A区玉石垣間 22A区玉石垣間(b)の溝003SDからは、家形埴輪(132)、器種不明2点(133・134)が出土した。132は粘土紐貼付けによる縦横の区画を家形埴輪の上屋根の押縁突帯と基部の突帯が接続する部分とした。133は破断面付近に沈線とそれに斜行する沈線の痕跡がわずかに残る。成形等から位置を想定した場合、斜行する沈線、やや彎曲する形状が示される。134は円筒埴輪の突帯に比して、明らかに広い幅で粘土帯が剥離した痕跡が残る。外面にハケが観察されないことから、形象埴輪に含めた。横方向がわずかに彎曲する。

[参考文献]

春日井市教育委員会 2004『味美二子山古墳』春日井市遺跡発掘調査報告第10集



第31図 形象埴輪実測図(1:5)

(3) 須恵器

点数はごく少なく総計8点、総重量190gが出土した(第32図)。調査区・遺構、器種は20区周濠015SD下・上層出土の杯類(135)と甕(136)、22A区墳丘部分(a)の溝004SD出土の脚付連結須恵器(137)、同客土出土の壺類(138・139)、同玉石垣間(b)の溝003SD出土の器台(140)、同玉石垣外側の攪乱出土の甕(141)である。

杯類(135)は蓋杯または有蓋高杯の蓋受部分であるが、径の復元は困難である。

脚付連結須恵器(137)は杯部下位から脚部上位が残存する。杯部の底部がない筒抜けの状態から脚付連結須恵器とした。類例との比較からすると、脚付連結壺の可能性が高い。杯部に壺や杯を貼り付けたような痕跡は認められない。杯部上位は列点文を密に施し、文様帯上位には透窓の底辺が確認される。脚部は沈線による文様帯区画が3段分遺存し、各段の区画内に波状文、透窓を配する。(上位から)2段目は6方向に割り付けられていると推定されるが、1段目は6方向より少ないようである。

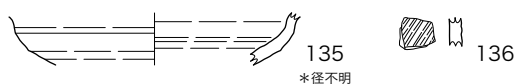
壺類は頸部から体部上位(138)、体部中位付近(139)がある。前者は無文で、後者はやや曖昧な沈線間に波状文を施す。脚付連結須恵器(137)とは別個体であるが、法量、文様等から、(別個体の)脚付連結壺の子壺の可能性も考慮される。

脚付連結須恵器(137)は類例との比較から、東山10号窯式期から東山61号窯式期に対比され、時期は6世紀前半が想定される。他の器種の詳細な時期を明らかにすることは困難であるが、同様の時期が想定される。

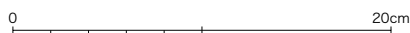
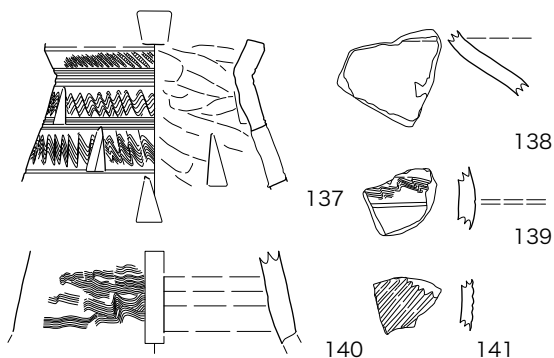
[参考文献]

城ヶ谷和広 2015 「編年論」『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系 愛知県

20区 周濠015SD下・上層(135・136)



22A区 墳丘部分(a) 溝004SD(137) 客土(138・139) 玉石垣間(b) 溝003SD(140) 玉石垣外側(c) 攪乱(141)



第32図 須恵器実測図(1:4)

(4) 古墳築造以前・以後の遺物

1 概要

古墳築造以前 古墳築造以前の出土遺物として、古墳時代前期と推定される若干の土師器 (142・古墳時代から古代 212) がある。古墳時代から古代と推定される土製品として、20区から管状土錘 (143) 中世 が出土した (第 33・35 図)。古墳周濠の埋没、浚渫、整地に関係する層中からは、中世近世 を主体とする遺物が出土している (第 33・35 図)。各調査区の古墳周囲の造成、土地利用に近現代 関係する遺構、層中からは、近世を主体とする遺物が多く出土している (第 33～35 図)。その他、公園整備時の客土、表土中には、近現代の遺物が大量に含まれていた。

2 20区

周濠015SD上層 周濠 015SD 下層上面から、尾張型第 3 型式の山茶碗 (144)、同上層から東濃型丸石 3 号窯式の山茶碗 (145)、尾張型第 6・7 型式の山茶碗 (146・147)、瓦器火鉢 (148) 等、12 世紀から 13 世紀の遺物が出土している。龍泉窯系 I -5 類の蓮弁文碗 (149) は試掘周濠015SD上面 調査時に出土した。20区周濠 015SD 上位 (の盛土中) からは、登窯第 3 小期の黄瀬戸鉢 (152)、登窯第 6・7 小期の灰釉丸碗 (150・151) 等の陶器、波佐見染付丸皿 (153)、産地不明染付香炉 (154) 等の磁器、ロクロ調整土師器皿 (155) が出土している。陶磁器類は 17 世紀中葉から 18 世紀中葉に対比される (第 33 図)。

試掘調査・20区 その他、試掘調査、20区から、志野丸皿 (156・157)、鉄釉天目茶碗 (158)、灰釉灯明皿 (159)、灰釉仏餉具 (160・161)、搦鉢 (162) 等の陶器、染付丸碗 (163)、染付丸皿 (164) 等の磁器、ロクロ調整土師器皿 (165～168) 等が出土している。陶磁器類は登窯第 6 小期から第 11 小期、18 世紀から 19 世紀に対比される (第 33 図)。

土坑009SK 土坑 009SK からは、染付端反碗 (169～171)、染付広東碗 (172・173)、染付仏餉具 (174) 等の磁器、染付箱形湯呑 (175・176)、染付小瓶 (177)、鉄釉灯明皿 (179～185)、搦鉢 (186)、鉄釉鍋 (187) 等の陶器、凝灰質泥岩製長方硯 (188) が出土している。陶磁器類は登窯第 10・11 小期、19 世紀中葉に対比される。灯明皿が多く組成するが、使用痕はほとんど認められない (第 34 図)。

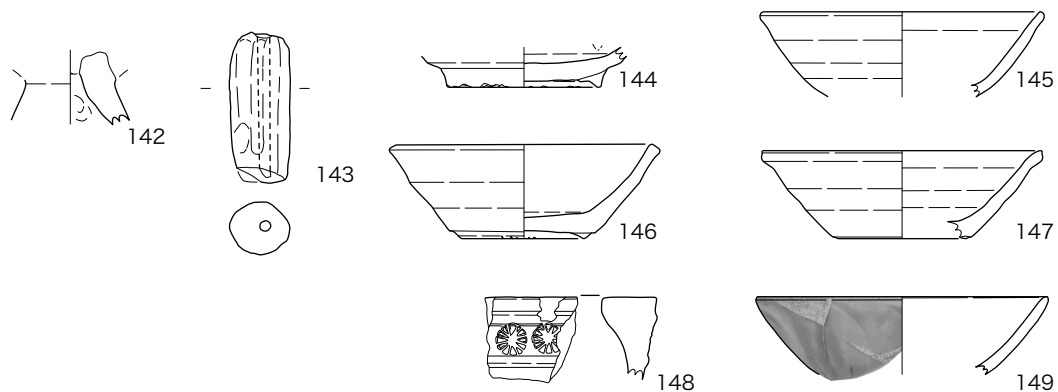
3 21A区

周濠状の落ち込み 玉石垣外側 (c) の周濠状の落ち込み 001SD から、東濃型丸石 3 号窯式の山茶碗 (192)、同脇之島窯式の小皿 (196)、尾張型第 6 型式の山茶碗 (193・194)、同第 12 型式の山茶碗 (195)、古瀬戸中期の四耳壺 (197) 等、13 世紀から 15 世紀の遺物が出土している。整地層 玉石垣間外側 (c)・(d) の整地層からは、尾張型第 3 型式の山茶碗 (198)、古代の平・丸瓦 (199・200) 等が出土している (第 35 図)。

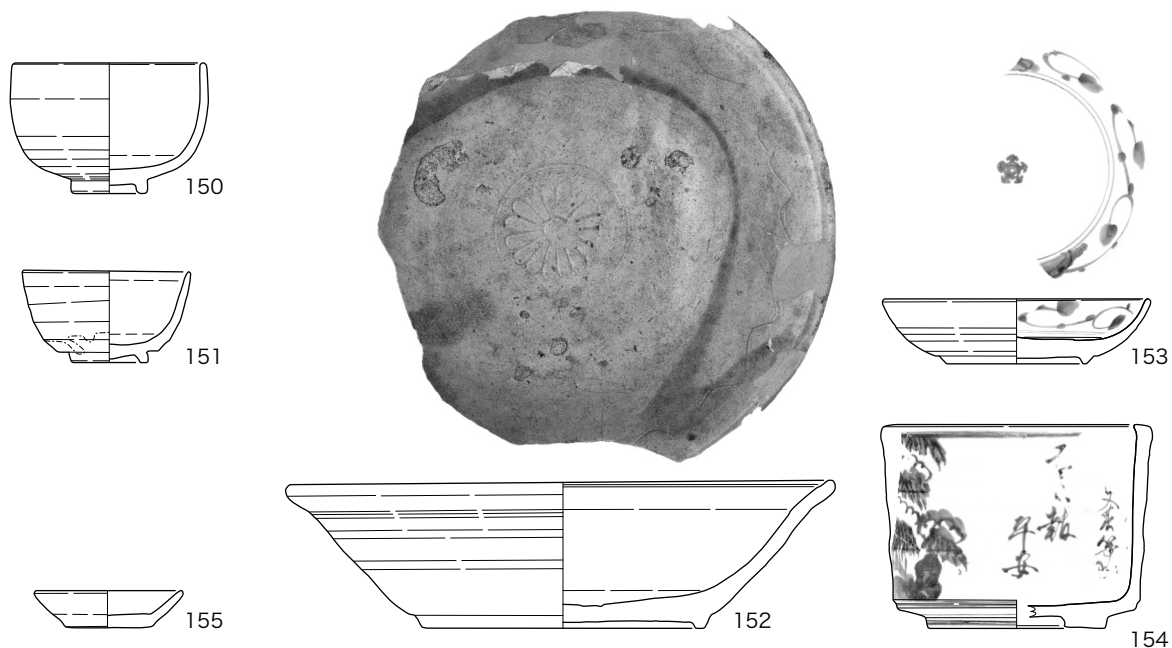
4 22A区

溝004SD 墳丘部分 (a) の溝 004SD からは、尾張型第 5 型式の山茶碗 (203)、ロクロ調整土師器皿 (204) に加えて、鉄釉徳利 (205)、鉄釉乗燭 (206)、鉄釉灯明皿 (207・208)、搦鉢 (209) 等、登窯第 4 小期から第 11 小期、17 世紀後葉から 19 世紀中葉の陶磁器類が出土している。溝003SD 玉石垣間 (b) の溝 003SD からは、非ロクロ調整土師器皿 (210) が出土している。整地層 玉石垣外側 (c) の整地層中から、大窯第 1 段階、15 世紀後葉の搦鉢 (211)、溝 002SD からは、登窯第 8 小期、18 世紀後葉の腰鎊茶碗 (213)、ロクロ調整土師器皿 (214)、ロク

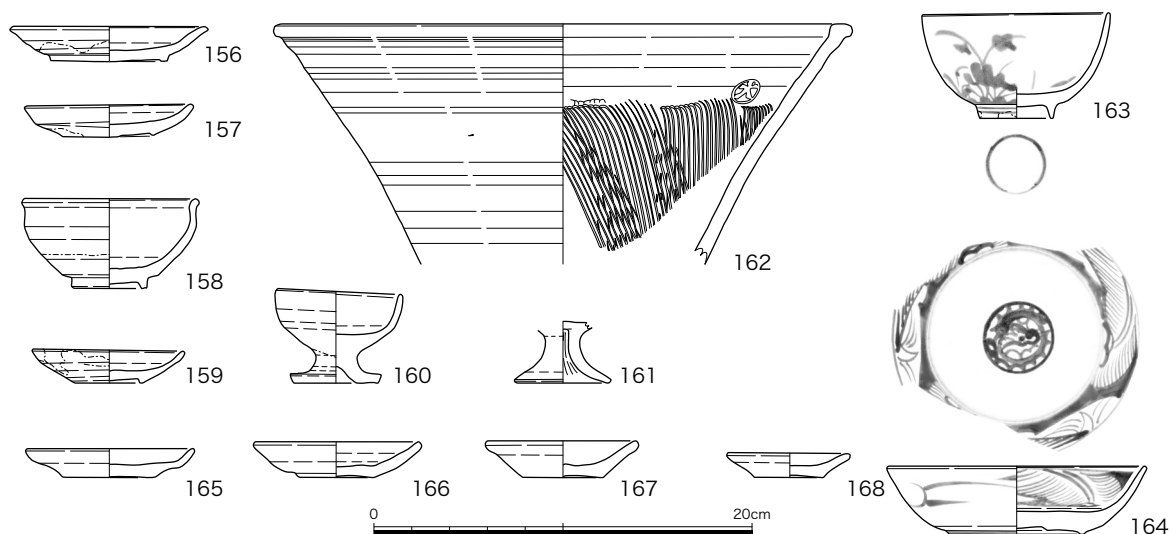
20区 周濠015SD 最下層 (142) 下層 (143) 上層 (144~148) 試掘調査 (149)



20区 周濠015SD 上面 (150~155)

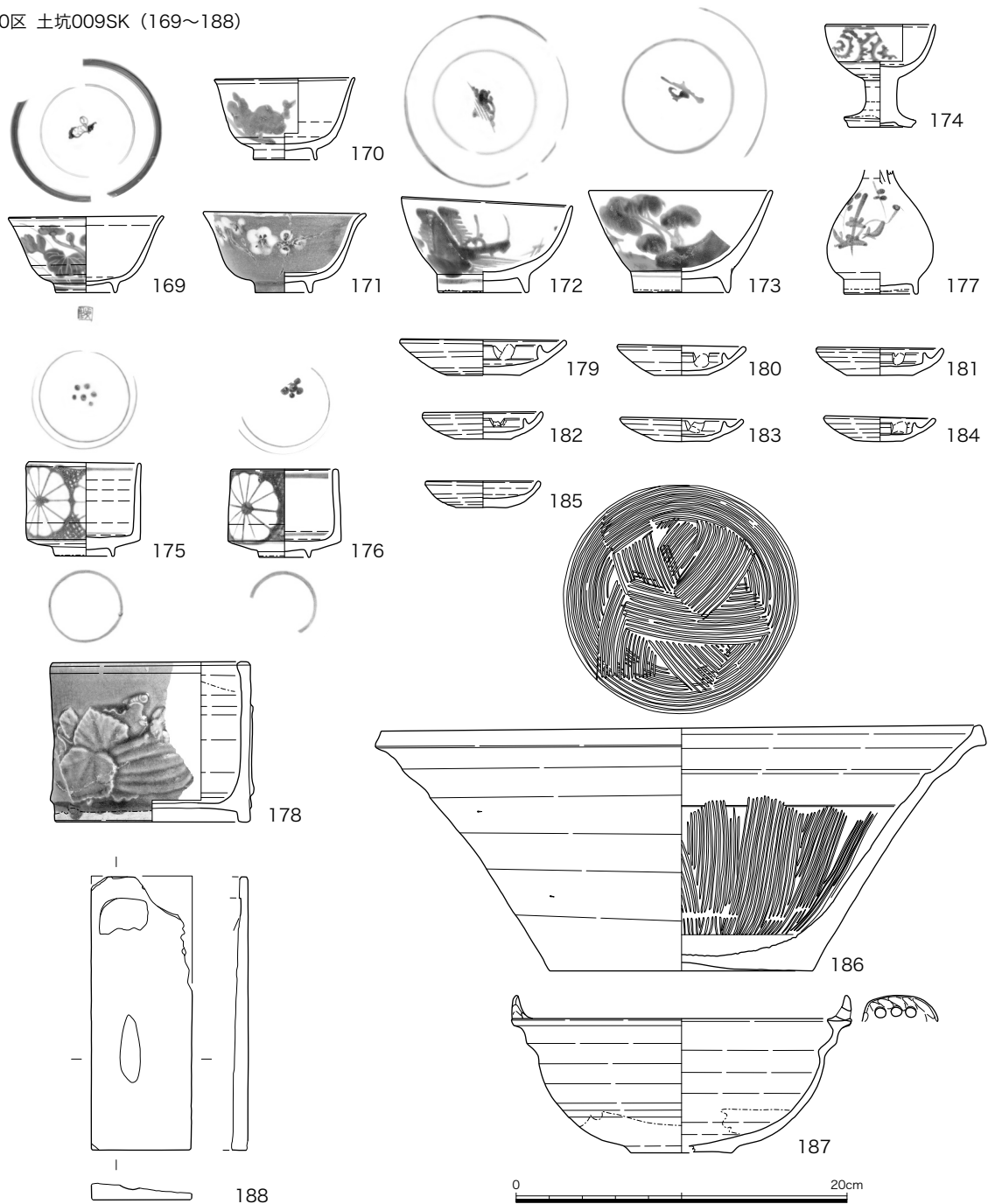


20区 試掘調査関係 (156~168)



第33図 20区出土土器・陶磁器実測図 (1:4)

20区 土坑009SK (169~188)



第34図 20区土坑009SK出土土器・陶磁器・石製品実測図 (1:4)

口調整土師器皿を転用した加工円盤 (215) 等が出土している (第 35 図)。

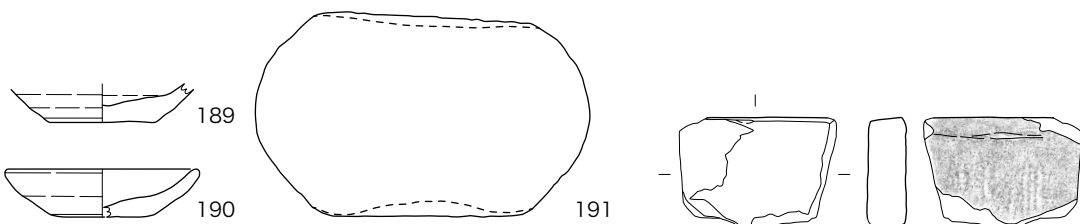
耐火煉瓦

22A 区客土中には品川白煉瓦製の耐火煉瓦 (216) が含まれていた。同社の称号に「品川」が用いられるのは明治 20 年 (1887) 以降であることから、19 世紀後葉以降の製品であることが判明する (第 35 図)。

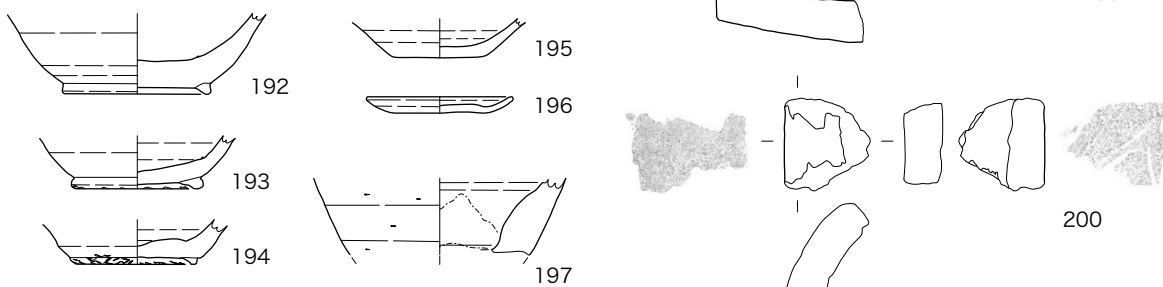
[参考文献]

藤澤良祐 2007「編年表」『愛知県史』別編 中世・近世 瀬戸系 愛知県

21A区 墳丘部分(a) 客土 (189~191)



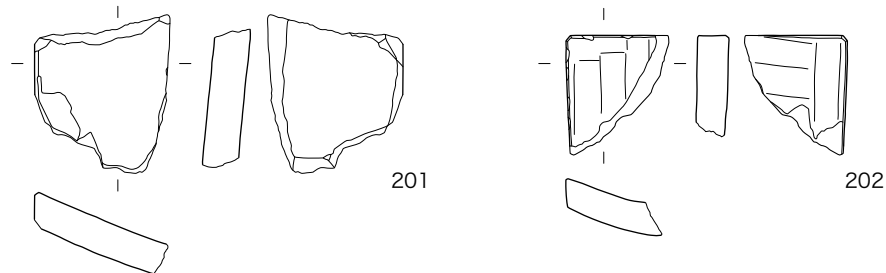
21A区 玉石垣外側(c) 周濠状の落ち込み001SD (192~197)



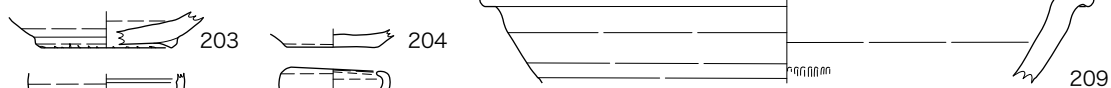
21A区 玉石垣外側(c・d) 整地層 (198~200)



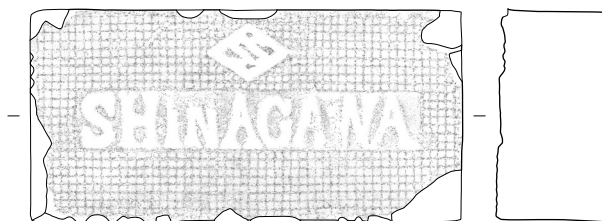
21B区 (201・201)



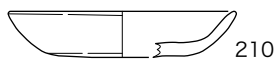
22A区 墳丘部分(a) 溝004SD (203~209)



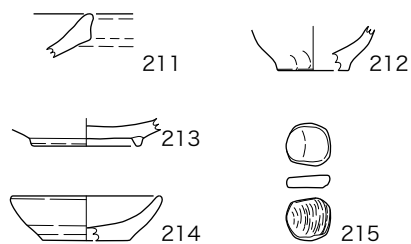
22A区 (216)



22A区 玉石垣間(b) 溝003SD(210)



22A区 玉石垣外側(c) 整地層(211) 溝002SD(212~215)



第35図 21A区・21B区・22A区出土土器・陶磁器・石製品実測図 (1:4)

第5章 自然科学分析

(1) 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ (伊藤 茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・小林克也)

1 はじめに

名古屋市熱田区の断夫山古墳から出土した試料について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

20区周濠015SD 試料は 20 区周濠 015SD から採取した炭化材 1 点 (試料 No.1 : PLD-43718)、22Ab 区溝 003SD 上層から出土した炭化材 1 点 (試料 No.2 : PLD-49800)、22Ac 区表土下層から出土した炭化種実 (イネ種子) 1 点 (試料 No.3 : PLD-49801) の計 3 点である。試料 No.1 は最終形成年輪は確認できなかった。試料 No.2 は最終形成年輪が残っていなかった。測定試料の情報、調製データは第 10 表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

3 結果

年代範囲 第 11 表に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、第 36 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代 ^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1 \sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.27%であることを示す。

第10表 測定資料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-43718	試料No.1 調査区：20 遺構：015SD 層位：上層	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-49800	試料No.2 調査区：22Ab 遺構：003SD 層位：上層	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-49801	試料No.3 調査区：22Ac 層位：表土下層	種類：炭化種実 (イネ種子 (穎果)) 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)

暦年較正

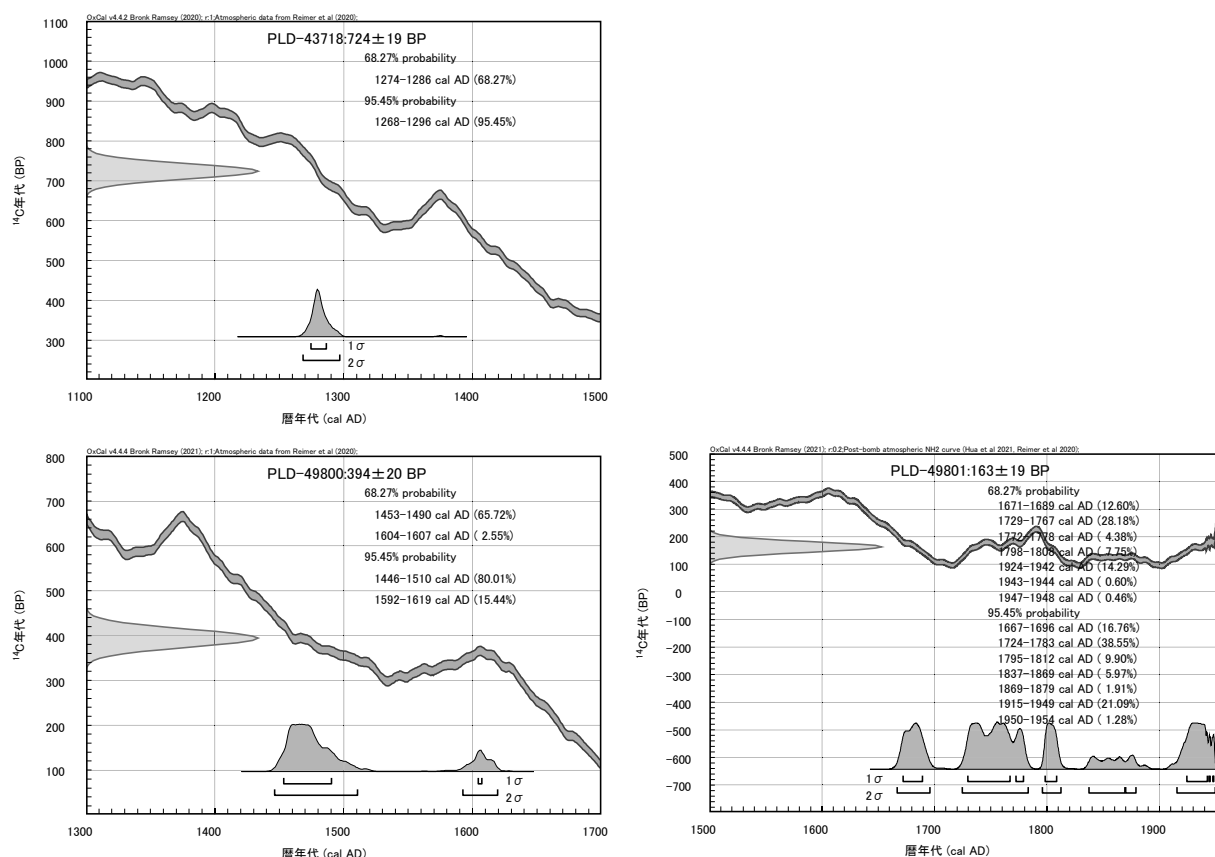
なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.4 (較正曲線データ: IntCal20、暦年較正結果が 1950 年以降にのびる試料については Post-bomb atmospheric NH2) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.27% 信

第11表 放射性炭素年代測定と暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-43718 試料No.1	-24.62 \pm 0.18	724 \pm 19	725 \pm 20	1274-1286 cal AD (68.27%)	1268-1296 cal AD (95.45%)
PLD-49800 試料No.2	-24.20 \pm 0.19	394 \pm 20	395 \pm 20	1453-1490 cal AD (65.72%) 1604-1607 cal AD (2.55%)	1446-1510 cal AD (80.01%) 1592-1619 cal AD (15.44%)
PLD-49801 試料No.3	-24.91 \pm 0.19	163 \pm 19	165 \pm 20	Post-bomb NH2 curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1671-1689 cal AD (12.60%) 1729-1767 cal AD (28.18%) 1772-1778 cal AD (4.38%) 1798-1808 cal AD (7.75%) 1924-1942 cal AD (14.29%) 1943-1944 cal AD (0.60%) 1947-1948 cal AD (0.46%)	Post-bomb NH2 curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1667-1696 cal AD (16.76%) 1724-1783 cal AD (38.55%) 1795-1812 cal AD (9.90%) 1837-1869 cal AD (5.97%) 1869-1879 cal AD (1.91%) 1915-1949 cal AD (21.09%) 1950-1954 cal AD (1.28%)



第36図 暦年較正結果

頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.45% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4 考察

2 σ 暦年代範囲

以下、 2σ 暦年代範囲 (確率 95.45%) に着目して結果を整理する。

鎌倉時代

周濠 015SD の試料 No.1 (PLD-43718) は 1268-1296 cal AD (95.45%) で、13 世紀後半～末の暦年代を示した。これは、鎌倉時代に相当する。なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる (古木効果)。今回の試料 No.1 は、最終形成年輪が残っていなかった。したがって、測定結果は古木効果の影響を受けていると考えられ、試料の木が実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代であると考えられる。測定の結果、鎌倉時代の暦年代を示した。試料 No.1 は、周溝内に再堆積した鎌倉時代の炭化材の可能性が考えられる。

室町時代～江戸時代前期

22Ab 区溝 003SD の試料 No.2 (PLD-49800) は、1446-1510 cal AD (80.01%) および 1592-1619 cal AD (15.44%) で、15 世紀中頃～16 世紀初頭、および 16 世紀末～17 世紀前半の暦年代を示した。これは、室町時代～江戸時代前期に相当する。なお、今回の試料には最終形成年輪が残っていなかった。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる (古木効果)。したがって、今回の測定結果は古木効果の影響を受けていると考えられ、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりもやや新しい年代であると考えられる。

江戸時代～昭和時代

22Ac 区表土下層の試料 No.3 (PLD-49801) は、1667-1696 cal AD (16.76%)、1724-1783 cal AD (38.55%)、1795-1812 cal AD (9.90%)、1837-1869 cal AD (5.97%)、1869-1879 cal AD (1.91%)、1915-1949 cal AD (21.09%)、1950-1954 cal AD (1.28%) で、17 世紀後半～20 世紀中頃の暦年代を示した。これは、江戸時代前期～昭和時代に相当する。試料は炭化種実であり、測定結果は結実年代を示す。

[参考文献]

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- Hua, Q., Turnbull, J., Santos, G., Rakowski, A., Ancapichún, S., De Pol-Holz, Hammer, S., Lehman, S., Levin, I., Miller, J., Palmer, J., Turney, C. (2021) Atmospheric Radiocarbon for the Period 1950-2019. *Radiocarbon*, 64(4), 723-745. doi:10.1017/RDC.2021.95. <https://doi.org/10.1017/RDC.2021.95> (cited 23 November 2021)
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

(2) 花粉分析

森 将志 (株式会社 パレオ・ラボ)

1 はじめに

名古屋市熱田区に所在する断夫山古墳において、古植生を検討するために、20区周濠から堆積物が採取された。以下では、試料について行った花粉分析の結果を示し、考察した。

2 試料と方法

分析試料は、周濠 O15SD の埋土から採取された堆積物 2 点 (上層、下層) である。これらの試料を用いて、次の手順で分析を実施した。

試料 (湿重量約 3 ~ 4g) を遠沈管にとり、10% 水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後、46% フッ化水素酸溶液を加え 1 時間放置する。水洗後、比重分離 (比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離) を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理 (無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 の割合の混酸を加え 20 分間湯煎) を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。両試料ともに十分な量の花粉化石が含まれていなかったため、プレパラート 1 枚の全面を検鏡するにとどめた。また、保存状態の良い花粉を選んで単体標本 (PLC.3316) を作製し、写真を載せた。

3 結果

検鏡の結果、2 試料には十分な量の花粉化石が含まれていなかった。2 試料から検出された花粉・孢子の分類群数は、樹木花粉 5、草本花粉 4、形態分類のシダ植物孢子 2 の、総計 11 である。これらの花粉・孢子の一覧表を第 12 表に示す。なお、十分な量の花粉化石が得られていないため、分布図は示していない。

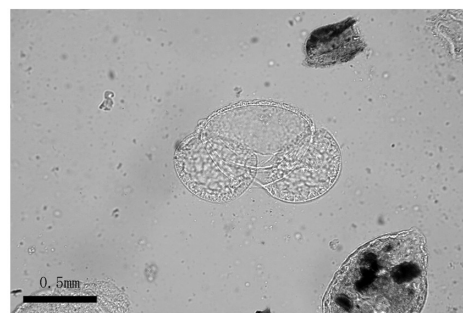
4 考察

一般的に花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境下で堆積すると紫外線や土壌バクテリアなどによって分解され消失してしまう。したがって、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では花粉化石が残りにくい。周濠は乾燥的環境にさらされていた可能性があり、そのため花粉化石の残存状況が良好ではなかったと考えられる。辛うじて得られた花粉化石群集では、埋土上においてマツ属複維管束亜属やツガ属の産出が目立つため、

古墳周辺にはマツ属複維管束亜属やツガ属が分布していた可能性がある。

第12表 産出花粉孢子一覧表

学名	和名	上層	下層
樹木			
<i>Tsuga</i>	ツガ属	7	1
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	15	1
<i>Pinus</i> (unknown)	マツ属 (不明)	22	-
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	1	-
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	2	-
草本			
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	サナエタデ節-ウナギツカミ節	2	3
<i>Haloragis</i>	アリノトウグサ属	-	2
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	-	1
<i>Tubuliflorae</i>	キク亜科	-	1
シダ植物			
monolete type spore	単条溝孢子	1	-
trilete type spore	三条溝孢子	1	1
Arboreal pollen			
Nonarboreal pollen	樹木花粉	47	2
Spores	草本花粉	2	7
Total Pollen & Spores	シダ植物孢子	2	1
	花粉・孢子総数	51	10
unknown	不明	6	-



産出したマツ属複維管束亜属 (PLC-3316)

(3) 断夫山古墳の周囲で観察される地層と火山灰分析

鬼頭 剛 (愛知県埋蔵文化財センター)・古澤 明 (株式会社 古澤地質)

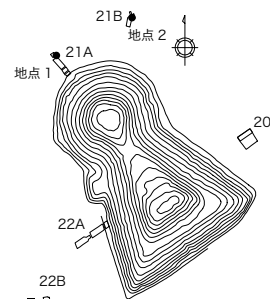
1 はじめに

2021年度に実施された調査において名古屋市熱田区断夫山古墳の周囲の地下層序を観察する機会を得た。その地層観察と火山灰分析の結果を報告する。

2 試料および分析方法

試料

21A区および21B区の発掘調査において、断夫山古墳に関わる地層の確認のため設定されたトレンチにて、地層の確認と火山灰分析用の試料を採取した(第37～39図)。地層の観察にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。層序断面からは火山灰分析用の試料を採取した。



第37図 分析用試料採取地点

分析方法

火山灰分析の試料は洗浄・篩別し、極細粒砂サイズ(1/8～1/16)に粒度調整し、この粒度調整試料中の火山ガラスおよび自形で新鮮な角閃石や斜方輝石の含有率を測定した。粒子組成の把握には通常の200粒子の観察とともに、微量含まれる特徴的な火山灰起源鉱物を識別するため、2000粒子中の火山灰起源鉱物含有量も把握した。屈折率の測定には液浸の温度を直接測定して屈折率を求める温度変化型測定装置 MAIOT (古澤, 1995) を使用した。測定精度は火山ガラスで ± 0.0001 、斜方輝石および角閃石で ± 0.0002 程度である。分析は古澤が行った。



地点1 (21A区) の地層断面写真



地点2 (21B区) の地層断面写真

3 分析結果

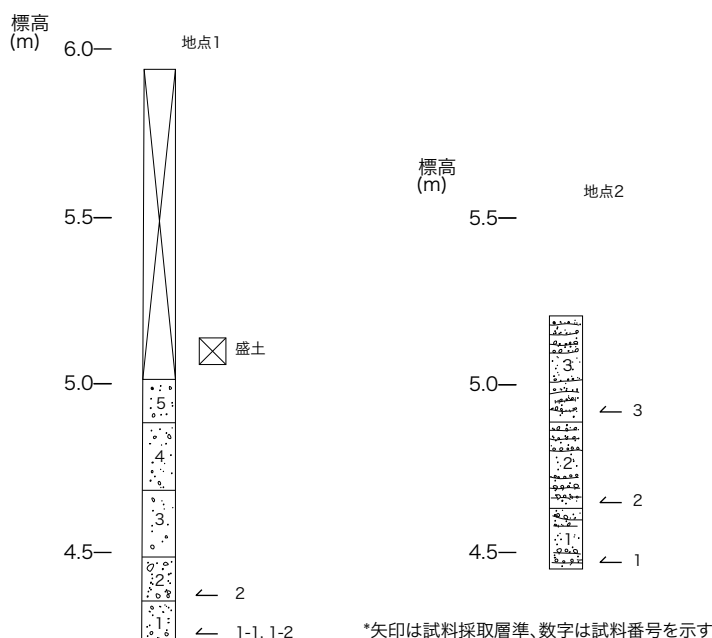
21A区で1地点、21B区で1地点の計2地点のトレンチで地層を観察した(第37図)。トレンチの地層調査区ごとに述べる。

21A区は断夫山古墳の後円部北側において、古墳の造成に関わる地層の確認のため掘削されたトレンチのうち北側のトレンチにおける観察である(第37・38図)。下位層より、標高4.24m～4.36mは明黄褐色(10YR6/6)を呈する軽石混じりの中粒砂～粗粒砂層からなる。砂層全体は塊状で堆積構造はみられない。直径5mmの軽石の断片を地層中に無秩序に含む。本層の下部、標高4.26mの層準で科学分析用試料を採取し、軽石を多く含む部分で試料1を、軽石片よりも砂粒子の含有量が多い部分で試料2を採取した。標高4.36m～4.49mはにぶい黄褐色(10YR5/4)の粗粒砂層である。砂層全体は塊状・均質で堆積構造はみられない。砂粒子の淘汰は不良である。地層中には軽石と礫が癒着した塊状

第13表 火山灰分析結果

試料名	火山ガラスの形態別含有量 (/3000)			重鉱物の含有量 (/3000)			β石英 (/3000)	テフラ名
	Bw	Pm	O	Opx	Gho	Cum		
地点1 (21A区) No.1	1	0	2.8	201	6	0	0	御岳奈川テフラ混在
地点1 (21A区) No.2	0	0	2	188	3	0	0	御岳奈川テフラ混在
地点1 (21A区) No.3	0	0	0.7	193	10	0	0	御岳奈川テフラ混在
地点2 (21B区) No.1	0	0	0.3	101	7	0	0	
地点2 (21B区) No.2	0.1	0	0.2	3	4	0	0	
地点2 (21B区) No.3	0.3	0	0.2	2	5	0	0	御岳奈川テフラ混在

Bw:バブルウォールタイプ Opz:斜方輝石
Pm:パミスタイプ Gho:緑色普通角閃石



第38図 地点1 (21A区) の柱状図

第39図 地点2 (21B区) の柱状図

のブロックを含む。ブロックの直径 30mm 程度であり、含まれる礫には直径 5mm の円礫が多い。考古学的には本層を含めて、それよりも上位層が古墳に関する時代と認識されている。本層の下部、標高 4.38m で試料 3 を採取した。標高 4.49m ～ 4.69m は暗褐色を呈する小礫から中礫の混じる粘土層からなる。地層全体は塊状で、堆積構造はみられない。暗褐色の色調の差異から上位層、あるいは下位層と区別される。標高 4.69m ～ 4.89m は明褐色で小礫から中礫の混じる粘土層からなる。地層全体は塊状で堆積構造はみられない。本層も下位層と同様に、色調の差異から上位層や下位層と区別される。標高 4.89m ～ 5.02m は暗褐色で小礫から中礫の混じる粘土層からなる。地層全体は塊状で堆積構造はみられない。本層と下位層との層理面には凹凸が著しい。標高 5.02m ～ 5.95m は現代の人口的な盛土となる。本層の頂部が地表 (標高 5.95m) となる。

21B区

試料1

21B 区は断夫山古墳の北側を東西に通る道を挟んで北東に設定されたトレンチである (第 37・39 図)。下位層より、標高 4.45m ～ 4.63m はにぶい黄橙色 (10YR7/4) の中粒砂～粗粒砂層である。砂層には堆積構造がよく保存されており、平行葉理が明瞭である。砂層中には平均で直径 5mm の亜角礫が含まれており、中には直径 20mm の亜角礫もみられた。砂粒子の淘汰はやや良い。本層の下部で試料 1 (標高 4.47m) を採取した。標高

試料2

4.63m ～ 4.89m はにぶい黄橙色 (10YR7/4) の中礫層からなる。基質として細粒砂～中粒砂により充填される。礫は最大径 20mm の礫を含む亜角礫～亜円礫から構成される。本礫層には堆積構造が保存されており、平行葉理が認められる。本層の下部で試料 2 (標高

試料3

4.65m) を採取した。標高 4.89m ～ 5.20m はにぶい黄橙色 (10YR7/4) の中礫層からなる。基質は細粒砂～中粒砂により構成される。直径 20mm の礫が多い。亜角礫から亜円礫よりなる。本層も堆積構造が保存されており、平行葉理が認められる。本層の下部で試料 3 (標高 4.92m) を採取した。

火山灰分析

21A 区で 3 試料、21B 区で 3 試料の計 6 試料を採取した (第 38・39 図)。21A 区のトレンチ断面では地層が 6 層に分けられ、それらのうち、最下位層である標高 4.24m ～ 4.36m の明黄褐色を呈する軽石混じりの中粒砂～粗粒砂層からなる地層において、砂成分に比べて軽石の量が多い層準で試料 1-1 を、軽石の量に比べて砂成分が多い層準で試料 1-2 を採取した。軽石混じりの中粒砂～粗粒砂層を覆って標高 4.36m ～ 4.49m のにぶい黄褐色の粗粒砂層下部の層準で試料 2 を採取した。計 3 試料の火山灰分析を実施し、すべての試料には微量の火山ガラスが含まれ、多くの直方輝石も含まれる。火山ガラスの主成分元素組成から御岳火山起源の御岳奈川 (On-Ng) 火山灰の特徴 (株式会社古澤地質社内資料) と一致し、21A 区の 3 試料には御岳奈川火山灰起源の火山ガラスが混在していることがわかった (第 13 表)。

21B 区のトレンチでは地層が 3 層に分けられ、それぞれの地層の下部から計 3 試料を採取した。3 試料からは極微量の火山ガラスが含まれる。また、標高 4.45m ～ 4.63m のにぶい黄橙色の中粒砂～粗粒砂層から採取した試料 1 には多くの直方輝石が含まれる。標高 4.89m ～ 5.20m のにぶい黄橙色の中礫層から採取した試料 3 からは、火山ガラスの主成分元素である K_2O の含有率が 5wt.% 程度と非常に高い値を示すものが含まれた。また、御岳火山起源の御岳奈川 (On-Ng) 火山灰の特徴 (株式会社古澤地質社内資料) と一致する火山ガラスも含まれる。このことから、標高 4.89m ～ 5.20m のにぶい黄褐色の

中礫層から採取した試料3には御岳奈川火山灰起源の火山ガラスが混在していることがわかった(第13表)。

4 考察—地下の熱田層と断夫山古墳—

名古屋市地下地質は全体として砂礫層や泥層との互層からなり、地質時代の古い順に下位層より東海層群(第三紀)、海部・弥富累層(中部更新統)、熱田層(上部更新統)、第一礫層(上部更新統)、濃尾層(最上部更新統)、南陽層(完新統)から構成される。これらの地層のうち断夫山古墳は熱田層からなる熱田台地に立地している。熱田層について、桑原(1975)は熱田層を最下部層・下部層・上部層に区分した。熱田台地には下部層と上部層が分布し、下部層は海成粘土層、上部層は主に砂層からなり、シルト層・粘土層やレンズ状の礫層を挟む。上部層は熱田台地と守山台地に露出する。

さて、断夫山古墳の2021年度の調査では、21A区と21B区の2地点に設定されたトレンチにおいて地層の観察を行なった(地点1・地点2)。21B区(地点2)では堆積構造として平行葉理が良好に保存された砂層や礫層が確認され、層序は全体に上方粗粒化傾向を示し自然の状態に堆積したことがわかり、人工的に改変された地層ではないことがわかる。21A区(地点1)では、下位層に軽石の混じる砂層がみられた。この砂層の上を軽石や礫の混在する粗粒砂層が覆う。地点1と地点2から採取した堆積物試料の火山灰分析では「御岳奈川火山灰(On-Ng)」が検出された。御岳火山灰は岐阜県と長野県との県境にある木曾御岳火山から噴出した降下軽石層を主体とするもので、約5万年前の火山灰層である(中村ほか, 1992)。御岳奈川火山灰が検出されたことから、断夫山古墳の基盤層は名古屋市南部の地下を構成する熱田層の上部層であることがわかった。

21A区(地点1)においては、標高4.24m～4.36mにみられる下位層の砂層を覆って、標高4.36m～4.49mに軽石や礫の混在する粗粒砂層が確認された。本層には堆積構造が認められず塊状であるため堆積環境が推定できなかったが、下位層との色調の差や砂層を軽微に削剥している様子、軽石や礫が混在するにも関わらず水の流れて運ばれたことを示す堆積構造が認められないことから、地層が乱されている可能性が示唆された。考古学的には、標高4.24m～4.36mの下位層の砂層を覆い標高4.36m～4.49mの軽石や礫の混在した粗粒砂層を含めた上位層が、断夫山古墳に関わる地層であるとされる。土壌化層や植物の繁茂を示唆する黒色粘土層を地層の間に挟まないことから、熱田層を直接改変したものと推定できる。

[参考文献]

- 古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定・形態分類とその統計的な解析, 地質学雑誌, 101, 123-133.
 桑原 徹, 1975, 濃尾傾動盆地の発生と地下の第四系, 愛知県地盤沈下研究会報告書, 愛知県, 109-182.
 中村俊夫・藤井登美夫・鹿野勘次・木曾谷第四紀巡検会, 1992, 岐阜県八百津町の木曾川泥流堆積物から採取された埋没樹木の加速器¹⁴C年代, 第四紀研究, 31, 1.

市の地下地質

熱田層

断夫山古墳

21B区

火山灰分析

熱田層の上部層

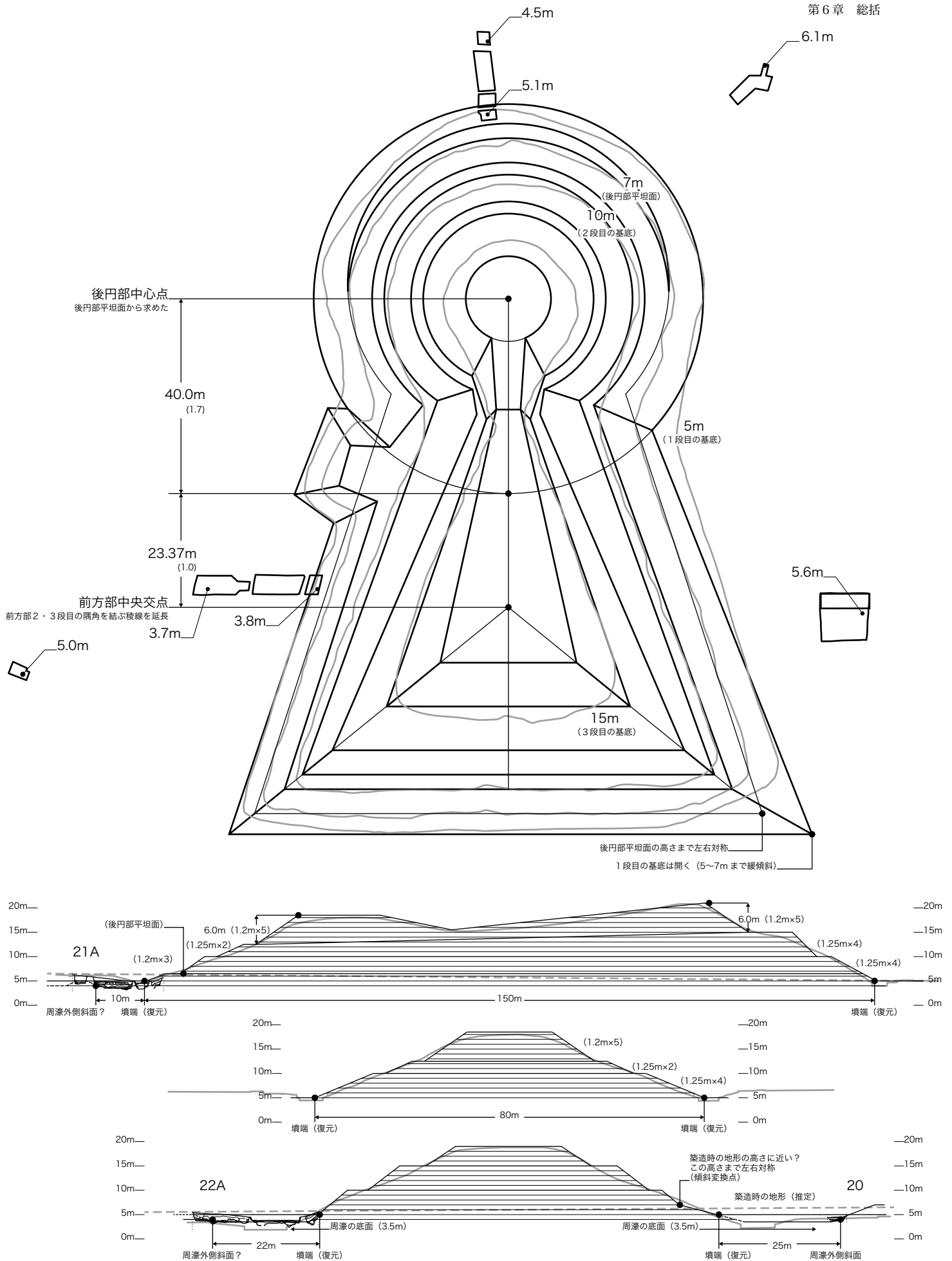
21A区

古墳に関わる地層

第6章 総括

1 墳丘の復元と墳丘構造

従来の復元案	断夫山古墳の墳丘については、赤塚次郎による復元が示されている（東海埋蔵文化財研究会 1989）。名古屋市教育委員会による測量調査、今回の発掘調査の成果を踏まえ、改めて現状の復元を精査する（第 40 図）。
墳端	墳端については標高 5 m 付近が根拠とされるが、赤塚も再検討の余地を残すとしている。今回の発掘調査においても、墳端付近は後世の改変が予想以上に及んでいることが明らかになった。そこで参考までに、新納泉による前方後円墳の設計原理（新納 2018）を援用して墳丘復元案を示す。新納による設計原理においては、後円部中心点から前方部中央交点までの距離が後円部半径の 1.5 倍に設計されたことが示されている。
前方後円墳の設計原理	
後円部中心点	断夫山古墳の墳丘においても、以下の作業を図上で試行した。最初に、後円部の墳頂平坦面から後円部中心点を求める。次に、前方部前方から 2 段目の平坦面を標高 15m 付近、やや不明瞭ながら後円部北側から 1 段目の平坦面を標高 10m 付近に想定する。そして、
前方部中央交点	前方部 3 段目と 2 段目の隅角を復元し、隅角を結ぶ稜線の延長が主軸と交わる前方部中央交点を求めた。
後円部径	後円部中心点から前方部中央交点までの長さ 63.3m が後円部半径の 1.5 倍とすると、後円部の半径は 42.2m で、後円部径を 80m とする現状の計測値、復元とも大きくは齟齬しない（後円部の半径を 40.0 m とした場合、後円部の半径と後円部中心点から前方部中央交点までの長さの比は 1 : 1.58 である）。それを踏まえ、後円部径は現状の計測値を踏襲し、墳丘の復元に反映した。
後円部 2 段目	前方部前方から想定した 2 段目の平坦面と同じ高さ付近に後円部の 2 段目の平坦面を求めることは難しく、後円部墳頂からは急勾配の斜面が標高 12.5m 付近まで続く。これにより、後円部は 6.0m の比高を生じている。この高さは前方部の 2 段目の平坦面から墳頂までの高さにはほぼ一致する。
前方部 2 段目	
前方部の前端	前方部の前端を標高 5 m 付近とする現状の復元を踏襲することは躊躇されるが、2・3 段目斜面の隅角を結ぶ稜線を前端まで延長し、全長 150m とする現状の復元、計測値を概ね踏襲した。左右対称に復元した場合、東に標高が高い地形とも関係して、前方部東側 1 段目斜面の墳端は標高 6 m 付近に相当し、前方部幅は 115m の計測値が示される。前方部東側 1 段目斜面の墳端を標高 5 m 付近に想定し、前方部東側がやや広がる墳形を想定すれば、前方部幅を 120m とする現状の計測値、復元にほぼ一致する。
前方部東側 1 段目	
後円部の平坦面	赤塚による復元では、西に 0.5m 程度傾斜する地形との関係も考慮して、標高 6.0～7.0m に後円部から東側斜面に続く平坦面の存在が指摘されている。発掘調査において確認した基盤層の最高点は地形が高い東側（20 区）が標高 5.6m、北側が標高 6.1m で、（削剥を考慮すれば）平坦面の高さとも近い。つまり、この平坦面は築造時（作業面）の地表面、高さ調整に関連する可能性も想定される。
傾斜する地形	地形が低い南西側（22B 区）の基盤層の最高点は標高 5.0m で、古墳は南北に 1.0m、東西に 0.5m 程度、傾斜する地形に築造されている。これによれば、墳丘の盛土は少なく



第40図 墳丘の設計原理と復元案 (1:1,000)

基盤層の削り出し とも地形が高い部分で標高6m以上、低い部分で標高5m以上の高さに存在し、その下位の墳丘は基盤層の削り出しによることになる。

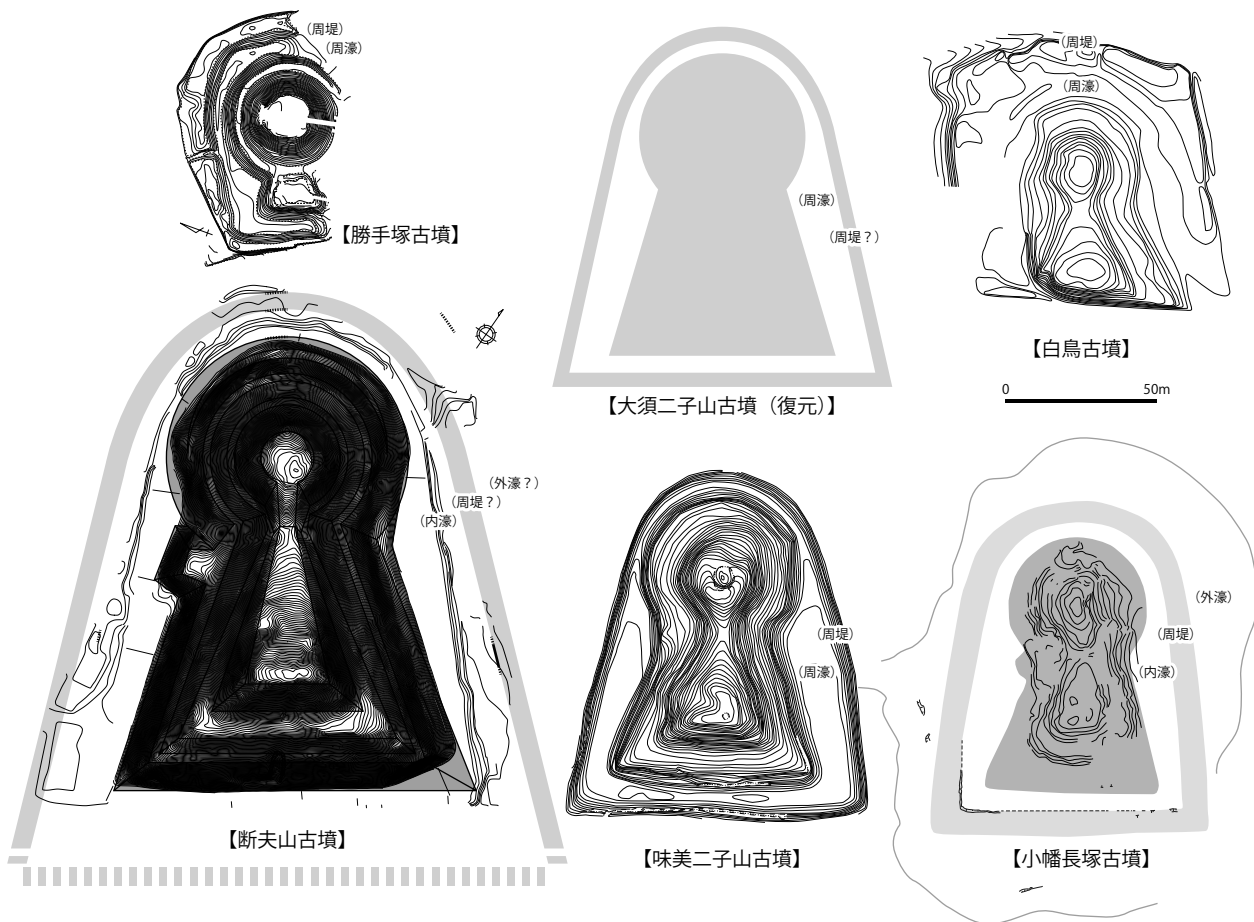
2 周濠・周堤の復元

周濠・周堤の諸例 断夫山古墳と前後する時期の勝手塚古墳(全長54mの帆立貝式古墳)、小幡長塚古墳(全長81mの前方後円墳)には周堤と二重周濠(周堤外の周濠状の落ち込み)が確認され、味美二子山古墳(全長94mの前方後円墳)、白鳥古墳にもその存在が想定される(第41図)。

周濠・周堤の復元 深谷淳はこれらを踏まえつつ、明治17年作成の地籍図上の地割、昭和21年撮影の空中写真から断夫山古墳に盾形の周濠・周堤の存在を指摘し、復元案を提示した(深谷2009)。復元は塚(墳丘)と墳丘西側の道の間の幅が広い区画(地目は畑)を周濠、道に沿った細長い区画(地目は畑)、前方部前面側の概ね平行する区画を周堤の痕跡として捉えたものである。地籍図上に周堤の手がかりがない墳丘東側については、墳丘西側で復元した周堤を墳丘主軸を軸に反転している。ただ、周堤外の周濠については、小幡長塚古墳の調査の状況等を踏まえると、全周しない可能性もある。

周堤外の周濠

今城塚古墳 断夫山古墳が盾形の二重周濠(内濠・外濠)、二重周堤(内堤・外堤)を具備する同時期の大王墓である今城塚古墳(全長181mの前方後円墳)に次ぐ規模であることも参照する必要もある(第42図)。20区周濠015SD下層から出土した一定量の埴輪と円礫は、



第41図 周濠・周堤がある前方後円墳(帆立貝式古墳)の諸例(1:2,000)

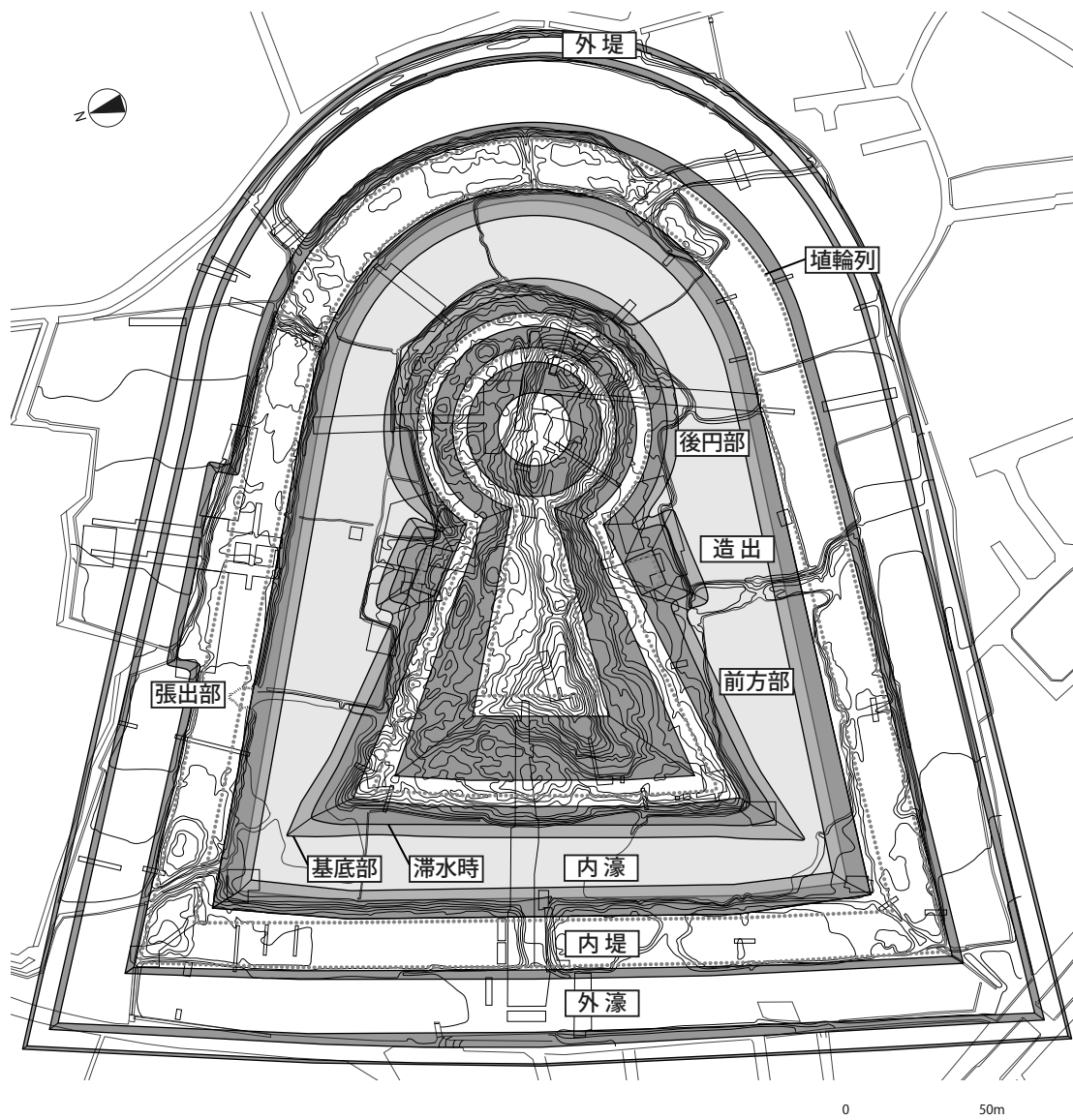
今城塚古墳における内堤上への埴輪の樹立、内濠斜面の護岸石列を想起させることも付記しておきたい。

今回の発掘調査による周濠形状の復元に関係するほぼ確実な情報としては、20区の外側斜面のみである。底面の高さは標高3.5mで、緩やかに立ち上がるが、さらにその外側の急傾斜の斜面を周濠、周堤に関連させて説明することは難しい。いずれにしても、削剥の程度も明確ではないので、周濠の外縁を緩やかに立ち上がった斜面の上端から、急傾斜の斜面までの間に想定することが穏当であろう。仮にこの墳丘復元による埴輪付近からの周濠幅は25m程度である。

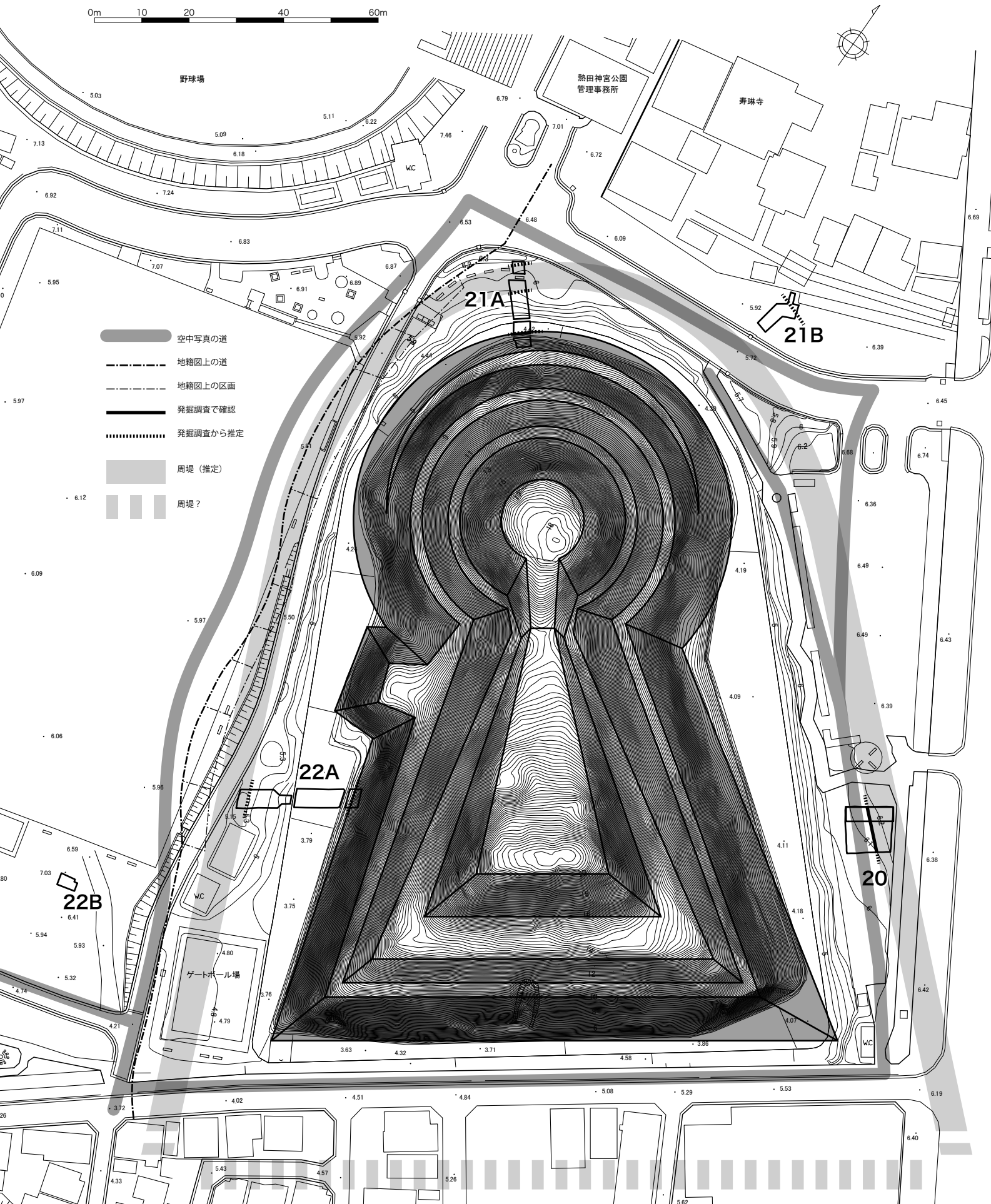
後円部北側で確認した基盤層の起伏を周濠、周堤の痕跡とした場合、当初の想定通り、周濠幅は10m程度とかなり狭い。後円部背面の幅の狭い周濠は味美二子山古墳等にも類似し、尾張の大型前方後円墳の特徴とも指摘されている（深谷 2015）。

前方部東側

後円部北側



第42図 今城塚古墳の墳丘復元 (1:2000)



第44図 墳丘・周濠・周堤復元案2 (1:1,000)

- 前方部西側 前方部西側で仮に想定した墳端と、周濠の内外を反映している可能性がある高低差からは、22m程度の周濠幅が求められる。これによると、周濠幅は西側に比べて東側がやや広い。
- 復元案1 20区で確認した周濠外側斜面とそれと接する位置に周堤を想定した場合、当初の想定より周濠幅は広く、方向もやや前方部に向かって外側に開くが、左右対称に周濠・周堤を復元しても、地籍図や空中写真から想定される周濠・周堤の位置と大きく齟齬しない。22A区玉石垣外側の高低差は周濠外側の傾斜に関連する可能性が想定され、周堤はそのさらに西側に想定されることになる。この復元を復元案1とする（第43図）。
- 復元案2 22A区玉石垣外側の高低差が周濠内外を反映している可能性があることを根拠とした場合、西側の周濠幅は西側より3m程度狭い。この東西の周濠幅の差は、墳丘復元において前方部東側がやや広がることが想定されたことに関連する可能性がある。これらの根拠、想定に依拠し、復元される盾形周濠の主軸を墳丘主軸から東西周濠幅の差で東に寄せた復元を示す。この復元を復元案2とする（第44図）。
- 外濠 21B区において検出した古墳に向かって傾斜する緩斜面が外濠の外側斜面である可能性も想定されるが、検出した範囲はごくわずかで、外濠の存否を確実にするには至らない。先の周濠（内濠）と周堤の復元、22B区の状況をも踏まえると、外濠が存在した場合、その幅は15m程度と想定される。確認した底面の高さは標高5.1mで墳端の高さとも近いことを勘案すると、古墳の周囲を広く鋤取りし、平坦面と墳丘盛土を確保しようとした結果、痕跡とも考えられる。

3 葺石と埴輪

- 葺石 今回の発掘調査で葺石は検出されなかった。後円部と前方部の墳端付近においては転落石と思われるような石材もほとんど認められない。墳端付近が葺石、転落石までを含めて大きく損なわれた可能性もあるが、22A区等で検出された後世の遺構に一定量の埴輪が混入するのに対して、葺石と思われるような石材はほとんど認められなかったことから、付近における葺石の施工を想定することは難しい。
- 20区周濠の円礫 20区周濠015SD下層においては、やや散漫ながらも埴輪に混じって若干の円礫が出土した。周濠外側からの流入とすれば、周堤上への埴輪の樹立、礫を使用した周濠の護岸等も想定される。
- 埴輪構成、配置 出土した円筒・朝顔形埴輪はほぼ尾張型（円筒）埴輪（赤塚1991）で占められるが、形状の把握が可能な個体は出土していない。埴輪構成、配置の復元にかかる情報も乏しいが、円筒埴輪は過去に採集された8突帯9段を最大として、3突帯4段以上の大型円筒埴輪が多く、2突帯3段の小型円筒埴輪も含まれる（形象埴輪の円筒部分の可能性もある）。21A区は出土量に比して、赤彩した埴輪が多く含まれていた。21B区も埴輪の出土はごく少ないが、2突帯3段の最小規格の円筒埴輪に限られていた。形象埴輪は墳丘西側、造り出し南側の22A区でごくわずかに出土したが、付近における形象埴輪群の配置を想定することは困難な状況である。明確な器種も蓋、家に限られる。
- 後期古墳の葺石 尾張の後期大型前方後円墳については、発掘調査の事例は少ないものの、明確な葺石は確認されていない。先行する中期後葉の白山神社古墳（全長84m）は上段のみの施工で、一定規模の発掘調査が実施された中期後葉の池下古墳（全長32m）、後期中葉から後葉の小幡茶白山古墳（全長63m）についても葺石は検出されていない。後期前葉の帆立貝式古

墳の勝手塚古墳には葺石が検出されている。時期、規模、墳形による葺石の施工状況は今後の検討課題である。

円筒・朝顔形埴輪については、単純な比較は難しいが、須恵質が多く、土師質は少ない。須恵質は白鳥古墳より多い印象で、味美二子山古墳と同じ、またはやや少ない。形象埴輪については、さらに比較が難しいものの、味美二子山古墳と比較して明らかに少ない。古墳築造の時期（前後関係）、埴輪の需給関係についても今後の検討課題である。

埴輪の比較

4 装飾須恵器

22A 区の墳丘部分 (a) から脚付連結須恵器が出土した。同様の装飾須恵器は尾張を中心として、周辺の伊勢、美濃、遠江で出土している（第 45 図、第 14 表）。土坑出土の北中寺遺跡（19）以外は古墳からの出土で、埋葬施設、方墳や円墳の墳丘周辺以外は造り出しとその付近における出土が多い。

脚付連結須恵器

古墳、造り出し

断夫山古墳から出土した個体は法量からすると連結壺ではなく、連結壺または連結杯で、受部の透窓からすると、連結壺の可能性が高い。脚部の長さは不明であるが、文様帯区画は狭く長脚を想定することが難しい点は古相、文様帯区画を三段以上配する点は鎌磨 5 号墳（10）、外山 3 号墳（11）、豊田大塚古墳（12～14・27）等の諸例から新相の位置を示す（長脚ではなく、文様帯区画を三段以上配する個体としては、類例がない）。この型式変化は、松ヶ洞 8 号墳（1）、茶白山 1 号墳（4～6）、二又 1 号墳（17・18）、豊田大塚古墳に共伴する壺の型式変化からも支持される。古相と新相の様相が混在する（最新相ではない）ことからすると、断夫山古墳の脚付連結須恵器の帰属時期は東山 10 号窯式期から東山 61 号窯式期（城ヶ谷 2015）と判断される。

脚付連結壺

型式変化

時期

付近で出土した壺類は法量、文様等から脚付連結壺の壺部分として違和感がない（別個体の可能性が高い）。第 45 図中には味美二子山古墳、羽根古墳を参考に部位を推定し、器形の想定復元を示した（22）。過去に田端勉によって採集された須恵器（森・尾野 2003）についても、筒形器台とされた破片は脚付連結須恵器とも考えられる。同時に採集された複数個体の壺類の破片も脚付連結須恵器の壺部分、器台とされた破片も脚付連結須恵器の脚部の可能性がある（23）。

壺類の出土

想定復元

昭和初期、大場磐雄は造り出しで多数の須恵器「杯」、「子持高杯」の破片を採取したとされ（大場 1930）、これらは脚付連結須恵器の可能性も指摘されている（須恵器の所在は不明）。「子持高杯」が脚付連結須恵器とすれば、造り出し付近で脚付連結須恵器を多数使用した儀礼が実施されたことも想定される。この想定は、白鳥古墳が埋葬施設に脚付連結壺（26）含む多数の装飾須恵器を副葬していたことを含めて、それが用いられた古墳の性格、儀礼の内容を検討する必要性を示す。

「子持高杯」

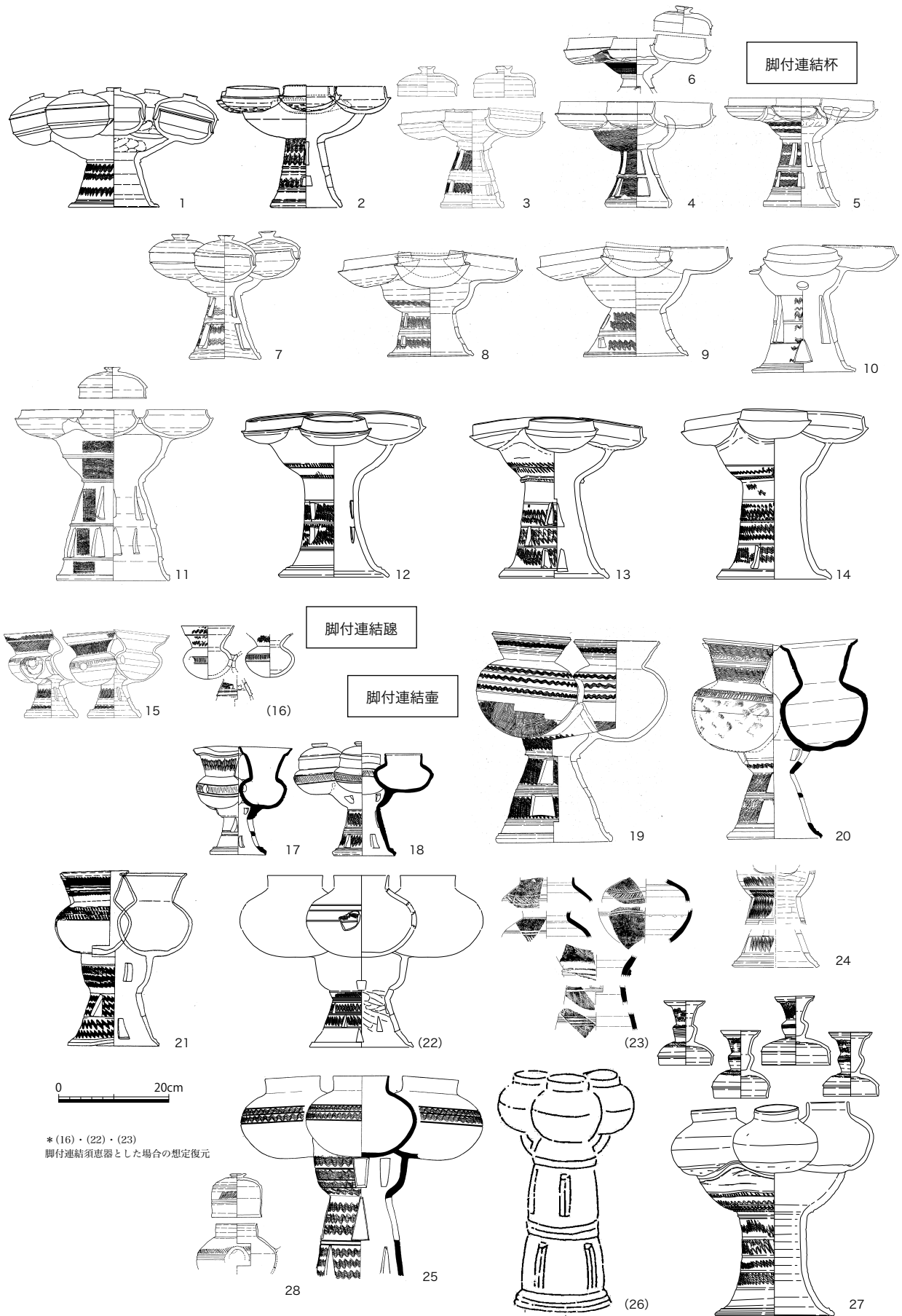
白鳥古墳

5 築造後の史跡 断夫山古墳

今回の発掘調査では、古墳の裾や周囲は後世の宅地、耕作地、公園整備等による改変が著しいことが判明した。築造後、古墳の周濠は自然埋没するが、中世には周濠各所がしばしば浚渫され、近世以降は大規模に整地されたようである。これは 17 世紀以降、古墳に関係する記録が散見されるようになることとも軌を一にしている（第 1 表）。17 世紀中葉から 19 世紀中葉までの近世の遺物が多く出土することからも、この時期に古墳の周囲は宅地、耕作地としての利用により、改変が進行したのであろう。

後世の改変

周濠の埋没、浚渫



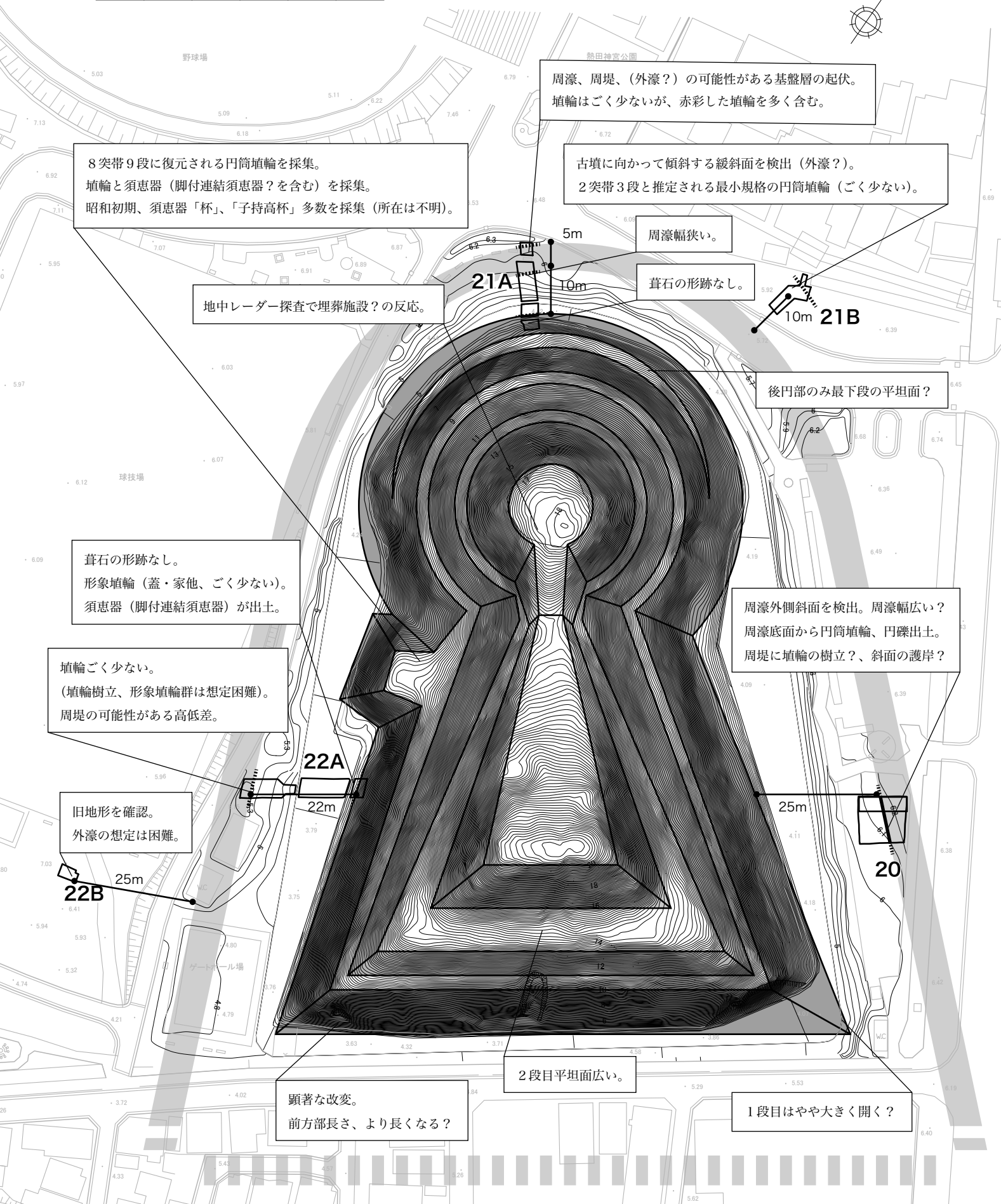
第45図 脚付連結須恵器の比較 (1:10)

第14表 脚付連結須恵器出土地名表

古墳・遺跡	所在地	墳形	規模	出土遺構	器種	図番号	備考
羽根古墳	愛知県名古屋守山区大字上志段味字羽根	円墳	径20m		三連壺	25	
松ヶ洞8号墳	愛知県名古屋守山区大字吉根字松洞	方墳	径8.4m	墳丘斜面の裾	七連杯	1	
松ヶ洞18号墳	愛知県名古屋守山区大字吉根字松洞	円墳	径13.8～15.2m	墳丘流土内	連結甕	(16)	想定復元
池下古墳	愛知県名古屋守山区大字小幡字池下	前方後円墳	全長45m	造り出しの埴輪列内	七連杯	2	
小幡茶臼山古墳	愛知県名古屋守山区大字小幡字北山	前方後円墳	全長63m	造り出し	連結壺	28	
不明(長母寺)	(愛知県名古屋守山区)				三連壺	21	
断夫山古墳	愛知県名古屋守山区熱田区旗屋一丁目	前方後円墳	全長150m	造り出し 造り出し付近 造り出し付近	連結杯? 連結壺? 連結壺?	(22) (23)	所在不明 想定復元 想定復元
白鳥古墳	愛知県名古屋守山区熱田区白鳥一丁目202・203	前方後円墳	全長70m	石室内北 石室内南	三連壺 三連壺	(26)	絵図から 絵図から
篠木4号墳	愛知県春日井市篠木町6丁目	円墳	径21m	採集品	四連杯	7	
味美二子山古墳	愛知県春日井市二子町2丁目	前方後円墳	全長94m	周濠に平行する溝 同上	四連杯 四連杯	8 9	
外山3号墳	愛知県岡崎市戸崎町字外山38	造り出し付円墳	径25m	墳丘平坦面上 同上	七連杯 三連壺	11	
青木原2号墳	愛知県豊田市平戸橋町永和	円墳	径20m	墳丘上		24	
豊田大塚古墳	愛知県豊田市河合町1丁目	帆立貝式古墳	全長45m以上	横穴式石室 同上 同上 同上	四連杯 四連杯 四連杯 四連壺	12 13 14 27	
二又1号墳	岐阜県大垣市上石津町牧田字二又	円墳	径15m	横穴式石室 同上	三連壺 四連壺	17 18	
鎌磨5号墳	岐阜県岐阜市上城田寺字鎌磨	円墳	不明		四連杯	10	
茶白山1号墳	三重県四日市市大字泊村字盆ノ井	造り出し付円墳	径25m以上	造り出し付近の周溝 同上 採集品	四連杯 四連杯 四連杯	4 5 6	
北中寺遺跡	三重県四日市市石塚町字北中寺	集落		土坑SK1	三連壺	19	
昼河A1号墳	三重県伊勢市朝熊町字昼河	円墳	径16m	西棺・墳丘斜面・A2号墳周溝	三連壺	20	
五塚山古墳	静岡県掛川市大坂	円墳	径22m	礫椀 同上	四連杯 三連壺	3 15	

挿図出典 [参考文献]

羽根古墳	守山市教育委員会 1963『守山の古墳』
松ヶ洞8号墳	守山市教育委員会 1963『守山の古墳』
松ヶ洞18号墳	名古屋市教育局委員会 2021『埋蔵文化財調査報告書89 松ヶ洞18号墳』名古屋文化財調査報告106
池下古墳	名古屋市教育局委員会 1969『守山の古墳』調査報告第二 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1991『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第24集
小幡茶臼山古墳	名古屋市教育局委員会 1990『茶白山古墳発掘調査報告書』
不明(長母寺)	愛知県陶磁資料館 1995『古代の造形美 装飾須恵器展』
断夫山古墳	大場啓雄 1930『断夫山古墳の造出について』『考古学雑誌』第20巻第1号 日本考古学会 森泰通・尾野善裕 2003『尾張断夫山古墳の時代—故田端勉氏採集資料をめぐって—』『三河考古』第16号 三河考古談話会 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 2024『史跡 断夫山古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第226集
白鳥古墳	名古屋市教育局委員会 1989『白鳥古墳第II次発掘調査報告書』名古屋文化財調査報告21
篠木4号墳	春日井市教育局委員会 2016『篠木第2号墳』春日井市遺跡発掘調査報告書第16集
味美二子山古墳	春日井市教育局委員会 2004『味美二子山古墳』春日井市遺跡発掘調査報告第10集
外山3号墳	岡崎市教育局委員会 2000『外山古墳群発掘調査概報』
青木原2号墳	豊田市教育局委員会 2009『上向イ田窯』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第38集
豊田大塚古墳	豊田市教育局委員会 1966『豊田大塚古墳発掘調査報告書』 愛知県 2005『愛知県史』資料編3 考古3 古墳
二又1号墳	岐阜県教育委員会 1960『牧田地区遺跡発掘調査報告書』岐阜県文化財調査報告書第1輯
鎌磨5号墳	岐阜市 1979『岐阜市史』史料編 考古・文化財
茶白山1号墳	四日市市教育局委員会 1998『茶白山1号墳』四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書21 四日市市教育局委員会 2002『四日市市文化財保護年報』13—平成13年度—
北中寺遺跡	四日市市遺跡調査会 2002『北中寺遺跡1』四日市市遺跡調査会文化財調査報告書13
昼河A1号墳	伊勢市教育局委員会 1993『昼河古墳群』伊勢市文化財調査報告 7
五塚山古墳	大東町教育委員会 2001『五塚山古墳』



周濠、周堤、(外濠?)の可能性がある基盤層の起伏。
埴輪はごく少ないが、赤彩した埴輪を多く含む。

8突帯9段に復元される円筒埴輪を採集。
埴輪と須恵器(脚付連結須恵器?を含む)を採集。
昭和初期、須恵器「杯」、「子持高杯」多数を採集(所在は不明)。

古墳に向かって傾斜する緩斜面を検出(外濠?)。
2突帯3段と推定される最小規格の円筒埴輪(ごく少ない)。

地中レーダー探査で埋葬施設?の反応。

周濠幅狭い。

葺石の形跡なし。



後円部のみ最下段の平坦面?

葺石の形跡なし。
形象埴輪(蓋・家他、ごく少ない)。
須恵器(脚付連結須恵器)が出土。

周濠外側斜面を検出。周濠幅広い?
周濠底面から円筒埴輪、円礫出土。
周堤に埴輪の樹立?、斜面の護岸?

埴輪ごく少ない。
(埴輪樹立、形象埴輪群は想定困難)。
周堤の可能性がある高低差。

旧地形を確認。
外濠の想定は困難。

22A

22m

25m

20

22B

25m

2段目平坦面広い。

顕著な改変。
前方部長さ、より長くなる?

1段目はやや大きく開く?

その後、明治初期に熱田神宮に管理が移行し、戦後の仮換地、愛知県都市公園としての整備へと至ることになる。

熱田神宮の管理
愛知県都市公園

[参考文献]

- 赤塚次郎 1991「尾張型埴輪について」『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第24集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 大場磐雄 1930「断夫山古墳の造出について」『考古学雑誌』第20巻第1号 日本考古学会
- 東海埋蔵文化財研究会断夫山古墳測量班 1989「断夫山古墳の測量調査」『第6回東海埋蔵文化財研究会 断夫山古墳とその時代』愛知考古学談話会
- 城ヶ谷和広 2015「編年論」『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系 愛知県
- 新納 泉 2018「前方後円墳の設計原理と墳丘大型化のプロセス」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集 国立歴史民俗博物館
- 深谷 淳 2009「断夫山古墳の周濠」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』第11号 名古屋市見晴台考古資料館
- 深谷 淳 2015「断夫山古墳・大須二子山古墳の平面形の推定復元」『河上邦彦先生古稀記念献呈論文集』真陽社
- 森 泰通・尾野善裕 2003「尾張断夫山古墳の時代—故田端勉氏採集資料をめぐって—」『三河考古』第16号 三河考古談話会

[発掘調査報告書等]

- 愛知県 2005『愛知県史』資料編3 考古3 古墳
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1991『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第24集
- 春日井市教育委員会 2004『味美二子山古墳』春日井市遺跡発掘調査報告第10集
- 春日井市教育委員会 2013『白山神社古墳』春日井市遺跡発掘調査報告第13集
- 名古屋市 2008『新修 名古屋市史』資料編 考古1
- 名古屋市教育委員会 1985『熱田区・白鳥古墳—法持寺改築に伴う発掘調査の概要—』
- 名古屋市教育委員会 1989『白鳥古墳第II次発掘調査報告書』名古屋市文化財調査報告21
- 名古屋市教育委員会 1990『茶白山古墳発掘調査報告書』
- 名古屋市教育委員会 2007『埋蔵文化財調査報告書55 長塚古墳（第2次）川東山遺跡 黒川遺跡 富士見町遺跡（第7次）高蔵遺跡（第55次）扇田町遺跡（第2次）正木町遺跡（立会調査）』名古屋市文化財調査報告70
- 名古屋市教育委員会 2011『埋蔵文化財調査報告書63 小幡長塚古墳（第3次・第4次）』名古屋市文化財調査報告80
- 名古屋市教育委員会 2019『埋蔵文化財調査報告書83 志段味古墳群IV』名古屋市文化財調査報告100
- 森田克行 2011『よみがえる大王墓 今城塚古墳』シリーズ遺跡を学ぶ—077 新泉社

遺物一覧表

番号	調査区	グリッド	遺構	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	残存	色調	重量	胎土	ハケ分類	備考	X	Y	Z
1	試掘			埴輪	円筒埴輪	-	-11.2	1/12	2.5YR4/2灰赤色	119.2	少	中	外面叩き			
2	試掘			埴輪	円筒埴輪	-	-9.0	1/12	5PB4/1暗青灰色	101.9	多	中				
3	試掘			埴輪	円筒埴輪	-	-7.9	1/12	5Y5/1灰色	133.8	少	細	細～中			
4	試掘			埴輪	円筒埴輪	-	-4.7	1/12	7.5YR8/6浅黄橙色	57.2	多	細				
5	20	3694	015SD 下層	埴輪	朝顔形埴輪	-	-9.4	2/12	N6/0灰色	268.4	密	中	5.6.7.8.9.10.11.12同一?	-96368.771	-23946.681	3.581
6	20	3694	015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-14.9	2/12	N6/0灰色	351.9	密	中	5.6.7.8.9.10.11.12同一? ヘラ記号	-96369.051	-23946.446	3.637
7	20	3694	015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-10.9	2/12	N6/0灰色	250.8	密	中	5.6.7.8.9.10.11.12同一?	-96369.322	-23945.984	3.645
8	20	3694	015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-15.2	2/12	N6/0灰色	274.5	密	中	5.6.7.8.9.10.11.12同一?	-96369.435	-23946.326	3.589
9	20	3694	015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-15.7	2/12	N6/0灰色	310.0	密	中	5.6.7.8.9.10.11.12同一?	-96366.447	-23948.911	3.55
10	20	3694	015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-22.1	3/12	N6/0灰色	430.0	密	中	5.6.7.8.9.10.11.12同一? 倒立 自然軸	-96369.799	-23946.21	3.623
11	20		015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-10.0	1/12	N7/0灰白色	102.7	密	中	5.6.7.8.9.10.11.12同一?			
12	20	3694	015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-8.6	1/12	N7/0灰白色	136.9	少	中	5.6.7.8.9.10.11.12同一?	-96367.049	-23948.557	3.593
13	20	3794	015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-8.8	2/12	2.5YR4/1赤灰色	210.5	少	中	13.14.15.16同一?	-96370.369	-23945.993	3.662
14	20		015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-6.8	2/12	N4/0灰色	106.6	少	中	13.14.15.16同一?			
15	20	3694	015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-7.0	2/12	5PB4/1暗青灰色	113.8	少	粗	13.14.15.16同一?	-96367.791	-23947.249	3.666
16	20		015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-7.4	1/12	2.5YR5/1赤灰色	80.1	少	中	13.14.15.16同一?			
17	20	3694	015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-13.8	2/12	N5/0灰色	293.5	少	中	17.18.19同一?	-96368.796	-23945.623	3.735
18	20	3694	015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-8.1	1/12	N5/0灰色	163.4	少	中	17.18.19同一?	-96365.379	-23949.751	3.623
19	20		015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-8.3	1/12	N5/0灰色	103.2	少	中	17.18.19同一?			
20	20	3694	015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-7.4	2/12	N5/0灰色	168.8	少	中		-96366.833	-23948.785	3.66
21	20	3694	015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-7.6	2/12	5Y7/1灰白色	96.0	少	細	細～中	-96369.75	-23945.792	3.661
22	20	3694	015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-10.4	2/12	5Y7/1灰白色	218.3	多	中		-96369.72	-23945.702	3.666
23	20	3694	015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-10.7	2/12	7.5Y7/1灰白色	261.1	多	中		-96366.659	-23948.916	3.574
24	20	3695	015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-6.9	2/12	2.5Y8/2灰白色	142.8	少	中		-96364.365	-23950.311	3.765
25	20		015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-6.1	1/12	5Y8/1灰白色	86.5	少	中				
26	20	3694	015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-8.9	1/12	N8/0灰白色	129.2	多	細	細～中	-96367.32	-23948.302	3.542
27	20	3694	015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-8.2	1/12	10Y5/1灰色	101.7	多	細	細～中	-96368.907	-23946.504	3.692
28	20	3694	015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-4.9	1/12	5YR8/4淡橙色	68.3	多	中	28.29同一 摩滅	-96368.892	-23947.055	3.556
29	20	3694	015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-5.4	1/12	5YR8/4淡橙色	63.0	多	中	摩滅 突帯設定技法の凹線	-96368.604	-23947.2	3.527
30	20	3794	015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-7.6	1/12	5YR5/3にぶい赤褐色	82.3	多	中		-96370.014	-23945.637	3.642
31	20		015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-7.3	1/12	N6/0灰色	70.9	少	中				
32	20		015SD 下層	埴輪	朝顔形埴輪	-	-7.0	1/12	N7/0灰白色	67.2	少	細				
33	20	3695	015SD 下層	埴輪	朝顔形埴輪	-	-4.6	2/12	7.5YR8/4浅黄色	59.1	少	中	33.34同一 摩滅	-96364.252	-23950.301	3.691
34	20	3694	015SD 下層	埴輪	円筒埴輪	-	-7.2	2/12	2.5Y8/3淡黄色	56.5	少	中	33.34同一 摩滅	-96365.458	-23949.058	3.644
35	20		015SD 下・上層	埴輪	円筒埴輪	-	-4.5	1/12	5Y8/1灰白色	27.8	少	中				
36	20		015SD 下・上層	埴輪	円筒埴輪	-	-3.0	1/12	10Y8/1灰白色	10.4	少	細				
37	20		015SD 下・上層	埴輪	円筒埴輪	-	-6.1	2/12	5Y5/1灰色	125.0	少	粗				
38	20		015SD 下・上層	埴輪	円筒埴輪	-	-7.7	2/12	5YR5/3にぶい赤褐色	104.7	多	細				
39	20		015SD 下・上層	埴輪	円筒埴輪	-	-6.2	2/12	5Y8/1灰白色	144.0	少	細	細～中			
40	20		015SD 下・上層	埴輪	円筒埴輪	-	-8.3	1/12	N7/0灰白色	88.1	少	細				
41	20		015SD 下・上層	埴輪	円筒埴輪	-	-8.7	1/12	5YR8/4淡橙色	129.9	少	中				
42	20		015SD 下・上層	埴輪	円筒埴輪	-	-7.1	1/12	5Y8/2灰白色	123.7	密	摩滅	摩滅 突帯設定技法の凹線			
43	20		015SD 下・上層	埴輪	円筒埴輪	-	-5.4	1/12	N4/0灰色	110.3	少	中				
44	20		015SD 下・上層	埴輪	朝顔形埴輪	-	-3.5	1/12	5Y6/1灰色	26.2	少	中				
45	20		015SD 上層	埴輪	円筒埴輪	-	-3.2	1/12	N5/0灰色	13.0	少	中				
46	20		015SD 上層	埴輪	円筒埴輪	-	-9.2	1/12	10YR7/3にぶい黄褐色	86.3	少	細	ヘラ記号			
47	20	3694	015SD 上層	埴輪	円筒埴輪	-	-16.8	2/12	10YR8/2灰白色	308.4	少	粗		-96368.114	-23946.184	3.715
48	21A (a)	3206	客土	埴輪	円筒埴輪	-	-7.2	2/12	7.5YR7/6橙色	212.5	少	中				
49	21A (a)	3206	検出1	埴輪	円筒埴輪	-	-10.0	2/12	7.5YR7/6橙色	143.4	少	細	細～中 外面赤彩 内面付着			
50	21A (a)	3206	客土	埴輪	円筒埴輪	-	-5.5	1/12	10YR8/4浅黄橙色	52.9	多	中	外面赤彩			
51	21A (a)	3206	検出1	埴輪	円筒埴輪	-	-6.1	1/12	2.5Y7/4浅黄色	46.2	少	摩滅	摩滅			
52	21A (a)	3206	表土	埴輪	円筒埴輪	-	-7.0	1/12	5Y5/1灰色	54.2	多	粗				
53	21A (a)	3206	客土	埴輪	円筒埴輪	-	-4.9	1/12	10Y7/1灰白色	79.8	多	細				
54	21A (a)	3206	検出1	埴輪	円筒埴輪	-	-6.8	1/12	2.5Y8/3淡黄色	45.9	少	中				
55	21A (a)	3206	検出1	埴輪	円筒埴輪	-	-5.8	1/12	N6/0灰色	31.2	少	中	外面叩き			
56	21A (a)	3206	客土	埴輪	朝顔形埴輪	-	-4.3	1/12	5Y7/1灰白色	45.1	多	中				
57	21A (c)	3107	001SD	埴輪	円筒埴輪	-	-5.3	1/12	5Y7/1灰白色	60.9	少	中				
58	21A (c)	3106	001SD	埴輪	円筒埴輪	-	-3.6	1/12	10YR8/6浅黄褐色	19.1	密	摩滅	摩滅			
59	21A (c)	3106	001SD	埴輪?	円筒埴輪?	-	-4.9	1/12	N4/0灰色	23.3	少	-	ナデ系?			
60	21A (c)	3106	001SD	埴輪	円筒埴輪	-	-7.0	1/12	5Y8/2灰白色	62.4	多	細	細～中	-96317.488	-24069.562	3.283
61	21A (c)	3106	001SD	埴輪	円筒埴輪	-	-6.0	1/12	7.5Y8/1灰白色	71.6	密	中	外面赤彩 突帯設定技法の凹線			
62	21A (c)	3107	整地層	埴輪	円筒埴輪	-	-6.8	1/12	2.5Y7/3浅黄色	63.4	少	中				
63	21A (c)	3107	客土	埴輪	円筒埴輪	-	-4.6	1/12	2.5Y8/4淡黄色	43.8	少	中				
64	21A (c)	3107	001SD	埴輪	円筒埴輪	-	-5.8	1/12	7.5Y6/1灰色	54.2	少	中				
65	21A (c)	3106	001SD	埴輪	円筒埴輪	-	-5.2	1/12	5Y7/1灰白色	41.2	多	摩滅	摩滅			
66	21A (c)	3107	001SD	埴輪	円筒埴輪	-	-4.5	1/12	N5/0灰色	44.8	多	中				
67	21A (c)	3106	001SD	埴輪	円筒埴輪	-	-7.3	2/12	10YR7/6明黄褐色	79.9	多	中	外面紐ずれ			
68	21A (c)	3106	001SD	埴輪?	朝顔形埴輪?	-	-2.9	1/12	2.5Y8/3浅黄色	12.3	少	摩滅	摩滅			
69	21B	2802	010SD	埴輪	円筒埴輪	-	-3.4	1/12	10YR8/3浅黄褐色	31.3	少	粗	摩滅	-96285.607	-24023.681	5.505
70	21B	2802	検出1	埴輪	円筒埴輪	-	-5.2	2/12	10YR8/3浅黄褐色	51.0	密	中				

遺物一覽表

番号	調査区	グリッド	遺構	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	残存	色調	重量	胎土	ハケ分類	備考	X	Y	Z	
71	22A	(a)	4203	004SD	埴輪	円筒埴輪	-	-8.8	1/12	5Y5/1灰色	104.1	多	細	-96423.376	-24038.788	3.008	
72	22A	(a)	4203	004SD	埴輪	円筒埴輪	-	-8.2	1/12	5YR5/4にぶい赤褐色	56.0	少	細	-96423.507	-24039.137	3.385	
73	22A	(a)	4203	004SD	埴輪	円筒埴輪	-	-5.7	1/12	2.5Y8/3淡黄色	64.3	少	中	-96420.838	-24039.48	2.972	
74	22A	(a)	4203	004SD	埴輪	円筒埴輪	-	-5.6	1/12	7.5YR7/6橙色	87.5	多	中	74.75同一	-96420.726	-24039.336	3.111
75	22A	(a)	4203	004SD	埴輪	円筒埴輪	-	-5.1	1/12	7.5YR7/6橙色	85.4	多	中	74.75同一	-96422.948	-24039.229	2.986
76	22A	(a)	4203	004SD	埴輪	朝顔形埴輪	-	-5.3	2/12	7.5YR7/6橙色	68.7	多	粗	-96422.508	-24038.998	2.991	
77	22A	(a)	4203	004SD	埴輪	朝顔形埴輪	-	-8.3	2/12	5Y6/1灰色	224.1	多	中	-96423.18	-24039.141	2.91	
78	22A	(a)	4203	客土	埴輪	円筒埴輪	31.0	-23.3	3/12	2.5Y8/3淡黄色	650.0	少	中	-96421.124	-24039.627	3.848	
79	22A	(a)	4204	客土	埴輪	円筒埴輪	-	-6.7	2/12	2.5Y7/4淡黄色	119.3	少	細	-96424.559	-24042.881	2.956	
80	22A	(a)	4203	客土	埴輪	円筒埴輪	-	-10.2	2/12	5Y8/2灰白色	147.2	少	細~中	-96423.53	-24039.912	3.483	
81	22A	(a)	4203	客土	埴輪	円筒埴輪	-	-9.0	2/12	2.5Y8/2灰白色	154.0	少	細	-96422.44	-24039.225	3.834	
82	22A	(a)	4204	客土	埴輪	円筒埴輪	-	-4.3	2/12	7.5Y8/1灰白色	77.1	少	中	-96420.922	-24040.822	3.286	
83	22A	(a)	4203	客土	埴輪	円筒埴輪	-	-7.6	1/12	7.5YR5/4にぶい褐色	48.3	少	中	-96422.852	-24039.121	3.866	
84	22A	(a)	4203	客土	埴輪	円筒埴輪	-	-4.7	1/12	7.5YR5/2灰褐色	43.1	少	中	-96421.678	-24040.298	3.575	
85	22A	(a)	4203	客土	埴輪	円筒埴輪	-	-4.3	1/12	7.5YR7/6橙色	24.2	少	中	-96421.276	-24039.85	3.746	
86	22A	(a)	4204	客土	埴輪	円筒埴輪	-	-7.1	1/12	10YR8/3淡黄褐色	81.4	少	中	へう記号	-96420.775	-24040.126	3.858
87	22A	(a)	4203	客土	埴輪	円筒埴輪	-	-3.2	1/12	2.5Y7/1灰白色	15.5	少	細	-96422.164	-24039.42	3.801	
88	22A	(a)	4203	客土	埴輪	円筒埴輪	-	-7.8	1/12	5Y7/1灰白色	80.4	少	細	-96422.925	-24039.335	3.739	
89	22A	(a)	4203	客土	埴輪	円筒埴輪	-	-7.9	1/12	10YR7/4にぶい黄褐色	100.3	多	中	摩滅	-96420.147	-24039.984	3.924
90	22A	(a)	4203	客土	埴輪	円筒埴輪	-	-6.5	1/12	7.5YR7/4にぶい橙色	78.2	少	中	摩滅	-96421.762	-24039.491	3.868
91	22A	(a)	4203	客土	埴輪?	円筒埴輪?	-	-4.3	1/12	2.5Y8/3淡黄色	38.3	少	中	外面叩き	-96423.453	-24039.962	3.571
92	22A	(a)	4203	客土	埴輪	朝顔形埴輪	-	-7.4	2/12	5Y7/2灰白色	125.3	少	粗	-96423.568	-24039.701	4.167	
93	22A	(a)	4203	表土	埴輪	円筒埴輪	-	-5.5	1/12	2.5Y7/3淡黄色	31.2	少	中	-96422.003	-24039.552	4.625	
94	22A	(a)	4203	表土	埴輪	円筒埴輪	-	-4.4	1/12	5Y8/1灰白色	13.5	少	細	-96422.405	-24039.738	4.643	
95	22A	(a)	4204	表土	埴輪	円筒埴輪	-	-9.3	1/12	2.5Y8/2灰白色	89.4	少	中	-96420.588	-24040.739	4.436	
96	22A	(c)	4305	002SD	埴輪	円筒埴輪	-	-3.8	1/12	5Y8/1灰白色	21.1	多	摩滅	摩滅	-96431.603	-24051.987	3.535
97	22A	(c)	4305	002SD	埴輪	円筒埴輪	-	-6.4	1/12	5Y7/1灰白色	49.0	少	細	-96433.286	-24055.864	3.642	
98	22A	(c)	4305	002SD	埴輪	円筒埴輪	-	-6.6	1/12	5Y8/2灰白色	62.7	少	中	-96433.062	-24056.788	3.496	
99	22A	(c)	4305	002SD	埴輪	円筒埴輪	-	-8.0	2/12	2.5Y8/3淡黄色	108.8	多	中	-96434.019	-24056.195	3.741	
100	22A	(b)	4204	攪乱	埴輪	円筒埴輪	36.6	-8.6	1/12	7.5YR8/4淡黄褐色	117.8	密	細	-96426.169	-24046.943	3.033	
101	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-12.4	2/12	5Y7/1灰白色	211.1	少	中	透穴に歪み	-96423.819	-24043.423	3.241
102	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-9.5	2/12	5Y8/1灰白色	181.0	密	中	-96423.992	-24043.053	2.998	
103	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-13.1	2/12	10YR7/3にぶい黄褐色	284.5	多	中	-96425.657	-24042.572	3.163	
104	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-9.3	2/12	2.5Y8/1灰白色	130.0	少	中	摩滅	-96424.821	-24042.422	3.162
105	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-5.6	2/12	7.5YR8/3淡黄褐色	71.8	多	中	-96424.894	-24042.677	3.306	
106	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-7.0	2/12	5Y7/1灰白色	153.7	多	粗	-96425.362	-24042.346	3.114	
107	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-7.4	2/12	7.5YR6/6橙色	143.4	多	細~中	-96425.486	-24042.939	2.442	
108	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-10.9	2/12	5Y8/1灰白色	165.7	少	中	-96424.144	-24042.885	3.069	
109	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-7.5	2/12	10Y7/1灰白色	138.8	少	中	-96422.598	-24043.103	2.97	
110	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-5.6	2/12	7.5YR8/4淡黄褐色	120.1	多	細	-96423.826	-24043.01	2.838	
111	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-9.3	2/12	7.5YR6/6橙色	149.1	少	中	-96422.07	-24042.835	3.169	
112	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-9.8	2/12	7.5Y8/1灰白色	128.1	少	細~中	外面叩き	-96426.517	-24043.07	3.118
113	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-4.4	2/12	7.5Y6/1灰色	51.5	多	中	外面叩き	-96424.187	-24042.754	3.344
114	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-6.1	1/12	10YR5/2灰黄褐色	61.8	多	中	-96424.435	-24042.892	3.145	
115	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-7.9	1/12	2.5Y8/2灰白色	106.1	多	中	-96423.23	-24042.646	3.071	
116	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-6.8	1/12	7.5YR7/2明褐色	47.0	少	中	-96423.25	-24042.564	3.081	
117	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-5.8	1/12	7.5YR7/6橙色	77.5	少	粗	-96424.256	-24043.61	2.655	
118	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-13.2	1/12	5Y8/1灰白色	169.0	少	中	-96423.162	-24042.973	2.988	
119	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-5.7	1/12	5Y8/1灰白色	72.0	多	摩滅	摩滅	-96423.831	-24042.501	3.115
120	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-7.8	1/12	5Y8/1灰白色	77.8	密	摩滅	摩滅	-96425.313	-24042.147	3.005
121	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-5.3	1/12	10Y7/1灰白色	56.9	多	細	-96424.559	-24042.881	2.956	
122	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-6.7	1/12	5Y7/1灰白色	76.0	密	中	自然釉	-96423.452	-24043.427	3.039
123	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-6.3	1/12	10Y7/1灰白色	48.4	密	中	自然釉	-96422.572	-24043.187	2.992
124	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-8.0	1/12	2.5Y8/2灰白色	73.6	多	摩滅	摩滅	-96425.119	-24043.298	2.957
125	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-8.7	1/12	N5/0灰色	86.3	多	中	-96425.211	-24043.092	2.766	
126	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-8.2	1/12	2.5Y8/3淡黄色	137.6	少	中	倒立 外面叩き	-96426.521	-24042.958	2.991
127	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	円筒埴輪	-	-10.0	1/12	7.5YR7/6橙色	192.1	少	中	外面叩き 内面無文当て具痕	-96423.754	-24042.834	3.093
128	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	朝顔形埴輪	-	-3.7	2/12	2.5Y8/2灰白色	46.6	多	-	摩滅	-96423.521	-24043.375	2.949
129	21A	(a)	3206	客土	埴輪	形象埴輪 不明	長-7.8 幅-7.0 厚-3.2			10YR8/4淡黄褐色	147.6	少	-	斜格子状の線刻			
130	22A	(a)	4203	客土	埴輪	形象埴輪 蓋	-	-5.4	3/12	10YR7/4にぶい黄褐色	58.9	少	中	内外面赤彩	-96423.275	-24039.51	3.547
131	22A	(a)	4204	客土	埴輪	形象埴輪 不明	長-5.2 幅-5.3 厚-1.5			5Y8/3淡黄色	51.2	多	摩滅	磨状	-96421.18	-24040.517	3.633
132	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	形象埴輪 家	長-7.2 幅-6.3 厚-2.3			7.5YR7/6橙色	57.7	多	-		-96422.497	-24043.353	3.305
133	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	形象埴輪 不明	長-5.1 幅-5.8 厚-1.0			10YR7/4にぶい黄褐色	28.8	少	細		-96425.614	-24043.251	3.249
134	22A	(b)	4204	003SD	埴輪	形象埴輪? 不明	長-7.0 幅-7.7 厚-1.6			5Y8/2灰白色	89.6	少	摩滅	摩滅	-96425.583	-24041.873	3.241
135	20		015SD	下・上層	須恵器	杯類	-	-2.8	1/12	7.5YR5/1灰色	7.7	少					
136	20		015SD	下・上層	須恵器	甕	-	-1.6	1/12	7.5Y6/1灰色	1.9	少					
137	22A	(a)	4203	004SD	須恵器	脚付連結須恵器	-	-7.8	3/12	10Y7/1灰白色	81.6	少		-96422.893	-24039.289	3.043	
138	22A	(a)	4203	客土	須恵器	壺類	-	-3.4	1/12	7.5Y6/1灰色	22.2	少	摩滅	-96422.637	-24039.001	4.055	
139	22A	(a)	4204	客土	須恵器	壺類	-	-3.2	1/12	7.5Y7/1灰白色	9.6	少		-96422.233	-24040.31	3.364	
140	22A	(b)	4204	003SD	須恵器	器台	-	-4.9	1/12	5Y7/1灰白色	37.1	少	摩滅	-96426.482	-24043.051	3.097	
141	22A	(c)	4305	攪乱	須恵器	甕	-	-2.7	1/12	10Y6/1灰色	6.6	少		-96432.717	-24054.191	3.742	

遺物一覧表

番号	調査区	グリッド	遺構	種別	器種	型式	口径(cm)	残存	底径(cm)	残存	器高(cm)	色調	備考(輪調等)
142	20		015SD	土師器	高杯		-	-	-	-	-3.8	7.5YR7/6橙色	
143	20		015SD	土製品	錘		長7.8		幅3.2		厚1.6	10YR8/1灰白色	孔径0.6cm 重量69.6g
144	20		015SD	山茶碗	碗	尾張型第3型式	-	-	8.2	4/12	-2.2	5Y7/1灰白色	
145	20		015SD	山茶碗	碗	東濃型丸石3号窯式	15.0	5/12	-	-	-4.5	2.5Y8/1灰白色	
145	20		015SD	山茶碗	碗	尾張型第6型式	14.4	2/12	6.6	7/12	5.0	5Y7/1灰白色	
147	20		015SD	山茶碗	碗	尾張型第7型式	14.8	2/12	6.8	3/12	4.6	2.5Y8/1灰白色	
148	20		015SD	瓦器	火鉢		-	1/12	-	-	-4.3	7.5YR7/4にぶい橙色	7.5YR2/1黒色
149	試掘			青磁	蓮弁文碗		15.4	2/12	-	-	-4.1	N8/0灰白色	5GY7/1明オリープ灰色
150	20		周濠上位	陶器	灰軸丸碗	登窯第6・7小期	10.0	2/12	4.0	12/12	6.9	5Y8/1灰白色	5Y8/2灰白色
151	20		周濠上位	陶器	灰軸丸碗	登窯第6・7小期	8.6	9/12	4.0	12/12	4.9	5Y8/1灰白色	2.5Y8/1灰白色
152	20		周濠上位	陶器	黄瀬戸鉢	登窯第3小期	28.6	4/12	15.0	12/12	7.8	10YR8/3浅黄褐色	10YR8/3浅黄褐色
153	20		周濠上位	磁器	染付丸皿		13.9	4/12	7.4	7/12	3.4	N8/0灰白色	7.5GY8/1明緑灰色
154	20		周濠上位	磁器	染付香炉		13.8	3/12	9.4	6/12	10.8	9/0白色	10GY8/1明緑灰色
155	20		周濠上位	土師器	皿	ロクロ調整	7.9	3/12	4.5	12/12	2.0	5YR6/8橙色	
156	試掘			陶器	志野丸皿	登窯第5小期	10.0	12/12	6.1	12/12	1.8	2.5Y8/2灰白色	9/0白色
157	20		試掘トレンチ	陶器	志野丸皿	登窯第6小期	8.7	6/12	4.8	7/12	1.8	10YR8/2灰白色	10YR7/2にぶい黄褐色
158	20		試掘トレンチ	陶器	鉄軸天目茶碗	登窯第7小期	9.1	2/12	3.9	12/12	4.7	10YR8/2灰白色	5YR2/1黒褐色
159	試掘			陶器	灰軸灯明皿	登窯第11小期	7.9	12/12	3.6	12/12	1.9	2.5Y8/1灰白色	2.5Y8/2灰白色
160	20		試掘トレンチ	陶器	灰軸仏前具	登窯第6小期	6.3	1/12	4.4	12/12	5.0	5Y8/1灰白色	7.5Y7/3浅黄色
161	試掘			陶器	灰軸仏前具	登窯第6小期	-	-	4.7	7/12	3.2	5Y8/1灰白色	5Y7/3浅黄色
162	試掘			陶器	福鉢	登窯第11小期	30.0	4/12	-	-	-12.7	10YR8/3浅黄褐色	5YR2/4極暗赤褐色
163	20		試掘トレンチ	磁器	染付丸碗	登窯第11小期	9.8	4/12	3.9	12/12	5.6	9/0白色	N8/0灰白色
164	試掘			磁器	染付丸皿	登窯第11小期	13.5	6/12	7.1	12/12	3.6	10YR8/1灰白色	7.5GY8/1明緑灰色
165	20		試掘トレンチ	土師器	皿	ロクロ調整	8.8	5/12	5.0	12/12	1.5	7.5YR6/6橙色	口縁部に煤付着
166	試掘			土師器	皿	ロクロ調整	8.8	7/12	4.0	9/12	1.9	5YR6/6橙色	
167	試掘			土師器	皿	ロクロ調整	8.0	3/12	4.2	12/12	2.0	10YR6/3にぶい黄褐色	
168	20		試掘トレンチ	土師器	皿	ロクロ調整	6.4	7/12	3.8	12/12	1.3	10YR7/4にぶい黄褐色	口縁部に煤付着
169	20		009SK	磁器	染付端反碗	登窯第11小期	9.2	10/12	3.6	12/12	4.6	9/0白色	10GY8/1明緑灰色
170	20		009SK	磁器	染付端反碗	登窯第11小期	8.4	9/12	3.8	12/12	5.0	9/0白色	7.5GY8/1明緑灰色
171	20		009SK	陶器	染付端反碗	登窯第11小期	9.7	10/12	3.4	12/12	4.9	5Y8/2灰白色	2.5Y4/3オリープ褐色
172	20		009SK	磁器	染付広東碗	登窯第11小期	10.3	12/12	5.4	12/12	5.8	N8/0灰白色	10Y8/1灰白色
173	20		009SK	磁器	染付広東碗	登窯第11小期	11.0	4/12	5.7	12/12	6.2	9/0白色	10GY8/1明緑灰色
174	20		009SK	磁器	染付仏前具	登窯第11小期	6.5	1/12	3.7	12/12	6.3	N8/0灰白色	7.5GY8/1明緑灰色
175	20		009SK	陶器	染付箱形湯呑	登窯第11小期	6.7	9/12	3.5	12/12	5.7	7.5Y8/1灰白色	7.5Y7/1灰白色
176	20		009SK	陶器	染付箱形湯呑	登窯第11小期	6.2	6/12	3.0	7/12	5.3	2.5Y8/1灰白色	7.5Y8/1灰白色
177	20		009SK	陶器	染付小瓶	登窯第10・11小期	-	-	4.4	12/12	-7.5	10YR8/2灰白色	7.5Y8/1灰白色
178	20		009SK	陶器	緑軸香炉		11.8	9/12	11.6	9/12	9.7	2.5Y8/2灰白色	5GY5/1オリープ灰色
179	20		009SK	陶器	鉄軸灯明皿	登窯第11小期	9.8	11/12	4.4	12/12	2.2	10YR8/2灰白色	5YR4/4にぶい赤褐色
180	20		009SK	陶器	鉄軸灯明皿	登窯第11小期	7.6	8/12	3.3	12/12	1.8	5Y8/1灰白色	5YR4/3にぶい赤褐色
181	20		009SK	陶器	鉄軸灯明皿	登窯第11小期	7.5	11/12	3.9	12/12	1.7	10YR8/2灰白色	7.5YR5/3にぶい褐色
182	20		009SK	陶器	鉄軸灯明皿	登窯第11小期	7.1	12/12	3.4	12/12	1.6	5YR6/1褐灰色	5YR4/4にぶい赤褐色
183	20		009SK	陶器	鉄軸灯明皿	登窯第11小期	7.2	11/12	3.3	12/12	1.4	5Y8/1灰白色	5YR4/4にぶい赤褐色
184	20		009SK	陶器	鉄軸灯明皿	登窯第11小期	6.6	12/12	2.9	12/12	1.6	2.5Y8/2灰白色	5YR4/3にぶい赤褐色
185	20		009SK	陶器	鉄軸灯明皿	登窯第11小期	6.7	12/12	3.1	12/12	1.6	10YR8/2灰白色	5YR4/4にぶい赤褐色
186	20		009SK	陶器	福鉢	登窯第10小期	36.2	3/12	15.9	12/12	14.8	10YR8/3浅黄褐色	7.5YR3/2黒褐色
187	20		009SK	陶器	鉄軸鍋		20.4	10/12	6.1	3/12	9.5	10YR8/1灰白色	7.5YR4/2灰褐色
188	20		009SK	石製品	硯		長16.5		幅6.1		厚0.9	5Y6/2灰オリープ色	凝灰質泥岩 重量136.9g
189	21A (a)	3206	表土	山茶碗	碗	尾張型第5型式	-	-	5.6	5/12	-2.1	5Y8/1灰白色	
190	21A (a)	3206	検出1	土師器	皿	ロクロ調整	10.2	3/12	5.6	4/12	2.6	2.5Y7/4浅黄色	スス、タール状付着物
191	21A (a)	3206	検出1	石製品	五輪塔		長17.7		幅10.0		厚10.7	5Y8/2灰白色	花こう岩 重量4.6kg
192	21A (c)	3107	001SD	山茶碗	碗	東濃型丸石3号窯式	-	-	7.9	8/12	-4.3	5Y8/2灰白色	
193	21A (c)	3107	001SD	山茶碗	碗	尾張型第6型式	-	-	7.0	4/12	-2.9	5Y8/1灰白色	
194	21A (c)	3107	001SD	山茶碗	碗	尾張型第6型式	-	-	6.6	7/12	-2.4	5Y8/1灰白色	内面に墨痕?
195	21A (c)	3107	001SD	山茶碗	碗	尾張型第12型式	-	-	4.4	12/12	-2.1	5Y8/1灰白色	内面全面に煤付着
196	21A (c)	3107	001SD	山茶碗	小皿	東濃型脇の島窯式	7.8	3/12	5.2	5/12	0.9	5Y7/1灰白色	
197	21A (c)	3107	001SD	古瀬戸	四耳壺	中期	-	-	-	-	-4.0	5Y8/1灰白色	薄緑色の灰軸
198	21A (c)	3107	整地層	山茶碗	碗	尾張型第3型式	-	-	9.2	3/12	-2.0	2.5Y7/1灰白色	
199	21A (c)	3107	整地層	瓦	平瓦		長-8.3		幅-5.9		厚2.2	10YR8/3浅黄褐色	重量123.6g
200	21A (d)	3007	検出1	瓦	丸瓦		長-4.2		幅-4.5		厚2.0	7.5Y8/1灰白色	重量75.7g
201	21B	2802	検出1	瓦	棧瓦		長-7.6		幅-6.8		厚1.9	10YR6/3にぶい黄褐色	重量124.7g
202	21B	2802	検出1	瓦	棧瓦		長-6.3		幅-5.4		厚1.6	10YR8/3浅黄褐色	重量57.0g
203	22A (a)	4203	004SD	山茶碗	碗	尾張型第5型式	-	-	7.4	3/12	-1.9	5Y8/1灰白色	
204	22A (a)	4203	004SD	土師器	皿	ロクロ調整	-	-	5.0	6/12	-1.0	5YR6/6橙色	
205	22A (a)	4203	004SD	陶器	灰軸徳利	登窯第8小期	-	-	6.4	4/12	-3.7	10YR8/2灰白色	2.5Y5/4黄褐色
206	22A (a)	4203	004SD	陶器	鉄軸乗鬺	登窯第8・9小期	4.6	7/12	3.7	12/12	3.9	2.5Y8/1灰白色	7.5YR3/3暗褐色
207	22A (a)	4203	004SD	陶器	鉄軸灯明皿	登窯第11小期	7.2	11/12	3.5	12/12	1.4	2.5Y7/1灰白色	5YR4/4にぶい赤褐色
208	22A (a)	4203	004SD	陶器	鉄軸灯明皿	登窯第11小期	6.7	12/12	3.2	12/12	1.5	10YR7/2にぶい黄褐色	7.5YR5/6明褐色
209	22A (a)	4203	004SD	陶器	福鉢	登窯第4小期	32.4	1/12	-	-	-5.9	10YR8/2灰白色	2.5Y3/3灰オリープ褐色
210	22A (b)	4204	002SD	土師器	皿	非ロクロ調整	12.0	4/12	6.0	6/12	2.4	10YR8/4浅黄褐色	
211	22A (c)	4305	検出1	陶器	福鉢	大窯第1段階	-	1/12	-	-	-1.3	10YR8/2灰白色	2.5Y3/1黒褐色
212	22A (c)	4305	002SD	土師器	壺		-	-	3.8	2/12	-2.3	7.5YR8/6浅黄褐色	
213	22A (c)	4305	002SD	陶器	腰銘茶碗	登窯第8小期	-	-	9.6	3/12	-1.4	10YR8/1灰白色	5YR2/1黒褐色
214	22A (c)	4305	002SD	土師器	皿	ロクロ調整	8.0	2/12	4.6	6/12	2.4	7.5YR7/6橙色	
215	22A (c)	4305	002SD	土師器	皿(加工門盤)	ロクロ調整	長2.3		幅2.3		厚0.6	7.5YR7/6橙色	重量3.3g
216	22A (c)	4305	客土	煉瓦	耐火煉瓦		長22.8		幅11.3		厚6.0	5YR7/6橙色	重量2.8Kg



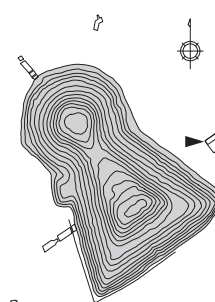
20区上面

奥が前方部、手前が令和元年度試掘調査トレンチ。石列と整地層、基盤層の関係。基盤層が大きく削り込まれる。



20区周濠015SD上面

奥が大規模な廃棄土坑009SK。基盤層の高まり(標高5.6m)がわずかに残存する。



20区周濠015SD遺物出土状況

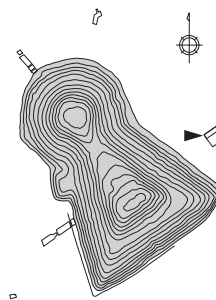
手前が周濠外側斜面。下層から円礫に混じて円筒埴輪がややまとまって出土する。





20区完掘状況

周濠は墳丘（前方部）に沿う方向で検出された。外側はかなりの急傾斜で立ち上がるが、後世に大きく切土されている可能性もある。



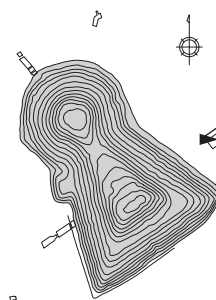
20区周濠015SD土層断面

周濠の埋土は暗褐色を基調とする上層、黄褐色を基調とする下層に区分される。上層は中世前半に浚渫されている。



20区周濠015SD外側

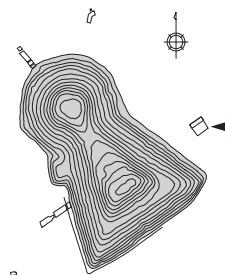
基盤層上に埴輪を含まず、土師器のみを含む固く締まった層が残る。





20区周濠015SD完掘状況

左が古墳（前方部）に沿う周濠015SD。右が近世から近代の大規模な廃棄土坑009SK。



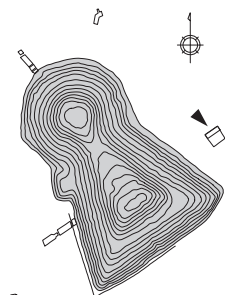
20区周濠015SD土層断面

円筒埴輪を多く含む下層の堆積層はわずかに残存する程度。



20区と前方部

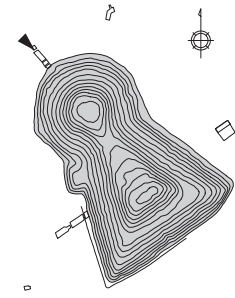
20区周濠015SDの外側斜面と前方部（右）の位置関係。前方部の方向に沿って、周濠015SDの外側斜面を検出。





21A区完掘状況

奥が後円部。玉石垣から墳丘側が史跡指定範囲。玉石垣外側は史跡指定範囲外。



21A区墳丘部分(a)調査状況

右が墳丘（後円部）側、左に玉石垣。墳丘側で公園整備時の客土を除去した状況。五輪塔を含む中世から近世の遺物が出土する。



21A区墳丘部分(a)完掘状況

墳丘側を基盤層まで確認した状況。墳丘裾の基盤層は土管の埋設によって大きく削られる。さらに、公園整備時前の客土（または崩落土）を確認。葺石と思われる石材は認められない。





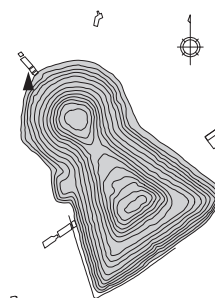
21A区玉石垣間(b)完掘状況

玉石垣設置時に基盤層以下まで大きく掘削されていた。手前に中近世の土坑群。



21A区玉石垣外側(c)土層断面

玉石垣から既設ベンチまで。周濠状に手前が深く落ち込む状況(001SD)を確認。上位に中世から近世の整地層が厚く堆積する。



21A区玉石垣外側(d)土層断面

既設ベンチから園路まで。基盤層が周濠底面から立ち上がり、再び緩やかに下がる。





21A区遺物出土状況

玉石垣外側の周濠状の落ち込み001SD下層からは円筒埴輪に混じって中世の遺物が出土する。出土量も少ない。



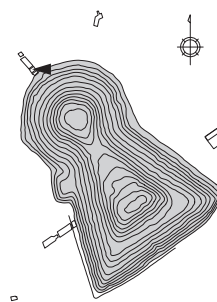
21A区中世の土坑003SK

中世から近世の整地層下位に周濠状の落ち込み001SDの底面付近から土坑003SKが掘削される。中世の遺物が出土した。



21A区玉石垣間(b)の土坑群

土坑002SK・004SK・005SKが連続して掘削される。埴輪がわずかに出土したが、遺構の時期は中世以降と考えられる。





21B区と後円部

壽琳寺境内側から古墳（後円部）の方向。付近は今回の調査地点で最も高い（標高6.1m）。



21B区完掘状況

手前（園路側）は公園整備前の宅地造成により大きく攪乱される。奥（境内側）は基盤層が残存し、近世と推定される土坑が点在する。



21B区緩斜面010SD

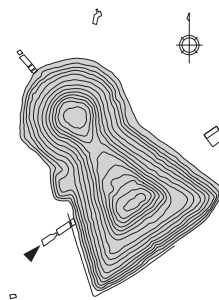
基盤層は古墳（後円部）の方向に傾斜し、緩斜面010SDからは円筒埴輪底部も出土した。





22A区全景

手前が園路側。左奥には造り出しが位置する。



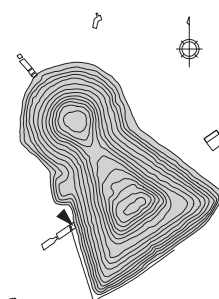
22A区溝004SD遺物出土状況

墳丘部分で検出した溝004SDから、近世から近代までの遺物に混じって、円筒・朝顔形埴輪、脚付連結須恵器が出土した。



22A区墳丘部分(a)完掘状況

左が墳丘（前方部）側。公園整備時の盛土直下に基盤層が露出する。溝004SDは薬研堀状に掘削される。





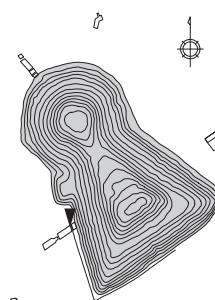
22A区溝004SD土層断面

埋土は固く締まった粘土層で、
墳丘側に基盤層に接して嵌入する
層が観察される。



22A区玉石垣間(b)完掘状況

基盤層までが削剥された状態。
周濠が存在したとすれば、底面の
高さは標高3.4m以上に求められる。



22A区溝003SD土層断面

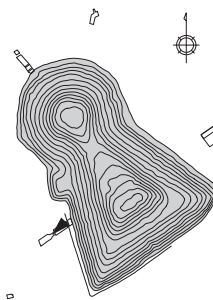
溝は墳丘（前方部）に沿って掘
削される。断面形は「V」字形に
近い。埴輪の出土は墳丘側に多い
傾向にある。





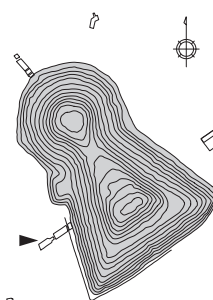
22A区玉石垣外側(c)完掘状況

手前が墳丘（前方部）側、奥が園路側。中世以降に基盤層まで削剥される。溝002SDから奥が高く（標高3.8m）、手前が低い（標高3.5m）。



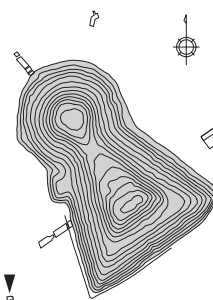
22A区溝002SD完掘状況

左が墳丘側、右が園路側で溝の左右で高低差がある。溝の断面は栗研堀状で、繰り返し掘削される。



22B区土層断面

公園整備時の大規模な造成の下位に基盤層（標高5.0m）を確認した。





上：史跡 断夫山古墳遠景

西上空から。右奥に熱田神宮。令和3年12月22日撮影。

下：史跡 断夫山古墳東側近景

前方部西側に設定した20区で周濠外側斜面を検出。

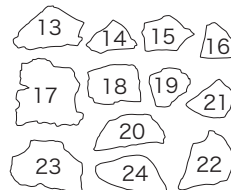
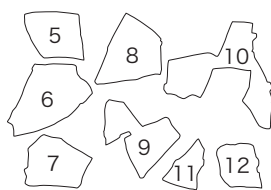


上：20区円筒・朝顔形埴輪（1）

周濠015SD下層（5～12）

下：20区円筒・朝顔形埴輪（2）

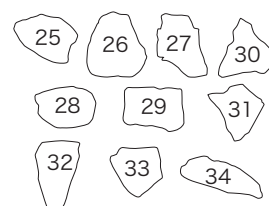
周濠015SD下層（13～24）





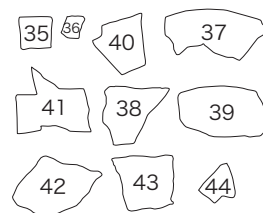
20区円筒・朝顔形埴輪 (3)

周濠015SD下層 (25~34)



20区円筒・朝顔形埴輪 (4)

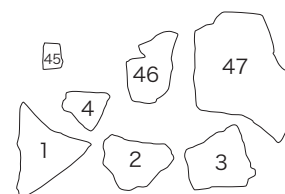
周濠015SD下・上層 (35~44)



20区・試掘調査

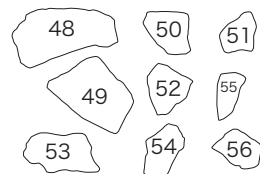
円筒・朝顔形埴輪

周濠015SD上層 (45~47) ・
試掘調査 (1~4)



21A区円筒・朝顔形埴輪

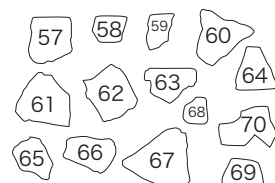
墳丘部分(a)客土 (48~56)



21A区・21B区

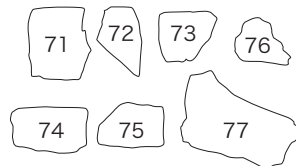
円筒・朝顔形埴輪

21A区玉石垣外側(c)周濠状の
落ち込み001SD (57~68) ・
21B区緩斜面(周濠) 010SD
(69) ・拡張部分 (70)



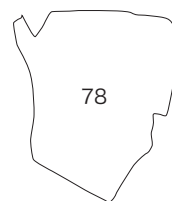
22A区円筒・朝顔形埴輪 (1)

22A区墳丘部分(a)溝004SD
(71~77)



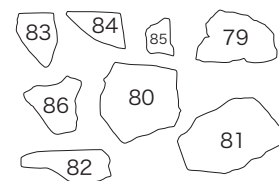
22A区円筒・朝顔形埴輪 (2)

墳丘部分(a)客土 (78)



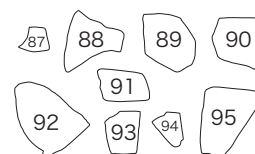
22A区円筒・朝顔形埴輪 (3)

墳丘部分(a)客土 (79~86)



22A区円筒・朝顔形埴輪 (4)

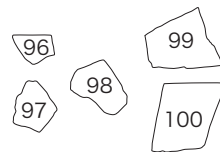
墳丘部分(a)客土 (87~92) ・
墳丘部分(a)表土 (93~95)





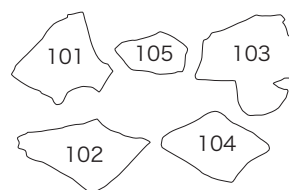
22A区円筒・朝顔形埴輪 (5)

墳丘部分(c)溝002SD
(96~99)・
玉石垣間(b)攪乱 (100)



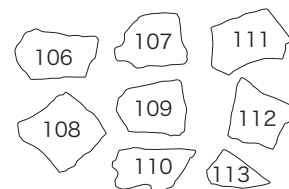
22A区円筒・朝顔形埴輪 (6)

玉石垣間(b)溝003SD
(101~105)



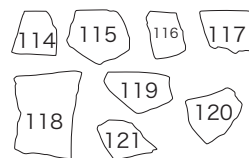
22A区円筒・朝顔形埴輪 (7)

玉石垣間(b)溝003SD
(106~113)



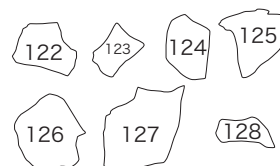
22A区円筒・朝顔形埴輪 (8)

玉石垣間(b)溝003SD
(114~121)



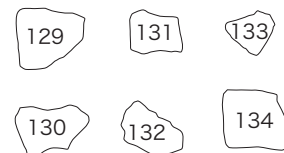
22A区円筒・朝顔形埴輪 (9)

同玉石垣間(b)溝003SD
(122~128)



21A区・22A区形象埴輪

21A区形象埴輪 (129)
22A区形象埴輪 (130~134)





埴輪の各種技法等

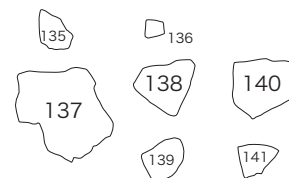
透孔周囲のへら記号の描出、描線の重なり (6)
突帯設定技法の凹線、突帯剥離部分に残る赤彩 (61)
外面に残る紐ずれと思われるような圧痕 (67)
外面の叩き、それに対応する内面の無文当て具痕 (127)

顕著な自然釉の付着 (10)
蓋立飾受部内面の飾板の貼り付け、赤彩 (130)
半乾燥状態で指をかけたことによる透孔の歪み (101)

20区・22A区須恵器

20区須恵器 (135・136)

22A区須恵器 (137~141)



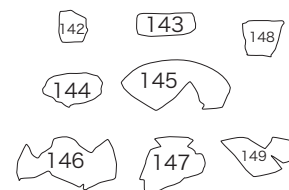
20区古墳築造以前・以後の遺物

古墳時代の土師器 (142) ・

古代以前の土製品 (143) ・

中世の土器・陶磁器

(144~149)



21A区古墳築造後の遺物 (1)

中世の土器・陶磁器

(189・190・192~198)



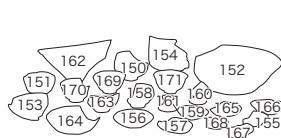


上：20区近世の遺物（1）

土器・陶磁器（150～171）

下：20区近世の遺物（2）

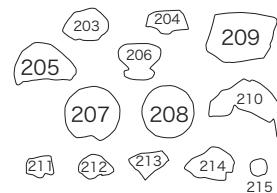
土坑009SKの土器・陶磁器（172～187）・
石製品（188）



22A区

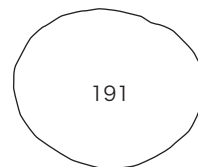
古墳築造以前・以後の遺物

中近世の土器・陶磁器
(203~211・213~215)・
古墳時代の土師器 (212)



21A区古墳築造後の遺物 (2)

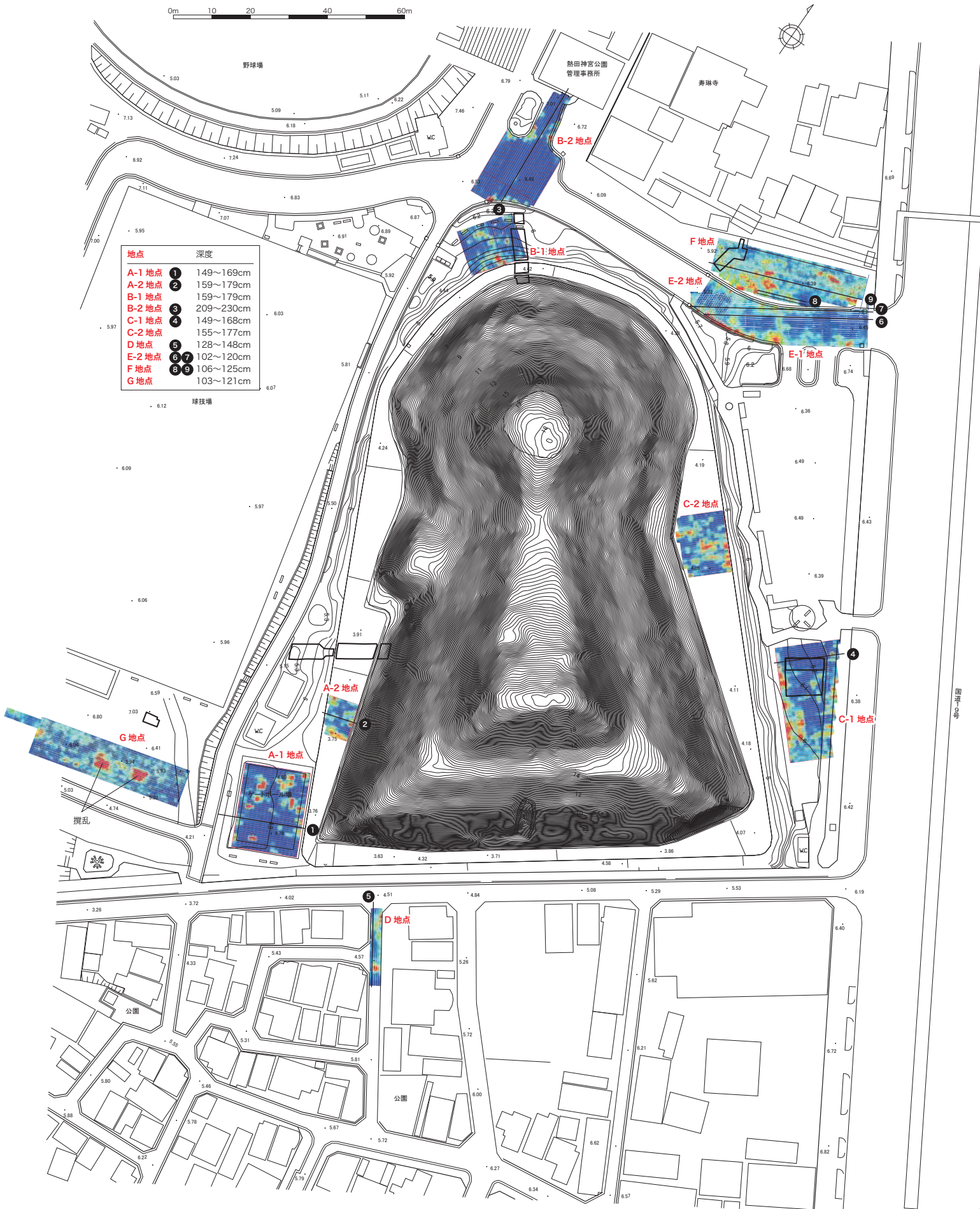
墳丘部分(a)客土の五輪塔
(191)



22A区古墳築造後の遺物

耐火煉瓦 (216)

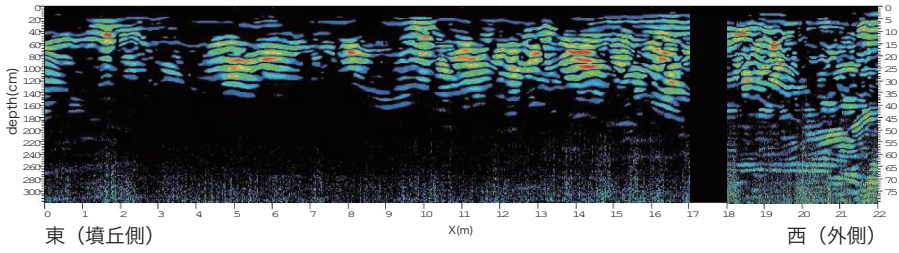




断夫山古墳地中レーダー探査 タイムスライス反映図 (1:1,250)

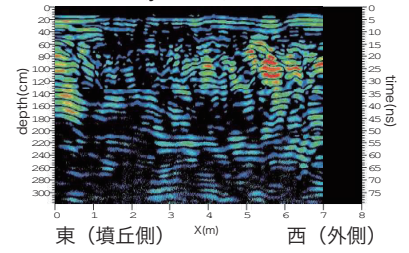
① A-1 地点 プロファイル図

測線 030(x=14.5m)



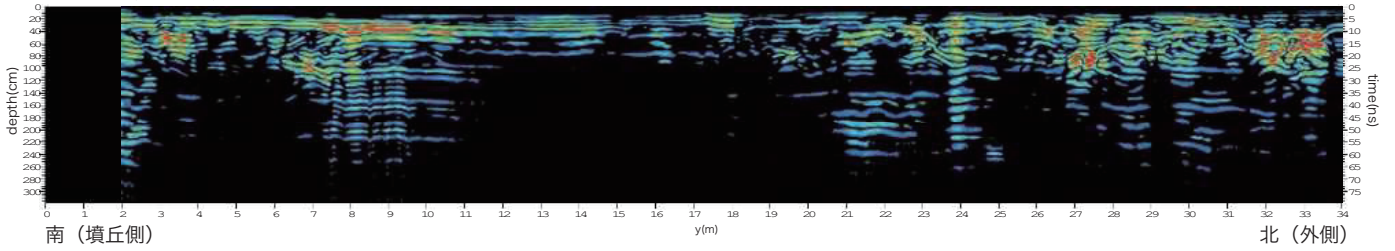
② A-2 地点 プロファイル図

測線 012(y=5.5m)



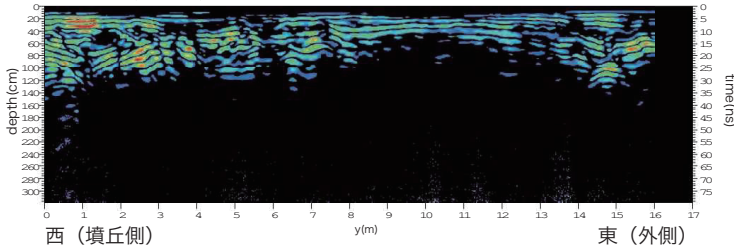
③ B-2 地点 プロファイル図

測線 018(x=8.5m)



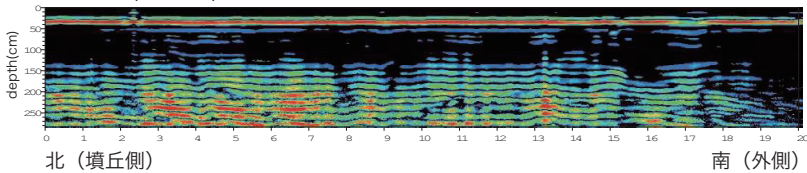
④ C-1 地点 プロファイル図

測線 010(x=5m)



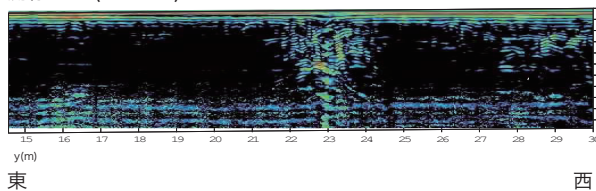
⑤ D 地点 プロファイル図

測線 006(x=2.5m)



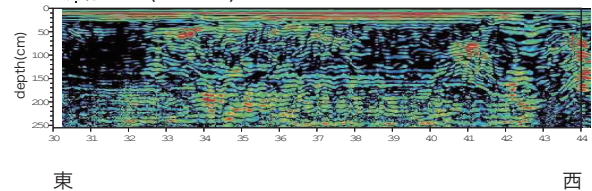
⑥ E-2 地点 プロファイル図 (1)

測線 014(x=6.5m)

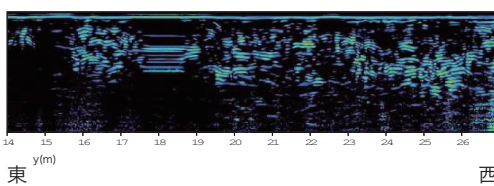


⑦ E-2 地点 プロファイル図 (2)

測線 018(x=8.5m)

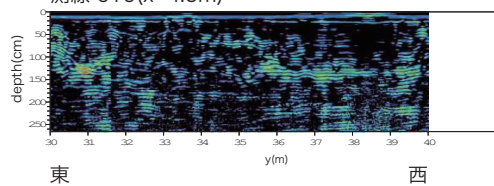


⑧ F 地点 プロファイル図 (1)



⑨ F 地点 プロファイル図 (2)

測線 010(x=4.5m)



各地点のプロファイル図

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第226集

史跡 断夫山古墳

2024年3月31日

発行 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 西濃印刷株式会社